
SF

霞川悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SF

【Nコード】

N8716H

【作者名】

霞川悠

【あらすじ】

「この学園で誰が一番強いのかな?!」国立ペロポネソス学園生徒会長、竹島千草たけしま ちぐさの思いつきによってとんでもない行事、スクールファイト、略してSFが開催された。その参加者の中には、狼の血が流れている少年、与那国司よなぐに つかさがいた…。学園バトルファンタジーな霞川悠第3作!後のほうになるにつれてシリアスに…そしてR15になる可能性あり。

S F?!(前書き)

もう一つの連載、アイケンとは雰囲気も設定も違います。

こちらはシリアスやバトルが多めになりますね。

ではどうぞ。

S F ? !

ある人は言った。狼みたいだと。
退治する者は思った。殺されると。

「G R R R R …」

人間とは思えぬ唸り声が戦場に響く。

「これが与那国の血…?!」

その狼みたいな男と対峙した男は叫んだ。
そして後悔した。何故こんな男に勝負を挑んだのかを。

「な…何だよこいつ…」

すると狼のような男は少し笑ってこう言った。

「与那国の血は狼の血が流れているんだ」

「え…?」

その狼のような男は正気であった。
そして彼は恐れをなした男には斬り掛からずに戦場を立ち去った。
取り残された男は地面に尻餅をつき、息を深く吐いたのだった。

国立ペロポネソス学園。

全校生徒の量が半端なく多いマンモス校である。

そして、この学校に生徒会長の思いつきで始まったスクールファイト、略してSF。

この学園で一番強いのは誰か?!

一番強い奴にはこの学園を牛耳れる特権をもらえる!

生徒会はこの二言を掲げて参加者を公募した。

そして：参加者は25人。当然参加者は企業秘密となっている。

その中に、狼の血が流れている少年、与那国道場師範代、与那国司よなぐにつかさもいたのだった：

スクールファイト（9月5日～12月25日）

ルール

1 バトルは授業、テスト、学校行事時間外のみで、場所は学園内

のみでのバトルロワイアル

- 2 一般生徒、一般人を大勢巻き込むところでのバトルは禁止
- 3 初め、参加者はそれぞれ自分のエントリーナンバーを書いたバッジを3つ所持している
- 4 負けたら自分のバッジを1枚（自分のエントリーナンバー）だけ相手に渡す（負けの基準は降参、気絶）
- 5 自分のエントリーナンバーを書いたバッジを全て失ったら、二度と今回のSFに参加できない
- 6 バッジは幾つでも所持可能、ただし、バッジは全て所有（持っていれば良いので、人のバッジは隠しても良い）し、自分のバッジは全て胸に装備
- 7 武器は相手を殺さなければなんでもOK
- 8 バトル中は無法とし、殺人と強姦以外は全て許される
- 9 勝者はバッジを全て所有した者か、終了期間（12月25日）に達したときに一番バッジが多い者、または最後に残った一人
- 10 戦闘時はバッジを胸に装備したもの同士で行なわれる
- 11 偽者のバッジを作るのは禁止

以上を守らねば、学校側から厳しい措置（退学など）が執られる。

「この学園で一番強いのは誰?! スクールファイト、開催決定!!」

生徒会長、竹島千草^{たけしま ちぐさ}が宣言し、SFが始まったのだった。

S F ? ! (後書き)

更新は夏休みよりは遅くなると思います。

第1話 思いつきで始まったとんでもない行事（前書き）

うわぁ…アイケンと同時連載していると違和感がすごい…

何か…まあいいや。そして実はアイケンより女性キャラ量が多い。

第1話 思いつきで始まったとんでもない行事

その日、俺はいつもよりちょっとだけ長く寝ていた。そう、それだけ。たったの5分。なのに何だ？この仕打ちは何だ？

「布団に水ぶっ掛けて起こす奴がいるかあああ！！」

「ここにいるわよ！！」

俺の目の前に立っている制服の女。腰に手を当てて俺を威圧している。

「自慢することか？！布団乾かさなくちゃいけないだろーが！！」

「乾かせばいいじゃない！」

「ぐぐ…他人事だと思って…」

俺は唇を噛む。こいつ…あまみ ねね奄美寧々は俺の幼馴染だ。俺の道場に通い、剣道を習っている。あんまり強くないけど。

「若様！どうなされたのですか？！」

「うおっ！今度は何だ？！」

そんなとき、突然俺の部屋の襖が思いつきり開けられた。

「若様…なんでお体がそんなに濡れて…」

「あ、あーそれは…」

「朝稽古ですね！さすが若様！とうとう真面目に稽古をなさろうと
しているのですね！」

「そ、そ、そうだよ！」

俺は誤魔化すことにした。だってこの人は口うるさい。
おっと…この俺を若様と呼ぶこの人は西表蓮香いりおもてれんかといい、俺のお目付
け役、ボディーガード…まあそんなところだ。

「…汗にしては随分とクリアな匂いですが」

「うえ?!」

「この匂いは若様の汗の匂いではございません！」

レンが俺に詰め寄る。というかこの人はある意味の「俺」マニアで、
俺のことはなんでもお見通せるらしい。
ていうか汗の匂いとか記憶するなよ。

「では何故こんなに濡れて…おお?!ここにバケツが?!と、いう
ことは…お花の水遣りに失敗したのですね?!」

「何でそうなる?!犯人を割り出せよ?!」

俺は部屋の隅で知らん振りをしている寧々を指差した。
天然ボケなのか?未だに分からぬ。

「こら若様。人を指差してはいけません」

「…」

これでもこの人、俺と同年の高2なんだぜ。
というかなんか会話がズレる…疲れる…

「だあああああ！！！！俺は着替えるからお前らは出てけ！！」

俺はレンと寧々の二人を部屋からたたき出し、元の平穏状態を取り戻した。

「ふう…」

「あ、バケツは片付けておいてください」

「開けるなよ?!」

ちょうど半裸状態のときに、レンが最後にそう言って襖を少し開けた。

「ではそれだけです」

そう言って彼女は襖を閉めた。どんだけマイペースなんだ…
俺は制服を見た。今日からまた学校か。
夏休みも終わり、今日から9月。

「やれやれ…」

俺は制服ではなく、胴着に着替え、道場に向かう。

そういえば自己紹介がまだだった。

俺の名前は与那国司^{よなぐに つかさ}。与那国道場の師範代だ。

というか単に俺の父が師範だから、っていう理由だ。

寧々よりは強いものの、レンには一度も勝てたことがない。
思えばレンも幼馴染なんだよな、一応。

「おはようございます」

俺は道場に一礼して中に入った。

「おはよう司。朝稽古にしては遅い時間だな」

「は、ははは…」

父親に言われ、俺は頭を掻く。朝稽古は午前5時からやるらしいが、夜更かし上等の思春期がそんな時間に起きれるはずもなく…

「まあいい。素振りはしていくんだろ？」

「はい」

俺は自分の竹刀を取り出し、つばをはめ、構えをとった。

「寧々、お前もやるか？」

「い、いえ…もう制服ですの…」

寧々はやんわりと否定した。というかこいつは単に面倒くさいだけだろう。

「こら司！よそ見るな！」

「は、はい！」

怒られてしまった。というかこの父親はかなり視野が広い。さすがというところか。ダテに日本で5指に入る実力といわれているだけある。

「司、お前にはこの道場の師範代としての…」

また始まった。この父の欠点の一つは説教好きというところだ。聞いてられない。というか同じことしか言わないから飽きた。俺は適当に話を聞き流しながら、日課の素振りを終わらせた。

「おっ。やってるね」

「トモ姉おはよう」

「おはよっ」

俺に笑顔で挨拶してきたのは俺の姉貴分のトモ姉こと、屋久巴やくともえだ。この人の家は弓道をやっており、トモ姉自身も弓道はすごい腕前。姉と呼んでいる理由は、お姉ちゃんっぽいからだ。ちなみに年は俺より一つ上。

「珍しいね、こんな時間に」

「久しぶりに朝稽古覗きたくなったの。あ、レンちゃんと寧々ちゃんおはよ」

トモ姉は俺との挨拶もそこそこに、道場の中にいるレンと寧々にも挨拶した。

「おはようございます、巴姉様」

「おはようございます、巴お姉ちゃん」

ちなみにこの二人も巴をお姉ちゃん扱いにしている。
まあ昔からの付き合いだしな。

「俺はシャワー浴びてるから、レンもほどほどにしろよ」

「はい、若様！」

「…若様ね」

そういえばずっと「若様」に言及しないのは、無駄だったからである。

一度、「若様」はやめてくれ、と言ったのだが、では「ご主人様」にします、と言われたので、泣く泣く「若様」を容認した。

個人的に「ご主人様」でもいいが、外で言われると恥ずかしくて死にたくなる。

俺はそんなことを思いながらシャワールームに入っていた。

「では行ってきます」

「うむ。寄り道はするんじゃないぞ」

「はい」

俺は父に挨拶し、学校へと向かう。あ、レンと寧々とトモ姉も一緒だ。

「よう！司！今日も女侍らしてんな？」

「おい、ジョージ。お前は侍らせないのか？」

「侍らせられるなら侍らせるわ！！」

俺にそう言って話しかけてきたのはジョージ。一条次郎。いちじょうじろうだからジョージ。

別にハーフとかでもない、エセ外国人。

「一条様おはようございます」

「レンちゃんいつ見てもクールだね」

ジョージはレンに挨拶され、感激した。まあレンは礼儀正しいから

な。

「ところで司。お前こんな噂を聞いたことあるか？」

「何だ？」

すると突然ジョージが声を小さくして俺に話しかけてきた。
大抵はロクでもないことだが：

「生徒会が何か大きいこと企画してるんだってよ」

「大きいこと？」

俺はジョージに訊き返す。

「ああ。何やら騒がしいことらしいぞ」

「騒がしいこと？そんなの学校の先生とかが許すのか？」

「だがな、生徒会長はあの「竹島千草」たけしま ちぐさだ」

「ああ：彼女を止められるのは「長篠の戦の織田信長レベル」の間だったな」

俺は至極納得する。とにかくこの生徒会長はやることがハチャメチャだ。

1学期にあった文化祭も、プログラムにないことをしたり、後夜祭の後に超後夜祭をやったりした。

「そういうこと。ま、実際どうなるか分からないけどな」

「そうだな」

俺はジョージたちとそんな会話をしながら学校へと向かって行った。

「はいはい！重要なお知らせがあります！」

「ん？」

学校の敷地内に入ったとき、何やら生徒会の人たちが何か言っていた。

「今日の始業式が終わった後、体育館に集合してください！」

どうやら生徒会長直々に呼びかけているようだ。

ジョージの言ったこともあながち嘘ではないらしい。

「な？俺の言ったとおり」

「そうだな」

俺は少しだけ頷いた。

一体何が始まるんだ…？

「ねえ司。何かあるのかな？」

「さあな」

俺は寧々の質問にそう答え、いつもの教室に向かう。

…何だか嫌な予感がする。

「じゃあね」

「ああ」

トモ姉と別れ、俺とレンと寧々とジョージは同じ教室に入った。

まあ実はクラスメートだったりするんだよ。

俺は生徒会の「お知らせ」の方が気になり、今日一日何も集中できなかったのだった。

「これより、生徒会による重要なお知らせを発表いたします」

ワアアアアア！！

歓声がかなり挙がる。まあ生徒会長は容姿が端麗のせいか、人気を博す。

俺にとっては縁のないことなので、気にはしてない。

「みんな！こんにちわ〜〜〜！」

「こんにちわ〜〜〜！！」

生徒会長の挨拶にかなりの生徒達が挨拶を返す。

恐ろしいほどの会長人気。

「今日はね、みんなに大事なお知らせがあるの〜」

生徒達は一気に静まり返る。

「私ね、思ったんだ。この学園で一番強いのは誰だろう？」

何を言っているんだこの人は。幼稚園児か？

「それでね、決めたんだ。調べればいいじゃん、って」

「…」

俺は押し黙るも、嫌な予感が消えない。
まさかこの人、とんでもないことを考えてるんじゃない？

「スクールファイト！略してSFを開催することにしました~~~~
！！」

ワアアアアア！！

周りから大きな歓声が挙がる。というかお前らツツコミはどうした。
この人のペースに吞まれるなよ。

「優勝者にはね様々な特権がつくんだよ~~。学食無料とか、ハー
レムOkとか」

「なぬ？！」

ジョージが反応する。いや、お前は弱いからアウトだろ。

「参加希望の方は明日、応募してね~~~！ルールのは掲示板上に
張っておくからね？」

ルール：か。ずいぶんと大それた企画だな。

まあ俺には関係ないか。しかしこのときレンの目が輝いていたこと
に俺は気がつかなかった。

「多い場合は抽選で25名にまで絞るからね~~~！」

「は~~~~い！！」

男共、自重しろ。聞いてて恥ずかしくなる。
そしてそんなドタバタ劇は終了した。

「…」

俺は家に帰って無言になった。
何せ、父親から意外なことを言われたのだ。

「父上、もう一度言ってもらってもいいですか？」

「んぬ？ 何度でも言うぞ。そのスクールなんちゃらにしろ」

「…エエ~~~~~?！」

俺は父親の発言に驚いてひっくり返りそうになる。
父はこんな人だったか？

「我が道場の門下生を増やすいい宣伝になりそうだ。だから頼む！」

「ヒイ…」

そんな怖い顔で土下座しないでください。
それは脅し土下座ですよ。

「若様、私も賛成です。最強は与那国道場だということを思い知らしめてやりましょう！」

「レン…」

レンも賛成かよ…なんでこんなのに俺が…

「司！お前しかいないんだ！レンも出てくれるそうだから！」

「へ？」

俺がレンの方を見ると、レンは軽く頷いた。

そこからは自信が読み取れた。まあ確かに俺よりは余裕だろうけどな…

「若様！ご決断を！」

「う…わ、わかったよ！やればいんだろ？！」

俺のこの言葉で俺のSFが始まったのだった。

このとき俺はまだ気楽に考えていた。

所詮は学校でのお遊びだと。その考えが甘いと気づかされるのは、すぐ後のことであった…

第1話 思いつきで始まったとんでもない行事（後書き）

登場人物紹介

よなぐに つかさ

与那国司

与那国道場師範代。本人も結構な腕前。

ただ、あまり練習が好きではない、どちらかと言うと天才肌の人間。ただ、剣道は相当好きで、家が道場であることには満足している。レンには一度も剣で勝てたことがない。

身長は175センチ。

いりおもてれんか

西表蓮香

通称レン。与那国道場に通っている、というか住み込み。

なので、司とは幼馴染なのだが、何故か主従関係や母子関係みたいである。

剣の腕は相当なもので、道場内若手ナンバー1、全体でナンバー4の実力者。

天然ボケみたいなのところもあり、司を困らせることも。

外見はショートカットの髪、身長は154センチとかなり小柄。しかし、胸は意外と大きく、さらしで隠している。

第2話 司参戦！エントリーナンバーは17番！（前書き）

バトルは次回からですね。

この小説は普通の生活の学園パートと、道場内の特訓パート、そしてバトルパート、非主人公視点パートの4つに分かれています。

ああ…バトルなんて初めてだから不安でしょうがない…

第2話 司参戦！エントリーナンバーは17番！

「はぁ…」

ため息を吐きたくなるものだ。

今から俺はSF参加申込書を出しに行かなければならない。

「よっ司！どうした？ため息なんか吐いて」

ジョージが俺に話しかけてきた。

「いや…」

このことは秘密にしておいた方がいいのかな？

もしSFが始まってしまったら参加者と知られてしまうと不利になってしまうし。

「今日、下痢気味でさ…」

俺は誤魔化すことにした。

「ふーん、ところでお前、SF出るか？」

俺は一瞬ドキリとした。心を読まれたかと思った。

「どうしてだ？」

「だってお前ん家、道場だろ？それにお前も結構強いらしいじゃん」

「それは一般人と比べてだ。この学校には化け物みたいな強さの奴が何人かいるぞ」

俺は一人の女性を思い浮かべた。この学校で一番強いと思われる人…

「風紀委員長の宮島先輩とかか？」

「まあ…な」

ジョージも同じことを考えていたらしい。

しかしこれはバトルロワイアル。俺にも勝機はあるはずだ。

「ま、お前が出る出ないは俺には関係ないさ。俺は絶対出ない。あ、でもハーレムか…」

「まあこんなの下らなそうだしな」

「何がくだらないだって…?!」

「え？」

俺の後ろに生徒会長が立っていた。

「私の考えた企画を下らないなんて、核兵器を無断で使用する事以上許せないことだよぶんすか」

この人は何で「ぶんすか」を自分で言っているんだ？

発言がいちいち子供っぽい人だな…と頭を掻きつつ思った。

「こいつの無礼、失礼いたしました…!!」

「おいジョージ」

ジョージが明るい調子で頭を下げた。

「そ、それから…自分は一条次郎と言うものでして…」

「知ってるよ」

「「なぬ?!」」

ジョージと声が被った。この人、ジョージのこと知っているのか?!

「それと君が与那国司くんでしょ?」

「お、俺の名前まで…」

俺の名前も知っているとは…この人は何者なんだろう?

「生徒会長なんだから全校生徒の名前ぐらいいは覚えておかねえとね。
エヘ、偉い?」

「はい!! それはもちろん!」

ジョージが鼻息を荒くしながら答える。
興奮しすぎだ、アホ。

「とーにかーく! 司っちはさっきの発言を撤回すること!!」

「は、はあ…」

徐々にこの人のペースに巻き込まれる俺。
でも人気がある理由は分かる気がする。

「ま、いいや。じゃあね」

「はいっす！さようならっす！」

ジョージが興奮しながら挨拶し、俺は手を軽く振るだけで済ませた。
彼女は終始笑顔で、俺達に手を振っていた。
というか俺、撤回してないし。

「はあ…マイエンジェルになっちゃった…」

「…」

俺はうっとりとしているジョージを放って、目的を思い出す。
早くしないと受付が締め切られちゃうかもな…
俺は生徒会室に向かうことにした。

「あつれ〜？下らないって言ってた割に参加するんだ〜？」

「う…」

しっかりと生徒会長が俺に明るく嫌味を言ってくれた。
何だかとても居辛くなっている。

「ま、司っちは強いから大歓迎だけどね」

「俺が強いって…」

何をどう判断したんだ？この人は。

「司っちの家って道場でしょ？それに結構剣術が上手いって噂だよ
〜」

「そ、そうなんですか…」

この人の情報量、情報収集能力が半端ないのは分かった。

「与那国司くん」

「あ、はい」

そして俺の前に生徒会長と瓜二つの顔の女性が現れた。

「申し込みは受理いたしました。参加が決定したらエントリーナンバーの書かれたバッジを送ります。それではよい運を」

「あ、はい！」

この真面目そうな女性が生徒会副会長の竹島千早たけしまちはやといい、生徒会長の竹島千草の双子の妹だ。
明らかに妹の方が大人びているのだが。

「あゝ。今失礼なこと考えてたでしょう。だめだよ、れでいーに失礼だよ」

「は、はあ…」

俺はこの人に何かいろんなことを言われながら生徒会室を出た。

…やってしまった。

…申し込んでしまった。

…後には引けなくなってしまった。

…ま、なるようになるだろ。

俺はレンもいることだし、と気楽に考えた。

別に優勝賞品が欲しいわけでもないし。

俺はいつもの足取りで教室に戻る。その際、廊下がいつもより騒がしいのはSFのせいだろう。

「司ちゃん！」

「お、トモ姉」

俺に話しかけてきたのはトモ姉だった。

「一緒にお昼食べよっ？」

「いいけど…」

残念だが、昼ご飯は用意していない。

パンを買いに行かないと。

「俺、食堂にいかないと」

とはいえ、この時間に行ってももうパンはほとんど売り切れているだろう。

「大丈夫大丈夫！お姉ちゃんが二人分作ってきたんだよ！エッヘン」

「マジで?!」

トモ姉は料理がすごく上手い。

だから昔からトモ姉の料理は好きだった。

元々、早くに母親を亡くしたので、トモ姉は俺の母親代わりにもなってくれている。

そして父、レン、寧々は料理の腕が壊滅的なので、トモ姉がよく作りに来ていた。

ん？トモ姉がいないときはどうしたって？俺が作ってます、はい。上手くないけど、他3人が作るより死者が出ないだけマシだ。

「レンや寧々も誘おうか？」

「もう誘ったんだけど、二人とも忙しいんだって」

「へえ…」

レンはまあSFについてだろう。寧々は何だ？

「じゃ、屋上へレッツゴー！」

「おー」

俺はトモ姉と一緒に屋上でお昼ご飯を食べた。

そのときSFの話は全く出なかった。

興味ないのだろうか？ まあトモ姉には向かないかも。バトルロワイアルだし。

翌朝、俺の元にバッジが送られてきた。

「当選おめでとうございます。エントリーネーム与那国司。エントリーナンバーは17番です…」

俺は17と刻まれたバッジとともに届いた手紙を読み上げた。

「当選しちゃったんだな…」

俺はぼんやりと自分のバッジを見つめる。

確かこれを3つつけて戦闘する。負けたら一つ渡さないといけないんだよな。

で、武器は相手を殺さなければ何でもOk…

俺は傍らにある木刀を見る。

「…とりあえず、これで良いかな？」

俺は結構素振りにも使っており、使いやすい木刀を選んだ。

これなら相手を骨折、脱臼とかに済ませられる。頭部を思いっきり殴らない限り。

「若様」

「ん？」

襖の向こう側からレンの声が聞こえた。

「開けてもよろしいですか？」

「ああ」

そして一礼してレンは入ってきた。

本当に礼儀正しい奴だ。

「SFのバッジは届きましたか？」

「まあな」

俺は17と彫られたバッジをレンに見せる。

「ちなみに私は20番です」

レンは俺に20と彫られたバッジを見せた。

「そうか」

「若様、勝負は明後日の月曜からです。今から作戦会議を開きましょう」

「え…」

何だこのやる気満々な人は…

別に遊び半分で出てる奴とかもいるだろ。

「何言ってるんですか！先手必勝です！まず、参加者を確認しますよ？」

そう言って彼女は紙に何かを書き出した。

17 若様

20 自分

「えーと…」

「まだこれしか分かっていませんね？つまりあと23人の参加者が

いるってことです」

「そりゃそうだ」

俺は仕方ないので、聞くことにした。

「ですが、出そうな人はいますよね？」

「…風紀委員長の宮島先輩」

「そうです」

俺は強い人を思い浮かべて、彼女が真っ先に出た。

「彼女は優勝候補でかなりの強敵です。もし、出会ってしまったなら逃げるのが賢明でしょう」

「その前にこんなのに先輩が出るのか？」

「いえ、それは分かりません。しかし、様々な事態を想定するに越したことはありません」

レンはすごく真面目に言った。

正直レン一人で出るよと思った。けど…どうして彼女はこんなに出たがるのかとも思った。

「で、結局のところ、俺はどうすればいい？」

「そうですね。まずは情報収集からいきましょう。参加者の情報を集めることから始めましょう」

「わかった。で、言いたいことは以上で？」

俺はレンにそう言った。

「夜更かしはほどほどに」

「へーい」

この人、俺のお母さんみたいだ。
だからつい甘えることもあるんだよね…

「では、おやすみなさいませ」

「ああ。レンもおやすみ」

俺はレンとおやすみの挨拶で別れ、布団を被った。
全くレンの足音が聞こえなくなると同時に俺は布団から出た。

「さ、ミンテンドーTSでもやろう」

俺は密かに買ったTSを取り出し、ひっそりとプレイしたのだった…

―某所―

「この戦い、どう思う？」

「生徒会長の思い付きらしいが…どうかな」

部屋で二人の男が話をしている。

「実際、すでに戦いが始まっていることに気づいているのかな？ 参加者は」

「いるだろう。覚悟のある者は」

「副会長…」

そこに一人の女性が話に加わった。

「優勝予想など…下らない。予想外になるようにバトルロワイアルなのだ」

「案外半端な覚悟の奴が勝ったりしてなハハハ」

「安心しろ。そういう奴は真っ先にやられるようになっていく」

その女はそう言いながら、冷たく月を見ていたのだった。

第2話 司参戦！エントリーナンバーは17番！（後書き）

登場キャラ紹介

あまみ
奄美寧々（ねね）

主人公の幼馴染で、与那国道場に通っている。

ただし、練習をサボることが多く、あまり強くはない。

彼女はSFには何も関係が無さそうだが：

身長は162センチほど。

やくともえ
屋久巴

主人公、レン、寧々の姉的存在の幼馴染。

料理の腕前がかなりのもので、与那国家によく作りに来ては一緒に食べている。

弓道をやっており、中々の腕前らしい。

身長は160センチほど。

第3話 司の初戦！恐ろしい鎖使い！（前書き）

バトルスタートです。

しかしバトル描写は初めてなので、すごく不安であります…
もし、何かアドバイスがありましたら、教えてください。

第3話 司の初戦！恐ろしい鎖使い！

「は~~~~い！みなさん注目~~~~！」

朝の全校朝礼で生徒会長が朝礼台で叫んでいた。

「分かっていると思いますが、今日からSF始まり~~~~す！というか始まっちゃってま~~~~す！！」

一応開始時刻は今日の0時から。つまり今より9時間前からスタートしている。

そんな時間に学校来る奴なんているのだろうか。

「とりあえず、参加者の皆さんは、頑張ってね~~~~！」

生徒会長は笑顔でそれを告げ、段を降りた。

妙に軽やかなステップで、壇を降り、彼女はトテトテと生徒会のみんながいる場所に戻っていった。

「始まったんだな…」

残念ながら俺にそんな実感は湧かない。

一応木刀を竹刀入れに入れて持ってきているものの、使うのかどうかすら不明。

それに、剣を向けるのは武器を持っている相手のみ。

さすがに武器を持たぬ者に刃を向けることは出来ない。

これは父の教えの一つでもある。

「若様。これからは私と一緒に行動してください」

「…そうなるよな」

どうやら口うるさいレンと一緒にいなければならないらしいな。
まあ一人になれば狙われてしまうだろう。

「お願いしますよ」

「ああ」

俺は念入りに聞かれた質問も適当に流してしまった。

まあなるようになるだろ…

俺はポケットの中のバッジをぎゅっと握り締めた。

しかし痛かったので、すぐにポケットから手を抜いた。

そんな朝礼は終わり、いつもと同じ日常が始まった。

何かSFのことなど誰も気にしていないし、俺には戸惑いばかりだ。
寧々もトモ姉もジョージもいつも通りなのだ。

「よっ！司！メシ食いに行こうぜえ！」

「そうだな…」

俺はジョージに連れられ、外に出た。

「お待ちください若様」

しかし、俺はレンに服の袖を掴まれた。

「何だ？」

「若様、今日は私とお昼を食べる約束をしていました」

「え？」

そんなことあったかな？

俺は記憶の中を漁り始める。

しかし一向に思い浮かばない。

「なあそんな約束…」

「していました。お忘れですか？」

「何だ、お前レンちゃんと約束してたのかよ。それなら早く言え
って」

「…」

ジョージが俺から離れていく。

というか本当にそんな約束してたっけか？

「では若様、食堂に行きましょう」

「ジョージと行くところ一緒かよ！」

まあここで「私が作った弁当です。どうぞお召し上がりください」なんて言われるよりはマシだ。

これは命に関わる致命的な問題になりかねん。

「では参りましょう」

「…」

俺は結局レンに引っ張られて食堂へと連れて行かれた。

そして俺は最後まで「約束」を思い出せなかったのであった。

いつもと同じ帰りの風景。
クラスの奴らみんなもいつもどおり騒がしくおしゃべりなんかしている。

「…」

幼馴染の寧々も、悪友のジョージも、みんな意識していないようだった。

それとも俺が意識しすぎなのであろうか。
くだらない、くだらないと言っておきながら、結局一番気にしているじゃないか。

俺は少し深呼吸して、周りに溶け込むことにした。

「礼」

「さようならー」

そのうちクラス委員の号令でみんな帰っていく。
これもいつも通り。このクラスでの参加者は俺とレンだけなのだろうか。

「あれ？ 司、帰らないの？」

「あ、俺はちょっと先生に用事が…」

「ふーん。じゃ、私は帰るから」

寧々は俺とレンに手を振った。

まあ非参加者は巻き添えを食らわないうちに早く帰りたいところだろう。

「ああ。じゃあな。また明日」

「では気をつけてお帰りください、寧々様」

「あーはいはい」

寧々はうつとうしそうにしつつも、笑顔で帰っていった。
そして教室には俺とレンだけになった。

「…周りから人気が消えました」

「そうか」

レンはこれで話せる、みたいな風な口調だった。

「なあ、本当に残るのか？」

「はい、もし校門で待ち伏せされたら困りますからね」

レンは一度帰り、もう1度登校してくるところを狙われる可能性がある
あると言っているようだ。

さすがにそこまでする奴は…いない気がするけど。
でもレンがうるさいから口には出さない。

「それで…どうするんだよ」

「まずは様子見です。この教室は隠れ家にも、基地にもなります」

「そうかそうか」

「?!」

そのとき、レンの顔つきが変わった。

「どうした?」

「しっ! 誰か来ます」

俺の質問を速攻で打ち切り、扉に目をやるレン。

こいつの気配察知能力は尋常じゃない。

俺だってそこそこ優れている方だと思うが、レンは俺の3倍以上優れている。

「敵か?」

「分かりません…」

そして俺にも気配が伝わる。距離はこの教室まで60メートルほどの場所。

レンは気配が下の階にいるときから気づいていたので、やはり恐ろしい。

そして足音はどんどん近づいてくる。

俺達は扉の方を向いて身構える。

そうして足音は…俺達のいる教室の前で止まった。

「?!」

俺達は身を固くする。

ガラガラ

「？」

しかし扉は平然と開けられ、立っていたのは単なるクラスメートだった。

「あれ？与那国君と西表さん。まだ帰ってなかったの？」

「あ、ああ…何だ^{はばまじ}齒舞か…」

俺は安堵した。コイツは齒舞といい、気弱な性格のため、争いには向かない。

そして、同じ学年に双子の兄がいる。こっちは結構気性が荒いらしい。

「お前は何で戻ってきたんだ？」

「ちょっと忘れ物をね」

齒舞は自らの机の中を見る。

ちなみにグツチャグツチャだ。

「あつたゝ。これで今日の宿題はなんとかかなりそうだよ」

齒舞は随分無防備だ。正直構えている必要は無い。

しかし、レンは構えを解こうとしなかった。

「齒舞様。SFのバッジが落ちているようですが」

「ええ?!どこに?!」

「!」

「引っ掛かりましたね」

「あ!」

齒舞の顔が青ざめる。

それもそのはず、レンのカマ掛けに齒舞は引っ掛かり、俺達に敵と認識されてしまった。

「齒舞様、あなたにうらみはありませんが…」

「ちょ!ちょっと待ってよ!僕は君たちと争いに来たわけじゃ…」

「信用できません」

齒舞は心から困っているようだ。

まあ俺としてはどうしてこんな気弱な奴がSFに参加しているのかと思った。

「わ、わかった!僕のバッジを1枚上げるから許してくれよう!」

齒舞はあろうことか、自分のバッジをレンに投げつけた。

「それで勘弁してください!」

「?!」

俺とレンが仰天した。

まさか自分から不利になるとは：

「本当に忘れ物だけなんです…」

「レン…」

歯舞が困った顔をしたので、俺はレンを見た。

「：分かりました。若様がそう言うなら」

「じゃあな。次は多分やられるぞ」

「はい：肝に銘じておきます」

歯舞は心底安堵した表情になった。

それにしてもまさかこいつが参加していたとは。

歯舞が出て行き、俺はレンからバッジを見せてもらう。

「25番…」

どうやら歯舞は25番の参加者らしい。

「でもどうしてアイツが…」

俺は疑問に思う。どうしてあんな気弱な奴が参加しているのだろう。
やっぱりおもしろ半分か？

「分かりません。何か事情があるのかもしれませんが」

「…そうかな」

俺達は一応安堵して、気配が消えるのを待ってから、構えを解いた。

「レン、一応これは初勝利なのか？」

「…そのようですね」

レンはあんまり納得していないらしい。

まあ最初の戦いがこれでは不満にもなるかもしれない。レンには。

「じゃ、俺はちょっと出てくるわ」

「え?! 待ってください! 一緒にいるという約束は?!」

レンが俺に詰め寄ってくる。

しかし、俺にとっては少し困ったことだ。

「いやさ、トイレなんだよね…」

「そ、そうですか…」

レンは珍しく照れたように顔を赤らめる。

さすがのレンも、トイレまでは着いてこないらしい。

しかし、こういう風に照れるレンを見るのは珍しいな。

「何ずっと見ているんですか？」

「いや、何でもないよ」

しかし、すぐにいつものクールな表情のレンになった。
俺は軽くそれに答え、廊下に出て近くのトイレに向かおうとする。

「ふ」

俺は体を楽しむ。正直俺は気が抜けていた。

この戦いを甘く見ていたのだと思う。いくら木刀を肌身離さず持っていたとしても。

俺はトイレを済ませ、外に出ようとしたとき、後ろから風が吹いた。

「?!」

俺は急いで横に跳ぶ。この風は自然に吹く風ではない。

いわゆる殺気というものが吹かす、不自然な風。

案の定俺がさっきまでいた場所には鎖が刺さっていた。正確に言えば、鎖の先に付けられている刃が床に刺さっていた。

「な?!」

誰だか知らないが、俺を確実に仕留める気でいた：

「今のを避けるなんて、思ったよりやるわね」

女の声が聞こえてきたのは外から、いや、上の階からか。

レンに気配を気づかせないところを見ると、相当な手練だ。

まさか宮島先輩であろうか？

いや、宮島先輩は薙刀を得意としている。こんな鎖なんて使わない。

「おい！お前は誰だ?!」

「随分と威勢がいいわね。それ！」

「何だと?!」

俺にはまだ敵の姿が見えない。しかし、鎖だけは窓から、俺の方へと飛んでくる。

何て慣れた戦い方だ：こんな奴がウチの学校にいるのか?!

俺は飛んでくる鎖を木刀で防いだり、ステップで避けているが、このままでは埒が明かない。

元々こんなところにずっといたら俺が不利だ。

俺は外へ逃げようとするが：

「無駄よ」

「と、扉が：

いつの間に扉は鎖で固められ、しっかりと固定されていた。つまり、逃げ道は完全になくなった。

「あなた、このSFを遊び半分に参加してた口でしょ？」

「何…?」

顔は見えないが、口調はすごく冷たかった。

「このSFを舐めてかかったら：死ぬわよ。私のように本気で参加している人はたくさんいるわ。今日の早朝に分かったけど」

「そ、そんなに…?!」

俺は甘く見ていた。この戦いに本気で参加している奴がいたなんて……いや、レンがそうだ。何で俺は油断していた?!
俺は自分の甘さを後悔した。

「そうよ。さあ冥土の土産に教えてあげたんだから、ここで死になさい!」

「いや、殺すのはダメじゃ……」

しかし鎖は俺の心臓を直接狙ってきていた。
俺は木刀で、何とか鎖をはじく。

「くっ……」

「中々しぶといわね……」

向こうの声に苛立ちが出てきた。

そりゃあ俺だって一応、与那国道場の師範代だ。

それなりの反射神経はある。特に剣道は反射神経が重要な武道だ。

そして俺は冷静になって考える。今、逃げ道は扉だけだと思ったが、そうではないことに気づく。

俺はあいつの鎖が飛んでくる方向を見た。

そこには日が沈みそうな、夕焼けの景色が広がっていた。

そうだ。「窓」からも逃げられるのだ。

しかし、ここは5階であり、逃げるのは至難の業。
だが……

「一か八か……!」

俺は窓に向かって駆け出す。

「え？」

どうやって俺の動きを察知していたかは分からないが、多分アイツは鎖を撃ってくる。

それを何とか防げば…！

「うりあああ！！！」

俺が叫び声を挙げて窓枠に足を掛けるのと、鎖が向かってくるのは同時だった。

「そんな…（ここは5階よ…怪我したらどうするの?!）」

俺は飛んでくる鎖を木刀のつばで捌く。

これさえ防げば何とかなるだろう。

「くっ…また…（コイツ…意外と強い…?!）」

俺はそのまま地面へと落ちていく。

普通の人間なら骨折は免れない。しかし残念ながら俺は普通の人間ではない。

俺は木刀を空中でプロペラのように超回転させ、浮力を多少作り、落下速度を弱める。

さらに、落ちる瞬間、地面に木刀を刺し、その上に見事着地をした。

「くっ…」

さすがに衝撃全ては和らげないが、足と右腕が痺れるだけで済んだ。

「そんな…?!」

俺が6階を見上げる。すると、俺のことを見下ろして驚いている女がいた。

あいつが鎖使いか。随分と綺麗な顔立ちだが、おっかない女だ。

「くっ！」

彼女も鎖を裏庭の木に打ち付け、その鎖をターザンロープのようにして俺の前にやってきた。

まさかやって来るとは思わず、少し動揺する。

「アンタ、中々やるようね」

「お前もな」

正直言って鎖使いなんて者とは戦ったことがないため、どう戦えば分からないのが現状である。

だって相手は常に竹刀や木刀を持っていたから。

「でも裏庭に逃げたのは失敗ね…」

「何だと？」

俺が驚きの声を上げたと同時に、俺の周りから何本もの鎖が飛んできた。

どうやらこの地面を踏んだときに発動するものらしい。

「え?!」

「悪いけど、ここは私のテリトリーなの」

トラップか…!

迫り来る鎖を避けつつも、俺はどんどん奥に追い詰められていく。
とうるかコイツ、10本ほどの鎖を同時に操れるとは…

俺は大量の鎖を軽々と操るそいつに正直驚き、恐れを持った。

「おしまいね!」

「ちっ!」

そしていつの間にか逃げ道がなくなった。

「さあ、言い残すことは？」

「若様!!」

「?!」

俺とそいつは声の聞こえた方へ顔を向ける。
レンが俺達のいる方へ駆けてきていた。

「ちっ! 仲間がいたのね!!」

彼女は狙いをレンに向け、鎖を放つ。

しかしレンはそれを軽々避け、木刀で鎖を断ち切った。

バギン

「?!」

これには予想外だったのか、鎖使いもびっくりする。もちろん俺にも衝撃的な光景だった。

「若様には指一本触れさせない！」

そしてそのまま鎖使いに突っ込むレン。

なんて強さだ…俺がここまで苦戦していたのに…

「くっ…」

押され気味になった鎖使いは冷や汗を掻きはじめた。

「これでも食らえ！」

レンの縦方向の斬撃を辛うじて鎖で塞ぐも、もう何本も鎖は切られてしまっていた。

「く…（悔しいけどここは退くしか…）アンタ達の顔、覚えておくわ！」

最後に俺達を一睨みした後、彼女はこの場から走り去った。

「追わないのか？」

「私は若様と一緒にいるという約束です。それに…何回もステップで避け、5階から飛び降りたんでは足はもう限界でしょう？」

「う…仰るとおり」

正直足には限界が来ていたのは確か。

「若様。お分かりになりましたか？」

「ああ。この戦いを俺は甘く見てた。これは本当に…命を懸けないといけないかもしれない」

「若様がそう反省してくれるなら何も言いません。だからこれから…は…」

「ああ。お前と一緒に行動する」

「はい」

俺はレンに宣言した。レンには心配をかけてしまった。もうこれ以上心配をかけさせたくない。そして…

「強く…になりたい」

「若様、今日から猛特訓ですね」

「ああ」

俺は少しだけげんなりしたが、仕方がない。

「ところで若様、おんぶいたしましょうか？」

「結構です!!」

天然ボケなのは相変わらずだな、レンは。

―某所―

「今日は何回か戦いがあったようです」

男の冷静な声が響き渡る。

「それで？」

もう一人の男がこれまた冷静に聞き返した。

「未だ敗退者は出ていません。しかし、バッジのやり取りは行なわれていたようです」

「ふっ。初日から混戦になるか？」

「いえ…」

男は暗い表情となった。

「様子見をしている者が多いようで、戦闘をしているのは決まった人ばかり…」

「なるほど」

しかしそこに女の声が響く。

「しかし、すでにこの戦いの本質を突こうとしているものがあります」

「ほほう。この戦いを有利に運べる方法を見つけたのか？」

女が挑戦的な口調で告げる。

「そのようです。「ルールの裏返し」です」

「ふっ…面白くなりそうだ」

女と男達は無表情に近い笑みを浮かべたのだった。

第3話 司の初戦！恐ろしい鎖使い！（後書き）

次回は気剣体ですね。

登場人物紹介

たけしま ちぐさ
竹島千草

国立ペロポネソス学園生徒会長。

端麗な容姿と明るい性格で、全校生徒の人気を欲しい俤にしている。
全校生徒の名前をきちんと覚えているところがとても恐ろしくもあり、すばらしい。（ペロポネソス学園はマンモス校です）
身長は156センチで、かなりの小柄である。

いちじょう じろう
一条次郎

主人公、司の悪友。以上。

第4話 司の特訓！気剣体の統一！（前書き）

一応剣道をかじっているんですが…というか有段者なので、そこそこ剣道知識はあります。

ですが、間違ってたら言ってください。

それと、誤字脱字チェックは前作より雑になっているので、あったら遠慮なく言ってください。

しまった…あとがきにネタバレを間違えて書いてしまった…
見てしまった方々、申し訳ありません。

第4話 司の特訓！気剣体の統一！

いつもよりだいぶ速い朝。

俺は道場にいた。木刀を持って。レンと向かい合って。

「いいですか？何度も言うとおり、剣道の基本は気剣体の統一です！」

「はい！」

俺はレンを教師とするように頷いた。
今日から朝稽古を俺はするようにしたのだ。

「心だけ強くても、剣技だけ磨いても、体だけ鍛えてもダメです」

「はい！」

俺は再び大声で返事をする。

剣道の基本は声だ。声が大きければ大きいほど良いのだ。

「では、何をすれば強くなれると思いますか？」

「えーと…気剣体を鍛える…」

それってそのままじゃなか！

「まあそうですが」

合ってるのかよ！

「しかし、今更全部鍛えてもしょうがないです」

「え？」

「何せ昔から剣道をやってる貴方には基本的なことは染み付いています」

俺はレンの言葉に聞き入った。

「なので気剣体の弱いところを鍛えましょう？」

「俺の弱いところ？」

なんか全部弱い気がしてならないんだが。

「はい。気剣体が一つとなって初めて、完璧な打ち込みが出来るようになります」

俺は昨日のレンと鎖使いの戦いを思い出した。

「あるときレンが鎖を断ち切った一撃は…」

「はい。若様を救いたい心、すなわち気迫、鎖を断つという剣技、踏み込み、打ち込みという動作の体が一体となり、結果、鎖が断ち切れたのです」

「そうなのか。じゃあもし、どれかが欠けていたら…」

「私は鎖の餌食になっていたでしょうね」

レンは平然とそんなことを言った。つまり、レンはそれをほぼ完璧に習得しているのだろう。

「どうりでレンに勝てないわけか…」

「そんなことはありません。もともと若様は私より力も強く、反射神経も私より少し速いです」

「そうか？」

俺は今までレンと戦ってきたが、そんなことは感じられなかった。大抵はコテンパンにやられてしまっているから。

「そうです。しかしその体に氣と劍が付いていけないのです」

「何？つまり、身体能力は高く、基本動作もしっかりしているのに、氣と劍がまだ未熟ってこと？」

「その通りです。聡明で助かります」

俺は今までの試合を思い出す。確かに、スタミナが試合中に切れたことは無いし、相手とのぶつかり合いにもあまり負けたことは無い。その割に打ち込みが甘かったり、相手との駆け引きに負けることが多い気がする。

「…そんな氣がしてきた」

「では、氣と劍を鍛えるにはどうすればいいのか？」

「気は：分からないんですけど、剣はもっと経験を積んで練習すれば良いかと」

俺は一応そういう答えを言った。レンが納得するか分からないけど。相変わらずクールな表情は上手く心を隠している。

「そうですね。剣は私と特訓すれば何とかなるでしょう。問題は気です」

レンはポーカーフエイスを崩さず、俺に説明する。

彼女も俺なんかのために時間をこんなに割いてくれるなんてな。本当に感謝しなければ。

「若様はこのSFをどのような気持ちで臨んでいらっしゃいますか？」

「え？ま、まあ家の名を傷つけない程度には頑張ろうかと…」

「そうですね」

「え？」

「私は若様をこの戦いに強引に参加させましたね？」

「ま、まあ」

あれは確かに強引と言うか：妙に不自然な強引さ。

「それは若様に強い心を持って欲しいからです」

「強い…心…?」

俺は首をかしげた。

「はい。若様には剣道で決定的なものが欠如してしまっているんです!」

「?!」

レンにしては大きな声。剣道でしか聞けない声。

「それは、勝とうという気。勝利への欲求が致命的に無いんです!」

「!!」

俺は目を見開いた。

思い当たる節は、ある。

「若様が負けて悔しがる姿、私は一回も見たことはありません。もちろん勝って喜ぶ姿も」

「…」

それは昨日の戦いにも言えること。

俺は昨日どうしようとしてた? 勝つために戦っていたか?

少なくとも負けるためには戦っていない、しかし…

俺は逃げるために下に降りた。だから追ってきたときはびっくりした。

それに俺は昨日鎖を防ぐだけで彼女に攻撃しようとしなかった。

「ですが若様は悔しがりましたね」

「え？」

しかしその言葉に俺は目を丸くする。

「昨日、強くなりたいとおっしゃいました。それは自分の非力さへの悔しさの現れです」

「あ…」

そうだ、俺は昨日、レンに心配かけるくらい弱い自分の強さを嘆いた。

自分の力の無さを「悔しがった」んだ。

「つまり、気の問題も全く解決できないというわけではないのです」

「そうか！」

レンの話は分かりやすくて助かる。

「後は…明確な目標を持つことですね」

「明確な…目標…」

俺はしばらく考える。

そういえば俺ってどうして剣道を始めたんだっけ？

「昨日の鎖使いには覇気がありました。気だけなら私と互角だったはずです。彼女には何か分かりませんが、明確な目標があるのでし

よう。ここから先、このような人たちがたくさん出てきます。それに負けないためには若様にも明確な目標というものがが必要です」

「俺の…目標…」

しかし、考えても出てこない。

負けたくはないけど、特別勝ちたいとは思わない。でも強くなりた
い。

この矛盾した感情は一体何なんだろう？

「まあ焦らなくていいです。そのための私です」

「ああ」

その俺の弱点を補うためにレンがいるんだ。
というか充分すぎる気がしなくもないが。

「と、いうわけで今日の朝稽古はここまでです」

「え?! まだ何もして…」

「もう朝食の時間です」

「マジかよ?!」

いつの間にかそんな時刻になっていた。

結局今日はこれからどういうことをしていくのか、を決めるだけに
なってしまった。

「だから今日は学校に残らず早く帰りましょう」

「分かった」

昨日のようなことになったら面倒くさいしな。
それに未熟な腕前で迷惑をかけたら困るし。

「おっと…それと、鎖使いの番号が分かりました」

「本当か?!」

「ええ。鎖を断ち切ったとき、横目で確認しました」

「さ、さすが…」

レンは本当にすごい人だ。
一度にいろんなことをやってのけるなんて。
…まさかレンって優勝候補なんじゃないか？

「確か…6番だったかと」

「6番か…」

6 鎖使い

17 司

20 レン

25 齒舞

「つまり→こうなるんだな？」

「ええ。その通りです」

とりあえず顔は分かっているので、情報は上手く集められそうだ。

「あれーレンと司！朝ごはん食べないのー？」

そのとき、寧々がやって来た。

こいつにSFのことは言わない方がよさそうだ。

「着替えた後に朝ごはん食べる」

「わかったわ。巴お姉ちゃんもう待ってるからね？」

「OK。着替えたらすぐ行く」

どうやら今日はトモ姉が来ているらしい。

豪華な食事になりそうだ。

「そういえば…」

俺は疑問に思ったことを口にした。

「レンはどうして俺の場所が分かったんだ？」

「あ、それは…」

「ん？」

レンが少し躊躇する。

「何？」

「い、いえ…若様の帰りが遅いので、男子トイレに押し入ったのですが…」

ああ。恥ずかしいのはここか。
さすがにレンでも顔を赤らめる。

「戦闘の痕跡があったので、窓の外を見ました。すると若様の足跡がございましたので…」

「そ、そうですか…」

「俺」マニアもここまで来れば大したものだ。
足跡まで分かるとは…もし、レンと結婚して浮気なんてしたら速攻バレルな。

「じゃ、行こうか」

「はい！」

俺はレンと一緒に着替え…

「つてレンー!!」

「あ!失礼しました!若様に私なんかの素肌を見せるなんて…」

「いや、そういう意味じゃなくて…」

レンの天然ボケも大したものだ。

―某所―

「ちょ、ちょっと待てって！こんなのただの「ゲーム」だろう？！」

男の声が校舎内に響く。

「お前、頭がどうにかしてるぜ…俺を殺そうとでもしてるのか？」

しかし相手は何も言わずゆっくりと近づくだけ。

「な、なあ…俺と組まねえか？そ、そうすれば戦力も…」

「欲しいのはバツジのみ」

相手はそれだけ言うと、男の胸の辺りに手を伸ばす。

「おい！貰うのは一つだろう？！」

しかし正体不明の相手はバッジを3つも手に取ろうとする。

「負けた相手はバッジを一つ渡す。勝った相手がバッジを強引に奪うことは禁止されてない」

「そんな屁理屈…」

「実際、生徒会は動かない。つまりこれも戦いのうち。ではさようなら」

「うあああああああ!!」

男はその謎の人物に何かをされ、意識を失った。

謎の人物は立ち去り、残ったのは、バッジを全て失い、だらしなく口を開けた男の肉体だった。」

第4話 司の特訓！気剣体の統一！（後書き）

今回は「学内の異変！そして謎の占い師！」です。
つまり、新キャラの登場ですね。

登場キャラ紹介

はばまいたける
齒舞武

司のクラスメートで、気弱な性格をしている。
実はSF参加者で、参加理由は不明。
身長は170センチほどで、眼鏡を装着し、服装もきちんとしてい
るので、真面目な生徒だと思われる。

第5話 学内の異変！そして謎の占い師！（前書き）

登場人物が多いですね。

まあ当たり前ですね。

第5話 学内の異変！そして謎の占い師！

俺が道場で特訓している間、レンは学校で情報収集をしていた。俺も行きたいのだが、今は我慢。

「司、お前はスクールなんちゃらに何で出ているかレンから聞いたか？」

「はい。俺には勝つ意志が薄いかららしいです」

「その通りだな。ところで寧々はどうした？」

「あー…」

最近寧々は俺の道場に来ない。こういうことは良くあるので、気にはしないんだけど。

「またいつものようにさぼってるんじゃないですか？」

「全く…だから強くなれんだ…」

父はため息を吐く。しかし、わが父は寧々に甘いところがある。俺だったら通常稽古をサボったら家を追い出されかねない。

「失礼します。あ、司ちゃん！」

「トモ姉…」

そのとき、トモ姉が道場にやって来た。

「おお。巴かどうした？」

「いえ、晩御飯作りにやってきちゃった」

「おお!!」

父が目をキラキラさせる。

アンタ達が料理作れないのが全て悪い。

俺は少し嘆息して、トモ姉に近づいた。

「それで、俺も手伝おうか？」

「ううん。司ちゃんは練習してていいよ。私がやっておくから」

「いや、別に大した練習じゃ…」

「何じゃと？」

し、しまった…!! また説教を食らう!

「司!! そこに座れ!!」

「は、はひいいい!!」

「…取り込み中みたいだから私は行くね」

トモ姉は俺を見捨てて道場を出た。

そしてそれと同時に父の説教タイムが始まった。…俺のバカ。

「いやあ…みんなで食べるご飯は美味しいわねえ…」

俺達はみんなで食事をしていた。

「ってオイ寧々！何で平然とウチでメシを食ってるんだ？！稽古もサボって！！」

「あー。細かいことは気にしない気にしない。あ、巴お姉ちゃん、これおいしいね」

「話聞け！」

寧々はトモ姉に話をふって俺との会話から逃げた。

こいつは本当に…

「若様。頬にご飯粒がついております」

「え？」

俺はレンに言われたので、頬を触ってみる。
だがしかし、よく分からなかった。

「もう…ジッとしていて下さい」

そういうとレンは俺の頬をペロリと一舐めした。

「!!」

俺はびっくりして硬直した。

「な、ななななな何してんだよ?!」

「ご飯粒を取っただけですが」

「うう…」

俺は顔を赤らめながら俯く。こいつは本当に天然だ…
そしてその光景を顔を真っ赤にして寧々とトモ姉が見ている。

「見ました奥さん」

「ええ。本当にいやらしいですわね」

「コラそこ！俺は何も悪くない！」

俺はお箸で二人を指差した。

ペシン

しかしその手は横から誰かにはたかれた。

「コラ若様。箸で人を指してはいけません」

「あああ！俺がいけないのか？！この流れに乗れない俺が悪いのか？！」

俺達は久しぶりに楽しい食卓の時間を過ごせた。

最近もSFのおかげで切羽詰っていたからな。

今日は少し俺もはしゃいでしまったな：

少し自省しつつ、俺は楽しいひと時を過ごした。

夜中、俺は部屋でレンと二人っきりになった。

言っておくが、男女でも甘い雰囲気などこれっぽっちもない。
むしろ空気が張り詰めている。

「さて、今日の報告をいたします」

レンが真剣な顔で俺に言った。見たところ、怪我もしてないようで、戦いすらしていないかもしれない。

「ああ」

俺は真顔で頷いた。

「今日、私は戦っていないのですが、少し不自然なことを発見しました」

「不自然なこと？」

俺はレンの話に耳を傾ける。

「はい、放課後、バッジをつけていない男子生徒が校内を妙にうろ

ついていました」

「バッジを付けていない生徒…つまり一般生徒か戦う意志のないSF参加者か」

「はい」

俺は少し考える。おかしい点といえばおかしいかもしれないが…

「それって何人くらいだ？」

「SF参加者よりも多いです」

「はあ?!」

俺はつい大声をあげてしまった。レンの言ったことが正しければ、参加者じゃない奴らが学校をうろうろしていることになる。

俺にはその理由が分からなかった。そもそもSFで残っているのか？

「詳しくは分かりません。しかし、妙に物々しい雰囲気でした」

「そいつらは…何をしてるんだ？」

「さすがにそこまでは…しかし、SFと無関係では無いような気がします」

レンが芯の通った声で告げる。

「そうか…それで、参加者とかの情報なんだけど…」

「はい。鎖使いが誰だか分かりました」

「?!」

鎖使いといえば、俺が最初に対戦した相手で、とてつもなくおっかない女だ。

元々ウチの学校はマンモス校なので、同じ学年でも顔が分からないやつがいる。

ちなみに俺とレン、寧々、ジョージのクラスは5組で、全クラス合わせて20組ある。

「隣のクラス：4組の巖島真理恵という普段大人しめの女子生徒です」

巖島：真理恵：俺は心の中で呟いてみる。

残念だが分からない。それに大人しい？あれが？

「どうやら普段の生活では猫を被っているみたいです」

「そういうことか？」

化け物みたいな奴がいったいいるとは聞いていたが、彼女もその一人か。

普段は大人しく目立たない女子生徒。だが、戦いになると：寒気がするな：

「他にも意外な奴が出ているかもな」

歯舞も意外と好戦的な性格だったり：やめよう。何もかも信じられなくなりそうだ。

俺は一度考えるのを止め、深呼吸をする。

「そうですね…」

レンが一度顔を伏せ、すぐに上げる。

どうかしたのか？

今の行動はレンらしくなかった。俺の前では目線を逸らすことなどせず、ただ見据えるのに。

「どうか…したのか？」

「いえ、少し疲れているようです。私はこれで寝かせていただきます。おやすみなさい」

「おう、おやすみ」

レンは多少目を擦りながら立ち上がる。

「夜更かしはダメですからね」

「分かってる」

「…では、また明日」

「おう」

レンは少し含みを持たせながら去っていった。

あいつって結構母親みたいだよな…

俺は布団を被ってそんなことを考える。

そういえばあいつって親とかいないよな…どうかしたのだろうか…？

俺はそのまま眠りに落ちていった。

「与那国！」

「あ。種貸主将」

次の日、俺は学校で剣道部主将の種貸先輩に呼び止められた。
多分用事は一つだろう。

「お前、剣道部入らないか？」

「その勧誘はすでに74回目です」

「え？俺的には73だと…」

そうなのだ。俺は道場があるから剣道部には入っていない。

いや、入っていたという方が正しいか。

道場の師範代となつてから、俺は道場稽古を毎日やらなくてはいけないために、部活を辞めざるをえなかった。

しかし、個人的には、剣道が出来ればどこでもいいので、悲観はしていない。

「あなたも数えてるんですか？」

「まあな」

…この人は変人だ。でも俺も結構変人だ…

「それで、ダメか?! 大会出てくれるだけでもいいから!!」

「いや…それは…」

SFが忙しいだなんて言えないな…

俺はいつものようにはぐらかして去ることにする。

「まあ考えておきます」

「おい! まだ話は…」

俺は急いでその場から立ち去り、教室に帰る。

もういつものことだが、いい加減に諦めてほしいものだ。

俺はポケットに手を入れるが、その拍子に、ポケットの中の財布を落としてしまった。

「あ」

俺は拾おうとするが、先にそれに手を伸ばした人がいた。

「え？」

「はい」

そして俺に差し出す。

しかし、俺的にはその人の外見にびっくりした。

「あ、あの…」

「ああ。これ、キミのでしょ？」

「あ、はい…」

その人は金髪で蒼眼の外国人であった。こんな人いたっけな？

「受け取らないのかい？」

「あ、ありがとうございます…」

俺はその外国人の男子生徒から財布を受け取った。

それにしてもこの人、日本語上手いな…ちょっとおかしいところはあるけど。

「どういたしまして」

彼は微笑みながら俺の前から去った。

さすがはマンモス校。留学生とかもいるのかもしれない。

俺は再び歩みを進める。

しかし、俺は急にどこかに体が飛ばされる感覚を味わった。

「な、何だ…？」

そして俺が瞬きすると、周りの景色が変わっていた。

「え…？」

さっきまで俺は学校の廊下にいたはずなのだが、今は違う。

妙に薄暗い部屋の中に俺はいた。

明かりは蝋燭か？

「ようこそ」

「?!」

俺は後ろから聞こえた女性の声に振り向いた。
まさか人がいるとは…そして咄嗟に身構えた。

「ふふふ。別に警戒しなくていいわ」

「…」

そんなこと言われたら余計に警戒するでしょうよ。

「あなたはここに来るの初めてでしょう？」

「ここって…どこですか？」

「ここは悩み多きものが来ることが出来る場所」

「は？」

俺は目の前のミステリアスなフードとローブを装着している女性を見つめる。

何でこんな格好をしているのだろう？

「あなたに悩みはあるのかしら？」

何を言っているんだこの人は？

「ふふふ。私が誰だか分からないから怖いのかしら？」

俺はこの人の笑いに不思議と寒気はしなかった。

むしろ、悪い感じではないみたいだ。

「私はね、占い師。占い師ドレミというのよ」

そんな名前はおかしすぎる。多分偽名だろう。

「それ、本名じゃないですね？」

「そうよ」

「…」

この人は何をしたいのだろう。

とういか今、疑問が何一つとして解決していないことに気がついた。ここにどうして、どうやって来たのかも不明である。

「えーと、俺はどうやってこんな場所に来たんですか？」

「言ったでしょ？ここは悩みがある者が来る場所だと」

そんな曖昧な答えで理解できるほど、俺は頭が良くない。

「…俺に悩みがある、と言いたいんですか？」

「そういうことよ」

女：ドレミがふふふと笑いながら告げる。

本当にミステリアスな人だ。

「でも俺に悩みなんて…」

「悩みがないのが悩み？フッフ…あなたは気がついていないのね」

「え？」

すると女が立ち上がり、俺の後方に指を指した。

俺はその指先を辿るように振り向いた。

「え?!」

そこにはいつの間にか扉があった。
全然俺は気がつかなかったぞ…

「今日は帰った方がいいわ。また来たいのならば、思い浮かべなさい。悩みと…私を。いつでも歓迎しているから」

ドレミはそれだけ言うと、席に座る。

「帰るならその扉から早く出るのよ。次のお客が入れないわ」

俺はその扉のノブに手を掛ける。

「あ、言い忘れていたわ。上に…気をつけなさい」

「え?上?」

俺は不思議に思いながらもその扉を開けた。

先は真っ白だ。本当に帰れるのか?と思いつながら一步を踏み出す。
すると…今までの景色が一新し、先ほどまで俺がいた廊下が変わっていた。

「…なんなんだ?」

俺は不思議に思いながら教室へと戻った。

その間に俺の頭上の蛍光灯が落っこちてきた。
何とか避けたものの、危なかった。
上に注意ってこういうことか?

―某所―

「戦いの経過は？」

「また一人脱落し、23人に減ったものの、依然として滞っている」
男達の低い声が狭い部屋に響いた。
まるで秘密組織のアジトみたいである。

「ただ…」

「どうした？」

「二人、すでに全員に仕掛けている人がいます」

「全員？」

男達の声に初めて感情が籠った。

それまでは事務的であつたはずが、今は随分と感情を含んでいる。

「そうです。彼は…すでにゲームを支配していますよ」

「ふっ…楽しみだ」

男達は机上の資料に目を落とす。

その中に司の資料もあつたのは言うまでもない。

第5話 学内の異変！そして謎の占い師！（後書き）

登場人物紹介

いづくしまりえ
巖島真理恵

司の隣のクラスの女子生徒。

普段は目立たず、大人しい生徒であるが、戦いになると豹変する。鎖を武器にしており、一度に複数の鎖を操ることが可能。

結構強気で、好戦的な性格をしている。

身長は161センチくらいで、地味なヘアバンドをしている。ただ、SFのときは派手なヘアバンドをしている。

占い師ドレミ

ミステリアスなフードを被り、ローブを着ている怪しい女性。司に意味深な言葉を残すが…

第5・5話 松島七恵の悲劇！現れた黒幕！（前書き）

黒幕の出現…

さて、黒幕を何故今出現させるのか。
それはつまり…ということです。

第5・5話 松島七恵の悲劇！現れた黒幕！

冗談じゃない！！

私、松島七恵まつしま ななえは新聞部所属のカメラマンで、SF参加者である。

参加理由は戦場ジャーナリストみたいな感じで、SF新聞を作ろうと思ったから。

だからこれっぽっちも戦う気がないし、勝つ気もない。

でも、私は変な男達に狙われていた。相手は3人。

「何で私を狙うのよ?! 私を倒しても強敵じゃないから全然メリツトが無いわよ！」

私は後ろから追ってくる男達に叫んだ。

だが、男達の足音は止まらない。

何故私なんかを…?

「どうして私を狙うのよ!理由を言いなさい!」

私は出来るだけ強気に物を言った。

ここで弱気になったら負けだ、そう思った。

私は暗闇をキッと睨みつける。相変わらず足音は止まらない。

だが、肝心の姿が見えない。

「え…?」

足音が聞こえるだけ…?

よく聞けば足音は近づいてもないし、遠ざかってもない。

私は安心した。ただの脅かしだったのか…実は私を見失ってしまったにいたりして…

「もう…脅かさないでよ」

「脅かしではない」

「?!」

私は後ろから聞こえた声に振り向いた。

「な、何で…」

そこには例の3人がいた。私を追っていた例の3人。

「お前は気が動転してて気づかなかったようだな。この音、どこから漏れていると思ってる？」

「え…?!」

私は音のする方向を見上げた。
そこには放送スピーカーがあった。つまり、放送室で足音を流していたのだ。

「でもどうして…」

「俺達はお前を追う気なんてサラサラ無かった。狙いはただ一つ。お前をここに誘い込む」

「どうしてここに来るって…!」

「人間は左に行くのを好む。なぜなら人間は生まれながらアンバラ

ンスな存在だからだ」

3人うちリーダーらしき男が語る。確かこの人はあれだ…
佐渡財閥の若きリーダー…佐渡隼人、ささと はやと高校3年生。

「人の心臓は左にある。中央ではなく左だ。まあ例外はあるが…。
そのおかげで人間は左を選ぶ傾向にある。なおかつ、足音による動
揺で、正確な判断力を失ったお前は必ずそうすると…思ったからだ」

この人…只者ではない…

「わ、私をどうする気?!」

私は冷たい目をしたこの男にそう言った。

この男は正直怖かった。何か嫌なオーラが漂っている。
私は声の震えを何とか抑えるのに精一杯だった。

「どうもしないさ。大人しくバッジを渡せば命は助けてやる」

「い、命って…」

しかし、彼の目は冷たく、冗談で言っているようには思えなかった。

「さあ、どうする?」

「わ、分かったわよ…」

私は大人しくバッジを一枚彼、佐渡隼人に渡す。

「おい、何で一枚なんだ」

「え？だってルールで…」

「負けた人は勝った人にバッジを1枚渡す…お前は俺達3人に負けたんだ。ならば、一人に1枚ずつ渡すのが道理だろう？」

「え、ええええ?!」

私は混乱しつつ叫んだ。このままじゃ私は敗北が確定。まだ取材とかも何もしていないのに…

「渡さないのか？」

「ず、ずるいよ…3人もエントリーしてるなんて…」

私も仲間を連れればよかったかもしれない。でも私の友達是谁も参加しないと思うけど…

「何を言っている？エントリーしているのは俺だけだ」

「え?! だって残りの二人もバッジを…?!」

私は3人を信じられないような目で見た。
だって…これは…

「3人ともバッジの番号が同じ?!」

「当然だろう？こいつらが付けているものは俺のバッジだ」

「そ、そんなのルール違反じゃない!!」

「ルール違反？このSFに参加するものはバッジを所持していればいいんだろ？そして戦うものはバッジを付けたもの同士。どこがいけないんだ？」

「い、一般生徒を参加させている時点で…」

「お前、頭弱いな」

「な…!!」

彼は私を虫けらを見るような目で見る。

睨み返したいけど、恐怖が先に出て、睨み返せない。

「このバトル、ルールを遵守して戦うものではない。どこまでがルールなのかをきちんと把握するのが戦いだ。つまり…戦いはSF発表のときから始まっていたのだ」

「っ…!!」

この男、初めからルールを遵守する気なんてサラサラ無かった…ただ、ルールをどう都合よく解釈できるか、それだけを考えていた。この男は相当なキレ者であることが分かる。

「だから俺はこいつらにバッジを与え、参加させた。この時点でこいつらは一般生徒ではない。だからバトルしても問題ではない」

「でも自分のバッジは全て所有して…」

「はあ…これだからゴミは…武器にバッジを装着…違反じゃないだ

ろ？こいつらは俺の武器：つまり所有物だ。そして常に傍らに置けば所有物として問題ないだろう？」

「う…」

これではこの人をルール違反で生徒会に突き出せない。

ていうか生徒会が見てみぬ振りしている時点でこれはルール違反ではないのかも…

「これで満足かゴミ。早くバッジを渡せ」

「わ、分かったわ…」

私は諦めた。変なことをされるよりはよっぽどいい。

「それと…お前、新聞部だそうだな？」

「そ、それが何…？」

「情報をばらされると厄介だ。口封じさせてもらう」

「え？え？！」

男達が近づいてくる。

「な、なんで…?!」

「お前が知りすぎたからだ。好奇心旺盛は死を招くぞゴミ」

「う、う…」

男達は私の首に手を掛けた。

「な、何を…」

「ちょっと眠ってもらっただけだ。我慢しろ」

「い、いやー！ー！ーっ！！！」

グシュッ

そんなグロい音とともに私はその場に倒れた。
腰巾着の男達はそれを見てヘラヘラ笑っていたが、リーダー格の彼だけは最後まで冷たく、無表情であった…

第5・5話 松島七恵の悲劇！現れた黒幕！（後書き）

登場キャラクター紹介

まつしま ななえ
松島七恵

新聞部所属のカメラマンで、3年生。

SFをリアルタイムで見るために参加したものの、バッジ獲得の餌食にされてしまった。

喉を潰され、意識を失った彼女は、病院に運ばれたものの、意識は回復していない。

さぐろ はやと
佐渡隼人

佐渡財閥の若きリーダーで、3年生である。

ルールの裏返しや人海戦術を駆使し、SFを有利に進めている。
現在の黒幕的存在。

次回は「新ルール追加！現れた最強！」

とうとう名前だけ出てきた彼女の出現ですね。

第6話 新ルール追加！最強の出現！（前書き）

前話の予告題名と違いますが…

第6話 新ルール追加！最強の出現！

SFが始まってから1週間が経った。それでも相変わらず俺は道場で稽古をし、たまにレンと共に情報収集をしていた。

ただ、SF1週間後でも、学校の様子は変わらなかった。どうやら実感の無い生徒が多いようだ。

ただし、放課後の異常さはレンの言ったとおりであるが。

まるで何かを必死に探しているみたいだ。

何を探しているのかは分からない。だが、近づいて良さそうな奴らではないのは確かだ。

「みんなおっはよう！！！」

『おはようございま〜す！！！』

朝礼台から生徒会長の元気な声が聞こえる。

今日も彼女は元気だな…まあSFを傍観している人にとっては楽な気持ちなんだろうな…

「今日はSF参加者に重大発表があるの〜！」

重大発表…？

俺の隣にいるレンの顔が強張った。

俺も気を引き締めないとな…

「追加ルールを発表しま〜す！！！」

「?!」

俺達の顔が引き締まった。

追加ルール：だと？

一体どういうことだ？生徒会にとって何かまずいことでもあったのか？

「実はみんな意外と戦ってくれなくてね：だから新ルールを追加しようと思ったの！」

俺達は真剣な目で見る。だが、あまり真剣な目で見るとまずいかもしれない。

俺達が参加者だとばれてしまう。

「さっそく発表！ドウクドウクドウク！！！！ダーン！！！」

口でドラムロールを口ずさむ生徒会長。

しかも微妙に違う気が：

「1週間に1度も勝てなかった人はバッジを剥奪！！！」

「?!」

そんなルールを適用させるのか？！

そんなことをしたら学校が完全に戦場になるぞ？！

「今日から適用だから、来週のこの時間までにバッジを取れなかったらバッジ剥奪ね。ちなみに剥奪されたバッジは適当に隠しておくから見つけてね。あ、それとね、仲間内でのバッジの勝ち負けの譲り合いは禁止だよ。仲間内で戦って、バッジの渡しあいをするのはズルイからね」

この人は遊び感覚でSFを主催しているのかもしれないが、実際はそうじゃない。

本気で戦う奴や、卑劣な奴だっているだろう。彼女はその状況を知らないのか…？

「今日は以上で。じゃあ参加者達はルールを守って頑張ってね！」

彼女は最後にみんなに手を振りながら台を降りた。

この人は演技しているのか？少し疑ってしまう。

「若様…」

「レン、とりあえず次の授業は英語だから」

「…そうですね」

レンが真剣そうな顔をしているので、和らげてやった。

こいつはすぐに表情が強張るからな。おかげで俺や寧々やトモ姉、そしてジョージとしか話さない。

「司！英語の和訳やってきたか？」

「寧々にでも見せてもらえ、ジョージ」

そして突然ジョージが後ろから俺に抱きついてきた。正直キモイ。やめろ。

「はあ…司、私がやってるとでも思ってるの？」

「寧々。お前は自慢するところを間違えている」

話を聞いていた寧々がため息をつきながら俺の元にやって来た。
そうそう、SFばかりじゃ切羽詰まっちゃうからな。こういう日常
も合わないよ。

昼休み、俺はレン、寧々、と一緒に昼食を食べに食堂に入った。
しかし…

「混んでるわね」

「ああ」

食堂は予想外に混んでいた。SF参加者の俺としては昼抜きとかは
ヤバイ。

さすがに腹ごしらえをしなければいけないだろう。

「席3つは無理かもな」

「そうかもしれません」

レンが俺に何か言いたそうに見る。

「お、席2つは空いてる!!」

俺は突如見つけた二つの空席に駆けて行った。
こういうのは早い者勝ちだ。

「でも二つだけどうするの？」

「お前ら二人が座れよ」

俺はレンと寧々を交互に見た。さすがに女子一人で別に席に座らせるわけにはいかない。

「若様！」

「レン」

レンの言いたいことは分かる。俺が一人になることを懸念しているのだろう。

だが、心配は無い。こんなに一般生徒が多いところで戦いなんてしないだろう。

「じゃ、言ってくる」

俺はレンにウィンクして席探しに向かった。

レンと寧々が何か言いたそうだったが、無視して探索を開始。

こういうときにジョージがいれば…ちなみにアイツは今保健室である。

理由は…説明が面倒くさいので想像に任せる。

それはともかく、予想以上の混み具合に俺はうろたえる。このままじゃ昼は立ち食いか？

仕方ないので、一応食券を買って列に並ぶ。

…待つこと数分、俺はかき揚げうどん大盛をお盆の上に載せて、再び席探しを…

「おお！」

そんなことをする必要もなく、速攻で空席が出来たので、そこに向かって駆け出した。

ラッキーだな、と思いながらそこに着席してうどんを食べることにする。

「ふう…ん？」

俺は目の前の女子生徒を見る。何だか見覚えが…

「ああっ！！」

「？」

俺は目の前の女子生徒に声を上げてしまった。こいつはあいつだ！

あの鎖使いじゃないか！！

俺は切磋に身構えてしまった。

「…」

「た、戦わないのか？」

俺は呆れた目で俺を見るその女子生徒に小声で訊く。

「こんなに人目のつく場所です？」

「う…」

確かにそれはないだろう。

というかこんなところでこいつと出会っちゃうとは…運が悪い。

「…何ジロジロ見てるの？」

「いや、あのときの雰囲気が違うな、と」

「当たり前でしょ」

どうやら別に彼女は人付き合いが苦手とかそういうのじゃないみたいだ。

現に普通に俺と話しているし、

「お、お前は どうして普通に話しているんだ？」

「あなたが先に話しかけたんですよ？」

言葉は妙に刺々しいな。まああれか、前回の戦いのせいだな。

「そ、そうだな…」

俺はかき揚げうどんを食べることにする。

「アンタって甘いわね」

「え？」

彼女がすごい目で俺を睨む。つうか怖いです。

「もしここで私があんたの足を攻撃しても誰にもばれないわよ」

「…そうだな」

確かにテーブルの下は見にくい。それにこの混み具合では刺されてもばれない可能性が高い。

「でも、お前はそんなことしない。だってそういう卑怯な手段は嫌いだろ？奇襲はともかく、ここには一般生徒もいるんだ。お前はそういうのしなさそうだ」

「…」

凶星なのか少しバツが悪そうに俯く。

こういうかわいいところもあるんだけどな。

「お前は敵かもしれないけど、人間としては好きだぜ」

何言ってるんだよ俺は！こんなこと言って彼女が手を退くとも思っているのか？！

ついノリで言ってしまった俺は後悔した。

「な、ななな何言ってるによよ！そ、そんなんで騙されないんだからにえ！！」

「お前、噛んでる」

「うるさい！」

彼女はそう怒って自分のご飯を速攻で食べた。

「ごちそうさま！！」

そしてきちんと挨拶もした。礼儀正しい奴だ。

しかし：結局怒らせてしまった。俺の馬鹿野郎。

彼女は俺のほうを振り返りもせず立ち去っていった。

「若様」

「おうレン」

そしてその後すぐにレンと寧々が俺の方に来た。

「すぐ食べ終わるから先に教室に行っていていいぞ」

「若様」

「：分かったよ」

俺はレンの言いたいことがわかったので、仕方なく待たせてやるこ

とにした。

「本当にレンって過保護よね」

「そうですか？」

レンはキョトンと寧々を見る。

いや、寧々の言っていることは正しいと思うぞ。

「一緒にお風呂とか一緒に寝たりとかもしてるんじゃないの？」

寧々が茶化すように言う。

「いえ。でも若様がそうおっしゃるならしますが」

「おい」

レンは俺に対して何かおかしい。妙に忠義？みたいだな。それに、羞恥心が無いんじゃないか？俺に対して。

まあつまり男として見られてないのかもな。

「ご馳走様。悪いな」

俺は待っている二人のためにさっさと食事を終え、容器を片付けに行った。

とりあえず、昼の鎖使いのことはレンに黙った方が良さそうだ。

今日も放課後、うろうろとしている男子生徒が多かった。
全員男子なのも気になるがな。

「新ルール追加ということは、これまでのように様子見だけじゃ無理だな」

「そうかもしれません」

しかも仲間内での渡しあいも禁止。つまり、俺とレンが二度戦ってバッジを渡し合いするのは卑怯と言うことだ。

確かにこれをすれば、楽に1週間に1勝を稼げる。

「じゃあどうする？バッジつけてない奴と戦ってもしょうがないだろ？」

「そうですね…ですが、焦っても仕方ないです。この状況はみんなも同じなのですから」

レンがそう言う。まあ実際はそうではないのだが、俺達がそんなことに気づくわけが無い。

「じゃあ今日のところは帰るか？」

「そうですね…」

もうすぐ日が暮れる。レンの話によれば、夜中になると学校内の雰囲気殺気立つらしい。

見てみたい気もあるが、危険だからレンに止められるだろう。

まあ後ろからやられてしまっただけは元も子もない。

俺達は帰る準備をする。まあ見つからないように頑張って帰るか…そっと廊下に出て、気配を消し、ゆっくりと進む。

「「?!」」

しかし、突如俺達は後ろを向いた。

理由はただ一つ。敵の気配だ。

こっちに向かって誰かがやってくる。向こうはこちらの気配に気づいている。消しているにもかかわらず。

つまり、強敵だ。

「レン…」

「はい…」

レンの顔に冷や汗が見えた。レンも感じているようだ。

この圧倒的強さを。

「来る！！」

「え？！」

俺より早くかまいたちの風に反応したレンは俺の前に出てかまいたちを受け止めようとする。

「レン！！」

「大丈夫です！」

レンはかまいたちを受けた…が、吹っ飛ばされた。

「ああっ！」

レンが悲鳴を上げて後ろに飛ばされる。俺はそれを何とか抱きとめる。

「レンが…飛ばされた…？」

レンは体重が軽いものの、攻撃の受け流しとかはすごく上手い。

ウチの道場でも、レンに攻撃を完全に受け流させないのは父だけだろう。

つまり、相手は父に近い強さを持つ人…

俺には心当たりがある。この圧倒的強さを持つのは…風紀委員長の宮島先輩だ！！

「若様…逃げてください…」

「くっ…」

この状態のレンを放っておけるわけがない。
それに、レンを一撃でこの状態にする奴から逃げられるとは思えない。

「二人…与那国道場の者達か」

聞こえてきたのは、女性の割に凜とした宮島先輩の声。
やはりというべきなのか…

そして彼女は俺達に薙刀を突き付けた。

「若様…！」

「くっ…！」

絶体絶命のピンチに俺達は陥ってしまった…

第6話 新ルール追加！最強の出現！（後書き）

次回は「圧倒的強さと、姑息な戦法と」

さて、司とレンはどうなってしまっているのでしょうか。
題名的には…ですけど、実際は…です。

第7話 圧倒的強さと、姑息な戦法と（前書き）

誤解題名です。

第7話 圧倒的強さと、姑息な戦法と

父と初めて本気で戦ったとき、俺は初めて恐怖を味わった。
圧倒的強さと言う恐怖を。

小さい頃は全然本気で戦ってくれなかった父親。

そんな俺が12歳の頃、初めて父は俺に本気の一部を出した。
その恐怖が忘れられない。本当にあれは狼が首元に噛み付いてきた
感じだ。

そうだ、まるで父親を相手にしているかのような圧倒的な威圧感が
彼女にあった。

人間は恐怖で体が動けなくなるというが、それは事実だったようだ。

「若様…」

俺の隣で息絶え絶えのレンが俺を呼ぶ。

「逃げ…て…」

「くっ…」

俺は目の前の宮島先輩という名の鬼神を睨む。

睨んでどうにかなるものではない。だが、心が臆してしまえばそれ
までである。

「与那国司。お前に訊きたいことがある」

「…訊きたいこと?」

しかし、宮島先輩の次の行動は、攻撃ではなく、会話であった。

まさかの行動に俺は少し拍子抜けをする。が、すぐに気を引き締める。

「最近放課後になると、妙な男子生徒達がうろろしている。それは…お前の仕業か？」

「若様はそんなこと!!」

「お前は黙れ」

「…!!」

レンの体が震え上がった。レンでも恐怖は感じるらしい。

「与那国司! 質問に答えろ」

「…俺じゃない。俺もそれが誰だか気になる」

「…そうか」

しかし、宮島先輩は俺達から視線を外さなかった。

「ならお前、その男子生徒達に襲われたことは無いか？」

「襲われる?! そいつらは参加者を襲うのか?!」

「…本当に知らないみたいだな。良からう。行け」

「え?」

宮島先輩は俺達に帰れのサインを出した。

どういう風の吹き回し？というか俺達とは戦う気が無いのか？

「どうした？行かないのか？それとも私と戦うのか？」

「い、いや…どうして見逃してくれるのかな？って思ったので…」

俺は疑問に思ったことを口にした。

この人のことだ、俺達が帰っている間に、後ろから攻撃することも無いだろう。

というかこの人ならそんなことをせずとも勝てるか…

「お前らより優先すべき相手がいる。それだけだ」

「分かりました。若様。行きましょう」

「あ、ああ…」

俺とレンはその場から立ち去った。

残された彼女は一人、夜の闇に飲み込まれていった…

命からがら逃げ延びた俺達は、道場に帰り、今日の復習をした。

「危なかったな、レン」

「はい」

レンが心底安心したような顔をした。
多分レンですらあのときは活路を見出せなかったのかもしれない。

「ですが、情報は得ました」

「あ、あのうろろしている奴らのこと？」

「はい」

確か宮島先輩の話しによれば、その男子生徒達はやっぱりSF関係であったこと、そいつらが俺達を襲う可能性があるということ、つまりその中の何人かは参加者である可能性が非常に高い。
すると一つの結論に至る。

「何者かが裏で奴らを率いているかもしれない…そういうことか？」

「はい」

やっぱり…どこの誰だか知らないが、随分とすごい作戦を考えるものだ。

戦うにしても、ほとんどは一般生徒だから戦うことが出来ない。面倒な連中である。

「そしてもう一つ。あの宮島先輩のエントリーナンバーは3番でした」

「お前、そこを見ていたのか?!」

「はい」

レンは俺と目をつけるところが違う。
きちんと情報を収集出来る。確かに、パートナーとしてなら心強いことこの上ない。

「なので、またおさらいしましょう」

3 宮島先輩

6 鎖使い（巖島真理恵）

17 司

20 レン

25 齒舞

「→のようになるわけだな、今は」

「はい」

こうして見ると、まだ状況は全然分かっていない。
すでに脱落者がいるかもしれないし…

「やはり情報不足。しかし、あの新ルール…大変すぎますね」

「ああ」

俺達は1週間以内に誰かに勝ってバッジを手に入れなくてはならない。
これから激戦になるだろう。

「ですが…」

「分かってる」

俺達はその中でも勝ちを見出さなくてはいけない。
それは絶対である。

「じゃあ俺は寝るけど…」

「あ、若様。私と添い寝したいときは言って下さい」

「い、いや別にいいから！」

「そうですか？」

こういうときに変なことを言うんじゃない！

レンはやっぱり常人とはネジが違う。
違いすぎる気がする。

「ではおやすみなさい」

「ああ…」

俺はそんなマイペースなレンに挨拶して寝ることにした。
明日も…早い。

「よし司！飯を食いに行こうぜ！」

「ジョージ…お前はいつも元気だな」

俺は昼休み、ジョージを連れて食堂に向かう。

「昨日は女子にフラれたショックで昼飯を食べられなかったが、今日は大丈夫だ！」

「…」

ジョージっていつも思うけど、変な奴だよな。
何でコイツと俺が友達なんだろう？

「げっ！」

そんなとき、ジョージが声を上げた。
どうやら食堂の様子についてのようだ。

「…今日も混み混みだな」

「昨日も混んでたのかよ?!」

「ああ」

このままじゃ埒が明かない。
早めに別れてみるか：

「ジョージ、別れて座るか？」

「えー。でもまあしょうがねえか」

ジョージは少し不服そうに言いながらも、俺の提案を受け入れた。

「じゃあ帰りに合流だな」

俺達は食券を買って、並んだ。

ちなみに今日はきつねうどんである。

：俺は和食が好きだ。特にうどんと餅。

「はい、きつねうどん」

「どうも」

俺は食堂のおばちゃんに挨拶し、空席を探す。

ドン

「おっと！」

「あ、ごめんなさい」

俺は横の人とぶつかってしまった。

「いえ、平気です」

「そうですか」

俺とぶつかった人はにこっと笑って立ち去った。

少女のような顔立ちなのに、男子の制服を着ていたのが印象的だった。

「ま、いいや」

そして俺は空席を見つけ座る。

「げ…」

「ん?…ああ!」

幸か不幸か、俺の向かいに座っている奴は、あの鎖使い、厳島真理恵だった。

「何あんた、狙ってるの?」

「違うよ! たまたまこの席が空いたから座って…」

「どうだか」

「…」

何か俺に対して随分と刺々しくなったな…とは言いつつ結構しゃべっているけど。

「ふん…私達は敵同士よ。分かってるの?」

「いや、そうだけど…」

私生活の彼女は結構かわいいな、とか思っちゃったり。ちよつとだけだぞ? あんなにおっかない出会い方したから余計にそう思うんだな…

「むかつくわね…ん?」

すると彼女は俺のうどんを凝視した。

「どうした？食べたいのか？」

「違うわよ！」

彼女は俺の方をキッと睨むが、すぐさまうどんに視線を戻す。
一体なんだ？彼女は何がしたいんだ？

「あの…そろそろ食べて良いか？」

「え…」

そういうと彼女は何か複雑な顔をした。
何かを言いたそうで言えないみたいな、そんな感じ。

「まあいいや。いただき…」

「待って！」

「へ？」

彼女は俺に食べさせてくれなかった。

もう腹減ってるんだけど…

俺は彼女を怪訝そうに見る。

まさか…俺に食わせない気なのでは？！…いや、彼女はそんな姑息なことはしなさそうだ。

「このうどんは私が食べていい？」

「は？ やっぱりお前が食べたかったんじゃないかよ。でもダメだ。俺は腹減ってるからな」

「待ちなさい！！」

「うおっ！！」

そして彼女はとうとう俺から箸を取り上げた。

「何するんだよ」

「も、もう一度うどんを頼みなさい。私がお金を出すから」

「いや、意味がよく…」

俺は混乱する。こいつはここまでして一体何がしたいんだ？

「いいから！ このうどんはとにかく食べちゃダメ！」

「ええ？！」

彼女の理不尽な発言に俺は混乱するばかり。

「お願い！！ いい？！」

「わ、分かったよ…」

俺が彼女の要求を呑むと、彼女は妙にホッとしていた。何でだよ？ 俺にはさっぱり分からない。

で、俺は食券のきつねうどんを買い直し、もう一度頼みに行った。

「…」

彼女は俺がいなくなったことを確認すると、うどんの中に箸を突っ込んだ。

そして捕まえたのは一匹の小さな虫。

「…姑息な手段ね」

彼女はその虫を箸で潰した。

オーダー後、「鎖使い」の前の席が空いていたので、また俺はそこに座る。
ちなみにうどんはもう無かった。

「あれ？うどんは？」

「人にあげた」

「はあ？！」

俺には彼女の行動の意味が分からなかった。

「ていうか俺のことを待っててくれたの？」

そう、彼女の前にある皿は全て空である。つまり食後。

「な…そ、そんなわけないでしょ！食後の休みよ休み！単なる休み！そんなことも分からないの？！」

「え？あ、そうだったんだ。すまん…」

「ふん。分かればいいのよ！」

彼女は結局俺が食べ終わるまで目の前にいた。

…なんか監視されてるみたいだったな。つまり、俺のことを監視していたのか？

その後、ジョージとの約束も忘れ、二人で戻っていった。
珍しいものだ。

―某所―

「戦いは以前より激化しています」

「そうか」

暗い部屋で男達が話している。

「特に：風紀委員長の宮島はかなりの強さです」

「ふ：強さだけで生き残れるほどSFは甘くない」

男達はクツクツと笑い、喜んだ。

彼らは監視する存在。楽しいはずである。

「まあ現在優勢なのは宮島と…佐渡というところか…」

彼らは窓の外の日を見上げた。

満月になるにはあと少しぐらいの月が彼らを照らしていた…

第7話 圧倒的強さと、姑息な戦法と（後書き）

戦いは未遂に終わりました。

まあ「まだ」これでいいですね。

登場人物紹介

みやじま れいか
宮島麗華

ペロポネソス学園の風紀委員長で、3年生。

身長は170センチで、長い髪を後ろで束ねている。

かなりの薙刀の使い手で、SF優勝候補。

今回は「習得せよ！与那国流第一奥義、神速！」

どうやら特訓編…というか説明編みたいのですね。

第8話 習得せよ! 与那国流第一奥義、神速! (前書き)

また題名が変わっています。
すいません。

第8話 習得せよ！与那国流第一奥義、神速！

朝、俺はいつもどおりに稽古をしていた。
レンと一緒に。

「踏み込みが甘いです！」

「ヤアッ！！」

俺はレンとのいつものぶつかり稽古をする。
レンは軽い割に中々の力強さだ。それにスピードも相当なものだ。

「おお、司、レン、やっとなるな」

「父上…」

そんな稽古中に父が俺達の元にやって来た。

「例のあれは順調か？」

多分SFのことだろう。

「はい、一応」

「そうか」

父は自分の竹刀を取り出した。
そして俺に向ける。

「え？」

「与那国流奥義の一つ目を見せてやろう」

「与那国流奥義?!」

与那国流奥義とは4つある与那国流の必殺技みたいなものである。確か1つ目は素早い踏み込みで相手に近づいて一閃する、神速だった。

ちなみにレンは一つ目をすでに習得している。

これを3つ習得すれば、師範になることが出来る。

そしてこの奥義を4つ習得している者は、現在は父だけである。

「お前は反射神経はすでに一流だ。それにスピードもある。だから見せてやろう。レン、相手を頼むぞ」

「はい！」

俺の目の前でレンと父が対峙するのを見た。

「行くぞ！」

「はい！」

バキン!!!!

「?!」

気がつくとうちはすでにレンの背後にいた。そう、一瞬だった。

父が態勢を低くした途端に、すごい音と共に父がいつの間にかレンの背後にいた。

そしてレンの竹刀は完全に折れていた。

「…レン、よく受け止めた」

「しかし…」

レンの手は震えていた。多分あまりの威力に手が痺れてしまったのかもしれない。

だが、それでも俺にとってはすごいことだ。あの父の攻撃を1撃でも受け止められるとは…

「で、司。分かったか？」

「…早すぎてよく分からなかった」

「まあそうか…」

父が頬をポリポリと搔いた。

「レン、司にそれを教えてやれ。これぐらいなら司も習得できると思う」

「はい！」

レンは2年前にすでに神速を習得した。

与那国家でない者でこの習得の早さはナンバーワンであった。

それほどレンの才能はすごい。いや、俺が大したことないのか？

「では行きますよ、若様！」

「おう！」

俺はレンと共にまた稽古を継続した。まずは足の踏み込みから。

授業ってどうしてこうも眠いんだろうね…

隣のジョージは寝てるし、寧々はうつらうつらしてるし。その割にレンはきちんとノートを取っている。

ああ…俺も寝られたらな…だって寝たらレンに起こされちゃうんだよな…

「はあ…」

「与那国、私の授業でそんなため息とは、いい度胸だな」

「いいいい?!」

いつの間にか教師が俺の前に立っていた。

隣のジョージにこぶが出来ているのを見る限り、ジョージを起こすついでだったのかもしれない。

なんと運の悪いことか。

「さて、ちゃんとノート取っているか？」

「わあああ!!」

先生に思いっきりノートを覗き込まれた。

「これ、先週の部分だが」

「き、気のせいですよ! アハハハ…」

俺は数式を適当に羅列して書いてある自分のノートを見る。

「そうか。じゃあ明日までに例題10を解いてきなさい。宿題よ」

「マジかよ…」

ただでさえSFで忙しいのに…
というかジョージの方が確実に悪い気がするのに、俺の方が罰がきつくはない？

「司のバーカ」

「くっそ…」

寧々にまでせせら笑われ、この理不尽な授業は終了した。

「絶対あの教師、俺のことが嫌いだ」

昼休み、屋上でトモ姉、寧々、レンと食事をしているとき、俺は先ほどの授業の愚痴を言った。

「レンはどう思う？」

「そうですね…少しやりすぎでは？という感がありますね」

「だよな。レンもそう思…」

「ただし!!」

レンが俺の発言を遮って俺を睨む。
何かまずかったかな…？

「ノートを取らなかったのはいけません！だから自業自得です！」

「へーい…」

「何かレンちゃんの方が私よりお姉ちゃんって感じ」

トモ姉が俺とレンを見比べながらそう言った。

「いやいや巴お姉ちゃん、あれはどちらかと言うとお母さんね」

今度は寧々が俺達を批評する。もう勝手にしてくれ。

「でもさ。レンちゃんって司のことどう思ってるの？」

トモ姉がレンに軽い調子で話しかけた。

「私ですか？ 若様は若様ですが…」

「や、そういうことじゃなくてね」

寧々が口を挟む。

「レンは司をどういう目で見てるのか？ ってことよ。例えば弟とか、息子とか、男とか？！」

最後の方で少し興奮しているぞ、寧々。

「そうですね…主君みたいなものです」

「…」

「…」

「…」

俺達3人は押し黙る。

この答えは予想外と言うか予想通りと言うか…反応しづらいものではある。

「？」

そんな空気に首をかしげるレン。
理解した、レンは多分KYだ。

その日、俺達は何もせず帰ることにした。
俺の特訓のためだ。個人的には早めにバッジを取りたいのだが、慌
てて失敗したら水の泡だ。
だから俺は我慢してレンと一緒に稽古に励む。

「あ、司ちゃんとレンちゃん！」

「おう、トモ姉」

そんなとき、トモ姉が道場にやって来た。

「稽古に精が出てるね」

「トモ姉はどうしたの？」

「私は今日もご飯を作りに」

「サンキュ！」

俺はトモ姉にまた感謝した。

トモ姉の作るご飯は美味しいからな。レンも何だかんだで満足するだろう。

「あれ？」

しかし俺は一つ気になることを発見した。

「トモ姉、その指、どうしたの？」

俺はトモ姉の左手中指の絆創膏を指指す。

「あ、これ？これはちよつと料理で失敗しちゃって…」

「おいおい大丈夫かトモ姉？俺も夕飯作るの手伝おうか？」

「いいから。大丈夫だよこれくらい」

トモ姉は笑顔で俺の提案を断る。

「そうか？まあ無理はしないでくれよ」

「うんうん」

トモ姉は笑顔で頷いて道場から出て行った。

それにしてもトモ姉が料理で失敗：珍しいこともあるんだな。
俺の記憶ではトモ姉が料理で失敗するなんて滅多にない。
最後に失敗したのは小学生の頃だったかなあ：

「若様、稽古を続けますよ」

「おう！」

俺は再び両足に力を入れる。

神速に大事なのはこの足捌きだ。

確か父は5メートルほどの距離を一瞬で移動した。

動体視力が凡人より遥かに高い俺でも見えなかった。

「では、私が神速を打ちます。なので、受け止めてください」

「お、おう…」

自信は無いが、やれるだけやれなくては。

俺も構えの態勢に入る。

正直あのスピードについていけるとは思えない。しかし、ただ前だけ、レンだけを見つめる。

「行きます」

レンが構える。

そして態勢を低くし：レンは目の前から消えた。

「だあっ！！」

しかしそのレンが消えた瞬間に、俺はうめき声をあげた。

俺を襲ってきたのはレンではなく、痛みだった。

「わ、若様?!」

俺の背後にいたレンが肩ひざを着く俺に駆け寄る。

「くっ…」

俺は神速を受け止められず、そのまま腹にダメージを受けた。
威力が手加減されていたのがせめてもの救い。手加減なしだったら
完璧にやられていただろう。

「申し訳ありません! 若様に怪我をさせてしまったら…」

「大丈夫」

俺は立ち上がる。こんなところで諦められない。

「ですが…」

「もう一度だ」

俺はレンを力強い目で見た。俺は強くならなくてはいけない。
レンみたいに…父みたいに。

「分かりました。では行きます!」

そうしてレンとの特訓を再開した。

―校内―

「ちっ！ここもダメか…」

一人の男が廊下の影で悪態を突いた。

男の視線の先には男達がうろうろしていた。

「どうする光世^{こうせい}？」

男は光世という長髪の男に話しかけた。

「そうだね…大樹^{だいぎ}、ここは二手に分かれよう。僕が囧になる」

光世に話しかけた短髪の男は大樹というらしい。

「だがいいのか？危険だぞ？」

「僕の方がこういうのは得意だろう？」

「そうだな」

男達は互いに頷きあって前を見据える。
そして：

「僕が奴らの注意をひきつける。その隙に屋上に」

「分かった」

それを言うと同時に光世は廊下の男達へと駆け出し、大樹は階段を
急いで上がっていった。

そうして大樹は何とか屋上に到着。

「ふう…この一番上の監視塔を占拠すれば…」

「ほう」

「?!」

大樹の上から声が聞こえた。
急いで声のする方を見た。

「お前は…佐渡?!」

「ここまでたどり着いたのは見事。かなりの防衛線をくぐり抜けてきたようだな」

佐渡は自分の傍らに掛けてある大鎌を手にとった。

「まさかお前がボスカ。そしてボス直々が本拠地を守っているとはな」

大樹は自らの武器の双剣を構えた。

「数に頼ってるお前には負けないぜ」

「何を言っているんだお前？」

「?!」

佐渡は一気に大樹との距離を詰めると、鎌の柄で大樹を突き飛ばした。

「な、何い?!」

「お前は勘違いしている。俺はお前より…いや、他の誰よりも強い自信はある」

そうして佐渡は二撃めを大樹に与える。

「ぐうつ…」

何とか双剣で防ぎきるも、かなりの威力で腕が痺れてしまった。

「ハハハハ：ハハハハハハ！」

佐渡の笑い声が屋上全体に木霊した。

それと同時に天の雲行きも怪しくなっていたのだった。

第8話 習得せよ! 与那国流第一奥義、神速! (後書き)

次回から本格的バトル小説になります。

バトルが非常に多くなるということです。

次回は「自分を信じろ司! 神速炸裂!」です。
とうとう神速が本格的に:

第9話 自分を信じる司！神速炸裂！（前書き）

さあバトルフェイズがやって来ました。

第9話 自分を信じる司！神速炸裂！

寝覚めは普通。いつもと同じ朝。ただ、今は天気が晴れているため、朝の日差しで起床できた。

俺が住んでいるのは日本家屋。洋室というものは全く無いので、ベッドをホテルと保健室でしか知らない。

ただ、それを不満に思ったことも無い。俺はやっぱり和風が好きだ。だが…

「この日本人形だけはやめて欲しいよな…」

俺は父にお守りだから、とゴリ押しされて飾ってある日本人形を見る。

髪の毛が伸びたり、瞬きをしたり、口が動いたりしそうだ。

元々怖い話なんて苦手ではないのだが、昔寧々がこの日本人形のことで俺を散々脅かしたせいで、この人形についてのみ、苦手である。そんなことを思いながら、俺は朝の支度を整えるために着物を脱ぐ。あ、俺は寝るときはパジャマじゃなくて着物だ。

それはともかく、俺がパンツ一丁のとき、襖が開かれた。

「?!」

「おはようございます若様」

「いいいい?! レン！ノックぐらいしてくれよ!!」

「あ、申し訳ありません」

レンはペコリとお辞儀をする。

本当にレンは非常識と言うか…なんか常人とはかけ離れているな。

「まあいいよ…おはようレン。先に道場に行っててくれ」

「はい」

俺は胴着に着替える。早速昨日の続きをしなくては。

結局昨日の稽古で俺は、「神速」を受け止められたのはわずか1回。しかも、やりすぎるとレンの足に負担が掛かるため、あんまりやってない。

そして受け止められたのはマグレ…もう少し頑張らないとな。

俺は傍らにある、愛用している木刀と竹刀を手取る。

そして自分の部屋に一礼して道場に向かう。

部屋にあるゲーム機は埃を被っていた…

「ハッハッハハハハ！！バツカじゃないの〜！！」

俺は昼休み、寧々に大声で笑われた。

「うるせー。たかが宿題忘れたくらいでそんなに笑うな！！」

俺は昨日の特訓のせいで、出された宿題をやるのをしっかりと忘れていた。

そのせいで、俺は授業中にスクワットし続けることになったのだった。

…あの教師、意味わかんねえ…

「ですが筋トレになりましたね」

「そういう基礎トレはもういいって…」

あんなの子供の頃に何度もさせられた。

あ、一応言っておきますが、授業中に最後までスクワットをし続けましたよ。

確か1745回くらいか…？

まあ神速を習得するにはこれくらい出来なくては…

「じゃ、俺は外に行く」

「若様?!」

俺はみんなと食堂には行かずに適当に人気のあるところをうろつくことにした。

人気がなかったら襲われる可能性があるし…

それにしても、いくらなんでもみんなSFのことを気にしなさすぎの感が…

何か違和感あるなあ…

それに俺も早く強くならなくては…

「?!」

そのとき、俺の体が強烈にどこかに引っ張られた気がした。そうだ、この感覚はどこかで…

「ああ!!」

気づくと、薄暗い部屋の中に俺がいた。背後には一つの扉。

「占い師ドレミ…?」

「よく来ましたね」

「いや、来たくて来た訳では…」

やはり、ここは占い師ドレミの部屋だったか。何でまたこんなところに…

「悩みがあるのでしょう?」

「悩み…」

そうだ、俺は神速についての悩みがある。

「俺はとあることを習得したいんです。でも…中々上手くいかなくて。時間もあまり無いんです」

俺はダメ元で相談してみる。答えが出てなくても、どちらでもいい。

「そうですね…」

彼女は自分の前にあるオーブに手を添える。

そして何かをブツブツ呟いて、俺の方を見た。

「どうかしたんですか？」

「あなたはまだ自分の中に眠る力に気がついていないのですね」

「俺の中に眠る力？」

俺は占い師ドレミに訊き返す。

「はい。ですが、己の力を信じればいずれ…解放できます」

「…」

何かありきたりな答えだな。どういうことだ？

「具体的に言えば…自信を持ってやって見よ、ということです」

「全然具体的じゃねえなオイ」

「フッフ…私はあなたを応援していますよ」

…この人は何を考えているんだ？

相変わらず不気味な笑みとか浮かべるし。でも何故か不快ではないんだよな。

「それと…夜になっても自信が出ないと破滅しますよ」

「はあ？」

何を言っているんだこの人は？

「ではお帰りください。次のお客がお待ちですから」

「はあ…」

最後まで訳の分からない人だな…

俺は後ろの扉を開ける。

そしてその先の真っ白な空間へと足を踏み出した…！

「?!」

気がつく俺はさっきまで自分がいた場所にいた。

あの時と同じだ。一体どういうトリックなんだ？

「若様！」

「おおレン」

そしていつの間にかレンが俺の背後にいた。

「お昼を抜きますと力が出ませんよ」

「そうだな…」

俺は時計を見る。

「?!」

時計はさっきより30秒ほどしか進んでいなかった。

俺はさっきまであの占い師の部屋にいたんだぞ?!

なのに時計がこれだけしか進んでいないって…どういうことだよ?!

「どうかしたんですか？」

「いや…」

俺は平静を装い、レンについて行くことにした。

今は考えるのを止めよう…

俺とレンは今夜は道場に帰らなかった。

今は多分激戦になっているのだろうから、様子見をするためだ。

つまり、情報が集めやすいというレンの魂胆だ。

ただ、その分リスクも大きい。いつ戦闘になるか分からないからだ。

「今回は二手に分かれたほうがいいよな？」

「…そうですね」

レンは不安そうに俺を見る。

「大丈夫。もう絶対にへまはしない。危なくなったらすぐに逃げる」

一応足には自信がある。

「…分かりました。1時間後、この部屋で合流しましょう」

「分かった」

ちなみに、今俺達がいる部屋は家庭科室である。
教室はいろいろと危ないからだ。

「では、気をつけて」

「レンもな」

俺達は別行動を開始した。

しばらく散策するが、やはりうろうろしている男子生徒が異常に多

い。

ただ、幸いにも彼らはそこまでの手練でないため、気配を消していれば気づかれることはない。

俺は気配を消しながらも、情報収集を再開する。

戦いがあったら幸いなのだが、意外にも、戦いが見られなかった。そしてそのまま1時間過ぎるかと思ったとき、敵の気配を感じた。

「?!」

俺は廊下の曲がり角あたりを睨む。

あの先に誰かがいる。ただし、宮島先輩では無いだろう。

彼女はもっと恐怖を感じる。

俺はそっと近づいてみる。向こうも気づいているだろう。

そして…

「「誰?!」」

俺とその相手は同時に曲がり角で声をあげ、武器を構える。

「お前は…」

「あなたは…」

なんと、相手はあの鎖使いであった。

「何だ…お前か…」

俺は少し安堵をした。が、それも束の間であった。

「死になさい!!」

「え?!」

彼女は問答無用で俺に鎖を投げつける。
それを俺は咄嗟に防いだ。

「何するんだ!」

「それはこっちのセリフ!! 私達は敵同士なのよ?! 攻撃して何が悪いの?」

そうだった…俺達は敵同士だった。
つい最近、一緒に昼を食べたりしたせいで、その意識がすっかりと希薄していた。

「だ、だが…」

「問答無用よ!!」

彼女は前と同じように俺に何本もの鎖を放ってくる。
どうやら指一本につき、一本の鎖を取り付け、操っているようだ。
俺的にはこんなことをしている場合ではない。
早くレンと合流しなければならぬし、それに、情報収集したいので、こんなところで戦いたくない。

「ちよっ! 話を聞けっ!」

「あなたを倒したら聞いてあげるっ!!」

彼女は攻撃をやめず、俺はまたステップと捌きをする羽目になる。

このままではまた追い詰められてしまう。

「覚悟を決めなさいっ!!」

「ぐう…」

俺の左腕を鎖がかする。

そしてその腕に鎖の先に付けられている刃で切り傷が付けられた。その傷口から血が滲み始める。

こいつ…本気だ。俺を殺すかどうかはともかく、俺を本気で倒すつもりだ。

俺は鎖使いの次の攻撃に身構える。とにかく、ここは何とかしなければならぬ。

「分かった…俺も覚悟を決める」

「そう。そっちの方が倒しがいがあるわ」

俺は鎖使いと対峙する。

そして思い出す。気剣体の一致を。どれかが欠如してしまえば、完璧な斬撃が繰り出せない。

「さあ！避けられるものなら避けてみなさい!!」

「なんだと?!」

鎖使いは狭い廊下の壁に鎖を反射させて、俺の方へと攻撃を仕掛ける。

狭い廊下のせいで、鎖は何回も反射して俺のところへとやって来る。しかもその蛇行する鎖が十本。確かに防ぐのは至難の業。

狭い廊下を上手く使った素晴らしい戦法であった。

「くっ…」

攻撃の軌道が読めない。一本なら何とかなるが。

俺は迫り来る鎖を辛うじて防ぎ続ける。しかし、このままでは埒が明かない。

「やっぱりあなたは予想以上に強いわ」

「どうも…」

そんな俺の声には余裕なんて含まれていない。

何せこのままでは近づくことが出来ない。リーチの長さは相手のほうが上だし、闇雲に突っ込んでも、あの蛇行する鎖の餌食になりかねない。

「どうすれば…」

レンだったらこういうとき、どうするんだったか？

俺は前のレンと鎖使いの戦いを思い出した。

確かあの時レンは鎖を1本ずつ断ち切っていた。

俺にも同じことが出来れば…

「さあもつと踊りなさいっ！」

鎖使いが再び鎖を放ってくる。

俺は一番前の一本のみを凝視する。眼球が素早く左右に動かして軌道を見極める。

「そこだ！」

俺は手前の一本に木刀を一気に振り下ろす。

「?!」

ガキンという音がしたものの、鎖は断ち切れなかった。

「まずい!!」

その間に2本目の鎖が俺の右足に刺さってしまった。

「ぐあああっ！」

「これでさっきのようにには動けないわよ」

「くっ…」

そして続いて3本目の鎖が俺の右腕を狙う。

これは何とか阻止。しかし、足が思い通りに動いてはくれない。

「はあっ！」

そして4本目と5本目、6本目が同時に俺を襲う。

俺はやっぱり弱い…

俺は自分の負けを悟る。偉そうなことを言っというてこのザマは何だ。足には自信がある? 怪我しちまったからお終いじゃないか。

そんなとき、俺は占い師の言葉が甦った。

自信が出ないと破滅しますよ

まさかこれはこのことを言っていたのか……でも、どうすればいいか……分からないんだ……！そのとき、周りの風景が一瞬にして変わった。

「?!」

「お困りのようね」

「あなたは!!」

俺の目の前にいたのはあの占い師であった。どうして彼女が俺の目の前に現れたのか。

「私の言うことを聞かなかったでしょ？」

「そんなの分かりっこないって!!」

あんな意味深な言い方じゃ何も分からないって！

「それで、どんな悩みなのかしら？」

「う……」

悩みと言うか……しかし、今はもう形振り構ってられない。

「俺、どうすれば自分に自信を持てるのかわからないんだ……」

「……あなたは今、深刻な問題に直面しているのね」

彼女はフツと微笑んだ気がした。

何故だろう、何でこんなに懐かしい気がするんだ？

「あなたの中に語り掛けなさい。力を貸してくれて。そうすればあなたの習得したいものが習得できるかもしれないわ」

「?!」

俺の中に語り掛ける？

どうということだ？

「自信を持ちなさい。いい？あなたは強いだよ。心から勝ちたいと願えば、結果はついてくるわ」

彼女の言葉は占いと言うより、応援…エールに近いものだった。
俺はそんな言葉に心を強く打たれた。

「じゃあそろそろ行きなさい。どの客よりも優先にしてみましたから、お客さんが詰まってしまうわ」

「あ、すいません…それと、ありがとうございます！」

「期待しているわ」

彼女のその言葉を背に受け、俺は扉からこの部屋を出て行った。
そして…目の前には3本の鎖。

つまり、現在の状況に戻ったということだ。

「俺は…勝つ！」

俺は3本もの鎖を横薙ぎで一閃した。

「3本の鎖、全てを断ち切った?!」

俺の横薙ぎは3本全ての鎖を見事に断ち切れた。

そして語り掛ける。俺は勝ちたいと。

すると、俺の全身の血が沸騰するように熱く感じた。

一体この感じは…?

しかし、それに気にする間も与えてくれず、鎖使いは次の攻撃を繰り出す。

相手の鎖はあと7本。そして相手の手元には4本だ。

その4本の鎖の攻撃を俺は前よりも軽くなった体でかわすことに成功する。

「何で?! 急に動きが変わった?!」

足の痛みを気にせず、俺は次の態勢に入った。

相手に攻撃の準備が出来ていない。そう、この鎖を10本放った後、鎖使いには隙が出来る。

だが、距離が遠すぎて、近づく間にまた餌食にされるのが普通。

彼女もそれを分かっているのか、焦った表情はしていない。

だが、それは普通の近づき方の話だ。

「これでも…」

彼女は攻撃の態勢に入る。

だが、それより早く、俺は態勢を低くする。

そう、この状況を打開するにはあれしかない。

与那国流第一奥義…

「神速!!」

「えっ？」

俺は彼女の攻撃よりも早く攻撃をスタート。
5メートルの距離を、俺は1歩で詰め、横薙ぎをする。

「きゃあっ!!」

鎖使いの声が後ろから聞こえた。
俺は神速を成功させたのだ。

「どうして…この距離を一瞬で…？」

どうやら攻撃する瞬間に彼女は鎖でダメージを軽減させたらしい。
彼女はまだ立っていられた。

だが、ほとんどの鎖を俺は断ち切ることに成功し、彼女も足には相当ダメージを負った。

…俺の勝ちだ!!

「どうだ…はあ…俺の勝ちだ…ぐっ！」

俺は片膝をつく。怪我した足での神速は予想以上に俺の右足に負担をかけたらしい。

「はあはあ…あなただってその状態で勝ったとはいえ…?!」

彼女が息を切らせながら何かを言っていたが、途中で目を見開いて固まった。

「どうし…しまった!!」

「へっへっへ…」

どうやら俺達が激しく戦っていたせいで、例の男子生徒達が10数人も俺達を囲んでいた。

俺は片足を負傷。鎖使いの彼女は鎖がほとんど無くなっている。つまり、絶体絶命。

「くっ…」

「私としたことが…戦いに集中しすぎて…」

俺も目の前に集中していたせいで気がつかなかった。このままでは共倒れだ。

「なあ…この量を相手に勝てるか？」

「…無茶を言わないで」

彼女が弱気な発言をするとは…だが、俺もさすがにこれは…

「ちょうどいい。お前らのバッジを貰うでしょう」

「くっ…!!!!」

周囲全てを囲まれ、俺達に逃げ場は無い。

こいつらは初めからこれを狙っていたのかもしれない。くっ…どこの誰だか知らないが、完全にやられた。

そのとき…

「え？」

一本の閃光が俺達の目の前を通り過ぎた。

「ぐあっ!!」

それと同時に俺達を囲んでいた男の一人が吹っ飛ばされた。
何が起きたんだ…?!

俺の頭は混乱するばかりであった…

第9話 自分を信じる司！神速炸裂！（後書き）

次回は「脱出せよ！闇夜の学校！」

何か物語が本格的に動き出しましたね。

第10話 脱出せよ! 闇夜の学園! (前書き)

司の男の見せ所ですね。
さて、どうなのか…

第10話 脱出せよ! 闇夜の学園!

俺は夜の学校廊下の曲がり角で「あの」鎖使いに遭遇。

そしてそのまま崩し崩しの戦闘を開始してしまう。

彼女の鎖を使ったトリッキーな攻撃に、俺は倒されそうになってしまふ。

だがそのとき、占い師ドレミの言った言葉が勝利へのヒントになった。

俺はそのヒントを生かし、鎖使いに神速をお見舞いし、彼女の撃破に成功する。

しかし右足を負傷していた俺は神速による負担で片膝をつく。

そんな俺達を学校内をうろうろしていた男子生徒達がニヤニヤして囲んでいた。

どうやら俺達は嵌められた様だ。初めからこれが狙いだったようだ。絶望する俺と鎖使い。

だがそのとき…

「え?」

一本の閃光が俺達の目の前を通り過ぎた。

「ぐあっ!!」

それと同時に俺達を囲んでいた男の一人が吹っ飛ばされた。

何が起きたんだ…?!

俺は目を凝らしてよく見る。

男に刺さっていたのは…矢だった。

「な、なんだ一体?!」

男達と俺達は一斉に矢が飛んできた方角を見る。
しかし、遠すぎて誰がいるのかがよく分からない。

「ぐあっ！」

そして今度は二人目の男が飛ばされた。
もちろん矢で。

「おい、今のうちに逃げるぞ」

鎖使いは俺の発言に頷いて逃げる態勢に入る。

「待ちやがれ！！」

それに気がついた男達は5人ほど俺達の前に立ちふさがった。

「くっ…！」

負傷している足で逃げ切れるか…？

俺は彼女を見やる。

彼女も悔しそうな顔をしている。

「へっ…これでお仲間がまた増えるぜ」

男達はそう言って俺に近づく。
が…

ビュオオオッ！！

「?!」

すごい音がして矢が5発、5人の男達に命中。
何という精度の高さ。どこの誰だか知らないが、助かった。

「今のうちだ!」

「うん!」

俺は鎖使いと一緒に走った。
だが…

「くっ…」

彼女は足が限界のようで、顔がかなり苦しそうだ。

「誰かが足止めしてるから大丈夫だろう…俺の背中に乗れ!」

「だ、大丈夫よ!それくらい!」

俺も足が負傷しているが、我慢するしかない!

「いいから!」

俺は鎖使いに強く言った。
このままじゃコイツを気にして逃げられない。

「う、うん…」

彼女は少し俯いて俺の背中に乗る。

全く…何を恥ずかしがってんだか…

「行くぞ！」

俺は駆け足で家庭科室に向かう。

レンと合流すれば後は何とかなるはずだ。

「若様！！」

「おっ！ラッキー！」

前方からレンが走ってくるのが見えた。

「レン！」

「若様！っ！こいつは？！」

レンが鎖使いを見てびっくりして、そして身構えた。

鎖使いもキッと彼女を睨む。

「レン！話は後だ！俺達は今追われてるんだ！力を貸してくれ！」

「…分かりました」

レンは渋々俺の言ったことを了承した。

鎖使いを見る目は依然として厳しい。

「ほら。後ろから声がするだろ？」

「…ですが、どうやって逃げますか？私としては戦ってもいいので

すが…」

「いや、あいつらにお前の力を見せられない。すでに俺達二人は見られてしまった」

「詳しい話は分かりませんが、若様がそうおっしゃるなら！」

レンは俺の隣に来て併走した。

しかし、このままでは追いつかれるのも時間の問題。

何せ俺は右足には大量の血…

「しまった！」

俺の血の跡を奴らは追ってきているのか！！

「レン！どうやら俺の血がいけないらしい！」

レンが足元を見る。

「若様！」

「だからこのまま校内を逃げることは…！」

俺はこの間のことを思い出した。

俺と鎖使いの1回目の戦いのときだ。

「なあお前。使える鎖、何本ある？」

俺は背負っている彼女に質問した。

「え?…一応2本ほど」

「よし。お前、前に俺と戦ったときに、鎖をターザンロープみたいに使ってたよな?」

「若様まさか…」

「出来るか?」

俺は彼女に訊いた。

「…し、仕方ないわね。私の力が必要なんじゃないわ」

俺達は近くの教室に入った。

そして彼女は俺の背中から降りて、窓の外の木に向かって2本の鎖を刺した。

「はい、貴方達…アンタが一番重そうだから、アンタは一人でそっちの鎖」

俺は彼女に指示されたとおり、一人でぶら下がることに。

そしてレンと鎖使いが一緒の鎖に掴まった。

…あの二人、大丈夫かな…?

「おい!あの教室に入ったぞ!」

「ヤバイ!急ぐぞ!」

俺達は一斉に鎖に掴まって、木の方へと飛んだ。

「ああ!!」

後ろから声が聞こえるが、俺達は無視した。
そして、何とか一つ目の木に到着した俺達。

「で、これを学校を出るまで繰り返してくれるか？」

「しょうがないわね…」

彼女はため息を吐きながらも、全然嫌な顔はせず、俺の言うことに従った。

「ありがとう」

「別に」

しかし、俺の感謝に対して彼女の返事はそっけないものだったけれど。

そうして俺達は何とか学校外へ逃げ出すことに成功した。

「はぁ…助かった…」

俺達は一応胸を撫で下ろす。

一応校外なので、襲われることは無いはずだ。

「ふう…」

「わっ！」

そのとき、疲れが限界に達していたのか、鎖使いは俺のほうへ倒れ

こんだ。

「ちよっ…大丈夫か…？」

「若様。気を失っています。結構疲労していたのでしょ」

「そうか…って俺も結構足が…」

「あ！申し訳ありません！」

レンは自分の胸元に手を突っ込んだ。

「?!」

そして取り出したさらしを俺の足に巻いた。

「レ、レン?!」

「どうかしましたか？」

「い、いや…」

忘れていた。レンはこれがデフォであった。

ただ、巻かれている生地の生暖かさが…エロい。

「？」

レンは俺を見て首をかしげる。

「な、何でもない。とりあえず、こいつはウチまで送るけど…」

「…仕方ないですね」

やっぱりレンは不服そうだ。

この二人、初対面が最悪だからな…

「すまん」

「いえ、若様の言うことは絶対ですから」

…良かった。俺が鬼畜な野郎じゃなくて。

レンがもしとんでもないヤツに仕えていたら…大変だな。

「あ、レン。お疲れ様」

「若様も」

俺達はそう言い合って、夜の帰り道を歩いた。

翌朝、傷を一応治した俺は、昨日と同じ朝稽古をしていた。

「若様！傷は大丈夫なんですか？！」

「何かもう治ってる」

「え？」

レンが俺の右足を見る。

少し傷跡はあるものの、結構傷跡は消えていた。

「すごい回復スピードですね…」

「そうだな…」

自分でもこれは驚きである。

「へえ…随分と大きな道場ね」

「よう。起きたか。体は大丈夫か？」

道場に鎖使いがやって来た。

「まあね」

レンはまた身構えている。

「な、なあ…俺達さ、一応今は休戦協定を結ばないか？」

「「ええ?!」」

二人同時に俺のことを見つめた。

「いやさ、何か今、学校に変な男達がいるだろ？あの件が片付くまでだよ。あ、俺はもちろんずっとでもいいけど。お前もそう思うだろう？」

「…ならお前って呼ぶのは止めてくれないかしら？」

鎖使いは俺をチラッと見てそう言う。

「じゃあ何て呼べばいいんだ？」

「巖島でも、ま、真理恵でも…」

「じゃあよろしくな真理恵」

「…!!き、気安く呼ばないでよ…」

そう呼ぶと真理恵は顔を赤くしてそっぽを向いてしまった。
いや、じゃあ何で真理恵って言ったんだよ。

「若様、それで今日なんです…」

「あ、そうそう。俺達で情報交換しないか？」

「いえ、それよりも…」

レンが声を潜める。

何かまずい事でもあるのだろうか。

「昨日の学校の荷物を持って帰っていません。急いで持って帰って入れ直さなくては」

「そっちかよ!!」

俺はレンの天然ボケに呆れる。

ちなみに真理恵もため息を吐いていた。

「私は一応家に帰るわ。そ、それと…あ、あ、あああ…あ、ありがとう…」

彼女はそっぽを向いたまま蚊の鳴くような声で感謝をした。
素直じゃないヤツだな…

「じゃあレン、俺達は学校に行くか」

「はい」

そうして真理恵は家に帰り、俺達は学校に向かうことになった。

「寧々」

学校から帰宅した跡、食卓上でぶっ倒れている彼女に声をかけた。

「お腹空いた…司く。何か作ってよ」

寧々はジタバタする。

いや、お前は家で食べてくれるだろ。

こいつはトモ姉の作ったご飯を愛すあまり、朝は絶対ここで朝食を摂るのだ。

「トモ姉は？」

「見てのとおり不在」

「オイオイ…」

と、いうことは俺が作る羽目になるかもしれない。
勘弁してくれよ。俺は結構疲れてるんだ。

「だってよ、お前さ、俺が作った料理食べてトモ姉と比較して文句言うだろ？」

「言わない！言わないから作って〜！！」

「コンビニにでも行け」

「ヤダヤダ！一步も動けないも〜ん！」

寧々は子供のようにその場にジタバタしていた。
こいつは本当に…

「では私が作りましょうか？」

レンが食卓に顔を出した。

「「いや、あなたは下がってください！」」

「そうですか。残念です」

俺と寧々は同時に拒否の言葉を唱えた。

レンの料理では死者が出てしまう…

レンは特に気にもせず自室へと戻っていった。

「さて、寧々。お前には二つの選択肢がある。一つ、今すぐコンビニ

二でパンでも買ってくる。二つ、これまで自分がした俺への悪行を土下座で謝罪して俺に作らせる」

「今まで散々舐めた口聞いてすみませんでした！」

寧々は速攻で俺に土下座をした。

こいつはプライドの欠片もねえようだ。

「…しょうがねえな」

俺は仕方なく朝食を作ることにした。

何だかんだいって甘いな、俺も。

―某所―

「現在の戦況は？」

「佐渡が圧倒的有利に戦いを運んでいる」

事務的で、感情の籠らない二つの声が、薄暗い部屋に響く。

「宮島の動きは？」

「佐渡との接触は出来ていない。いや、佐渡が嫌がってるのだろうな」

「そうか…」

そんな薄暗い部屋に一人の女性が入ってきた。

「何々？どうしてそんな深刻な顔をしてるの？」

「これは会長」

会長と呼ばれた女性はニコニコしていた。

「ふーん…SFも結構進んでるんだね」

彼女は手元の資料を適当にパラパラと捲っていた。

「じゃあね。私、今から仕事しなくちゃいけないから」

「気をつけて」

「大丈夫だよ」

会長が部屋から出ていき、さっきまであった明るい雰囲気は消失した。

「さて：これからどうなることやら：」

彼らはククツと薄気味悪く笑った。

まるでSFは自分達の遊びであるかのように。

第10話 脱出せよ! 闇夜の学園! (後書き)

次回は「激戦の予感?! 深まる謎!」です。

SFについての謎が一つ出来上がります。
そしてSFは激しくなっています。

第11話 激戦の予感?! 深まる謎! (前書き)

連日更新は疲労します。

もう疲れたよ(＊、0、＊) || 3

第11話 激戦の予感?! 深まる謎!

キーンカーンコーン

授業終了のチャイムが鳴り、俺達は食堂に向かう。

ちなみに俺達と言うのは、俺とレンとジョージと寧々である。

そんなとき、俺は後ろから声をかけられた。

「おい、与那国」

「種貸主将…」

話しかけてきたのは剣道部主将の種貸先輩だ。

「剣道部に入らないか？」

「その勧誘は75回目です」

「え?! 俺的には73回目だと…」

「前の数と変わってないじゃないですか!」

「そうか？」

まあこんな勧誘の回数なんて本当はどうでもいい。

そんなどうでもいいところに凝るのが俺達の悪い癖。

「俺は昼食を摂るので、失礼します」

「せめて大会だけでもー!!」

俺は彼の声を振り切って食堂に向かう。
そろそろ諦めてくれないかな…

「司ー! 急がないと席がなくなっちゃうわよー!」

「ああ!」

寧々に呼ばれ、俺は食堂まで駆け出す。
そして俺達は何とか4つの席確保に成功する。

「今日は何とか大丈夫みたいだな」

俺達はそれぞれ別の食券を買い、別のメニューを頼んだ。
ちなみに俺が頼んだのは、とろろそば大盛りである。

「アンタ…本当に飽きないわね」

「何言ってるんだ? そば・うどんはジャパンの誇りだぞ」

寧々に俺は言い返す。

そば・うどんが無い世界だと、俺は確実に生きられない。

「せめて日本の誇りと言いなさい。ジャパンじゃ何か矛盾みたいなものを感じるわ」

「なあ。ラーメンが伸びるから早く食べた方がいいんじゃないか?」

「くっ…正論なのがむかつく…」

寧々はフンと言いながらラーメンをすすする。

「なあSFのことなんだけどさ…」

「?!」

ジョージがSFについて口を開いた。

俺達はジョージを一斉に見た。

まさか食事中にSFの話題が出るとは思いもしなかった。
しかもジョージの口から。

「お前らはどうなのか知らないけど…本当にやってるのかな？」

「どういうことだ？」

俺は平静を装って訊き返した。

「だってさ、戦いの痕跡とか無いじゃん」

「…そういえばそうかもな」

俺は食堂を見渡す。確かに食堂にはどこもおかしいところが見当た
らなかった。

多分ここも夜は戦場になっているのだろう。

「ま、俺には関係ないからいいけどな」

ジョージはそう言って自分のカレーライスをまた、食べ始めた。
俺は少しパツとしなかったが、気にせずそばを食した。

さて、昼食が終わった。

このまま教室に帰っても面白くないしな…

俺は一人でこの間の真理恵との戦闘現場を見に行くことにした。
そして…

「?!」

そこはいつもと変わらぬ廊下だった。

この間の戦闘の痕跡など一つもない。

特に壁は真理恵の鎖で傷ぐらいあってもおかしくないのに。

「…」

俺はそこらへんを一人で歩き回った。

何か無いか？昨日の戦いの痕跡が。

俺はうろろと探し回る。

そんなとき、俺は前を見ていなかったなので、曲がり角で誰かとぶつかってしまった。

「キャッ！」

「うわっ！」

どうやら俺の方が重かったようで、相手のほうが尻餅をついた。そして、声からして女の子であった。

「ゴメン…俺、前見てなくて…」

「あ、私も前見てなくて…ごめんなさいです…」

彼女はとても幼そうな外見をしていた。

身長は130センチ台か？

「えーと…キミはこの学校の生徒だね？」

「そうですよ。あ、もしかして私のこと小学生って思いましたか？！」

「あ、いや、そんなことは…」

すいません。ちょっと思っていました。

「私、これでも高校1年生です！」

「あ、ゴメンゴメン…悪気は無かったんだ…」

俺は後輩の彼女に頭を下げた。

だが、頭を下げてでも彼女より身長が高いというのはなんだか…

「まあいいです。よく言われますから。それじゃ…きやつ！」

「オイ…」

彼女は俺の元から立ち去ろうとしたときに、派手に転んだ。

「あー私って本当にドジで…キャツ！」

そしてまた彼女は転ぶ。

この廊下には何もないし、滑りもしないんだけどな。

俺はそんな彼女を見送り、昼休みが終わるまで探索をすることにした。

「…熊さんパンツはお子様っぽいんだが」

ちなみに俺は転んだ彼女のパンツをしっかりと記憶していた。

いや、見たくて見たわけじゃないぞ。

さて、とうとう放課後になった。
結局戦闘の痕跡は見つからず、俺にとっては疑問が一つ増えたことになる。

「それで、今日はどうする？」

すでに金曜日。学校に来なきゃいけない日は、今日で最後になる。

「そうですね…さすがにバッジを取りにいかねばいけませんね」

そうなのだ。早くしなければ期限の1週間が経ってしまう。

つまり、俺達は負けていないのに敗北することになる。

まあ最初の真理恵との戦いは実質、負けであるかもしれないが。

「よし、じゃあ今日は戦いに行こうぜ」

「…焦りは禁物です。今日は私と一緒に行動を…」

「それがダメなんだよ」

俺はレンにダメ出しした。

「レンがいると、俺達に勝負を挑みにくくなる。挑んでくるのは強敵か、バカだけだよ。それに、そんなバカはもう敗退してると思う」

「…」

レンは黙って俺の話を聞く。

「だから一緒というより、少し離れて行動してくれ。レンは俺の気配を察知できるギリギリの場所にいれば、いざというとき助かるだろう？」

「…若様のいうことは一理ありますが…」

レンはまだ不服そうだ。

「俺がピンチだとお前が判断したときは遠慮なく助けに来てくれて構わない。それでいいか？」

「…若様がそう言うなら」

「不服か？」

「若様を危険に曝したくないと思ってはいけませんか？」

「俺をSFに参加させた時点でその発言は不適當だぞ」

「…そうですね。申し訳ありません」

レンは珍しく落ち込んでいた。

その理由が何にせよ、俺達はやるしかない。

「じゃあ俺はここを出て行く。しばらくしたら俺を追ってきてくれ」

「分かりました」

レンは強く頷いた。どうやら気持ちの切り替えはもう終わったらしい。

さすがというところだな。俺はもちろん感心する。

「じゃ、また後でな」

「お気をつけて」

俺は軽く手を振って廊下に出た。男達がうろうろして俺の方をチラチラ見ていた。

まあ怪我をしていない俺ならこいつらなど余裕で倒せる自信はある。それに、いざというときのためにレンがいる。

俺はわざとそいつらに姿を見せながら廊下を移動した。

「…」

なかなか敵が現れない。

ちょっとやりすぎたか？ 罠だと思われたか？

レンの気配は感じられない。それはそうだ。俺はレンに気配察知範囲ギリギリに俺を入れろと言った。

そしてレンは俺より気配察知能力が優れている。

「そういえばこれではレンにもしものときがあつた場合に対応できない…」

俺は自らの作戦の穴に気がついた。

しかし…ここで戻ってしまつては作戦が完全に台無し。
俺はしばらく待機してレンの気配を探る。

だが、反応は無かつた。

「…」

どうする？ 戻るか？ 戻らないか？
そのとき、レンの気配が感じられた。

「ふう…?!」

しかし、ホツとしたのも束の間、レンの気配は激しく動き回つていた。

まさか…戦闘中か!!

狙われたのは俺でなくレン。俺はレンの元に駆け寄ることにするが…

「な…!!」

そんなとき、視界の端で誰かが目に入った。

いや、誰かではない。俺のよく知っている人物だ。

「寧々…?」

俺が視界の端で捉えた人物は寧々…みたいな女子生徒だった。
後姿だし、視界の端だし、正確には分からないが…

しかし…今は追う場合じゃない。レンの元に行かないと…俺は今度こそ走り出した。

「レン！！」

「若様…」

レンは息を切らせながらこっちに駆け寄ってきた。どうやら戦闘が終わったようだ。しかもレンは無事みたいだ。

「戦闘は？」

「終わりました。最後、煙幕で逃げられましたが、バッジは一つ入手しました」

「おお！」

レンの掌の上には、16と書いてあるバッジが置いてあった。

「それで、相手はどんなヤツだった？」

「何か女の忍みたいな人間でしたね」

「くの一のことか？」

「はい」

…まさか忍者の末裔がこの学校にいるのだろうか。その可能性は高いな…

「じゃあ名前も顔も分からず…？」

「はい。最悪顔だけでも…と思いましたが、中々手ごわく…」

「その割には傷を一つも負っていないようなんだが」

レンはピンピンしている。

むしろ戦闘したのかどうかすら疑問だ。

「相手は様子見だったのでしょう。私も手はほとんど見せませんでした」

「さすがレン…」

俺はすでに神速を真理恵と男子生徒共に見られてしまったしな。だが、あのときは仕方がなかった気もするけど。

「それで、今日はどうする？」

「…もう少し見て回りましょう」

「分かった」

レンはこれで何とか1週間ルールを凌げた。

だが俺はまだ。レンはそれを気遣っているのだろう。

しかし、この後、俺達は全くと言っていいほど敵と遭遇しなかったのであった…

夜の自室で俺達二人は集まっていた。
男女が夜に一つの部屋と言うのは…いや、よそう。
レンだから何も起きはしない。

「では、報告をします」

レンが俺に一礼する。

「現在のバッジの状況はこうですね？」

3 宮島先輩 (薙刀)

6 巖島真理恵 (鎖)

16 謎のくの一 (武器不明)

17 司 (木刀)

20 レン (木刀)

25 齒舞 (武器不明)

「そうだな」

前よりは随分と分かってきた。

前の男達のバツジも見ればよかったのだが、あのときはそんな場合ではなかった。

「私からは以上で。若様は？」

「俺は…」

俺は今日あったことを思い出した。

「あのさ、俺は今日の昼休み、真理恵との戦闘現場を見てきたんだ」

「そうですか」

真理恵と聞いて少し顔をゆがめるレン。

あんまり好きじゃないんだな、やっぱり。

「そのときの戦闘の痕跡が全く無かった」

「全く？階層を間違えたりは…」

「この間のことだぜ？間違えるわけねえよ」

「そうですか…」

レンは少し考え込む。

「それは確かにおかしいですね…」

何で壁の傷が消えるんだ？ しかも何事も無かったかのような消え方だ。

そう、あれは壁の傷を消したのではなく、傷自体が初めから無かったかのようにだった。

「…それについてはまた今度にして、もう一つあるんだ」

「もう一つですか？」

「俺がお前と別行動したときの話なんだけど…」

俺はレンが戦いをしていた時のことを思い出す。

「俺、学校で寧々を見たような気がするんだ」

「寧々さん…ですか？」

「ああ」

レンは複雑そうな顔をした。

「実は私も…見たんです。若様が最初に鎖使いと戦った翌日に」

そういえばあのときのレンの様子は少しおかしかった。

「見間違いでないのなら、寧々はまさか…」

「そうですね。SF参加者の可能性が高いですね」

「でもそうだとしたら、何で俺達に言わなかったんだ？」

「…さあ…」

さすがにレンも分からないらしい。

とりあえず、明日、朝食を食べに寧々がやってくるだろう。
そのときに訊くでしょう。

「じゃあそれは明日にでも訊いてみようぜ。俺は明日に備えて寝る」

まだバッジを獲得していない俺は、そろそろ危ない。

「そうですね」

俺はレンと別れて寝る態勢に入った。

―某所―

「現在はどうなってる？新人」

「そうだねえ…配属先としては満足してるよ」

「お前のことじゃない。SFのことだ」

ちよっとおどけて答える「新人」と呼ばれた男。
それに対して相手の男は多少イラついていた。

「分かってる分かってる。そんなに睨まないでよ」

男は笑いながらも謝る。正直、誠意が感じられない。

「戦況は佐渡が有利…だけどね。表向きは」

「表向きだと？詳しく教えろ」

「ハハハ。ダメだよ。そんなに簡単に教えちゃったら面白く無いじゃん」

「…お前に好感は持てなさそうだな」

「別に女の子にさえモテればどうでもいいさ」

新人と呼ばれた男は小さくウィンクした。

それを見た相手の男は小さく舌打ちして頬杖をついた。

第11話 激戦の予感?! 深まる謎! (後書き)

今回は「仕掛けられたクナイ! 救済の閃光!」でござーます。
戦いは過激にーなっていくー。

第12話 仕掛けられたクナイ! 救済の閃光! (前書き)

土日は隔日更新にします。

土日は執筆が出来ないので…

第12話 仕掛けられたクナイ! 救済の閃光!

朝起きたとき、体がすごく重かった。

別に何か俺に乗っかっているわけでもない。

ただ単に疲れが溜まっているだけなのか、嫌な夢でも見たのか…

だが、そんなものを気にしている余裕は俺には無い。

早速胴着に着替えて、道場に向かわなくては。

俺はダルイ体をフル稼働させ、道場に向かった。

「おはようございます若様」

「ああおはよう」

レンはすでに道場で正座して待っていた。

さすがはレン。俺より気合が入っている。

「若様…お顔があまり優れないようですが…」

「え? そうか?」

俺は鏡を見てもなんとも思わなかったぞ。

「いつもより血の気が無いように感じられます」

「そうか? 気のせいじゃないの?」

「いいえ。私は若様のことならほぼ何でも分かります。若様の匂い、若様の体格、若様の…」

「もういいもういい！恥ずかしいから止してくれ！！」

「？」

レンは再び首をかしげる。

こいつは本当に俺に対して何とも思わないのかねえ…
ちょっと悔しいぞ。

「確かに俺はいつもより寝覚めは悪かった。それだけだ。メシ食えば何とかなるって」

「そうですか…ですが、あまり無理はなさらず…」

「分かってるって…」

やっぱりレンは口うるさいな。

本当に俺の保護者みたいだ。まあ母さんなんて顔ももう覚えていないし…

「ではウォーミングアップと…神速を見せてください」

「ああ…」

そういえばレンの前で神速はまだやったことなかったな。
俺は態勢を低く構える。
レンもそれを見て身構える。

「いくぞ！」

「はい！」

それと同時に俺は地面を蹴った。そして一步でレンとの距離を詰める。

そして俺はレンに横薙ぎを放つ。

「やあっ!!」

パン!!

竹刀と竹刀がぶつかった音が聞こえた。

やはり父のように折ることは出来ないか…

「どうだ？」

「…素晴らしいです…! 若様はさすがです! ほぼ完璧に神速は習得できています!!」

「そ、そうか…? これなら宮島先輩にも少しは…」

「それはまだ無理ですね」

「そうだよなあ…」

やっと俺はスタートラインに立てたのだ。
つまり、本当の特訓もこれからだ。

「じゃあ昼食を食べた後に学校に向かおう!」

「はい!」

俺達はこのまま朝稽古に明け暮れた。

食卓には中々豪勢なメニューが載せられていた。
今日も朝食をトモ姉が作りに来てくれた。
俺達にとっては嬉しい限りだ。

「司。与那国流第一奥義、神速を習得したそうだな」

「あ、はい」

俺は父親にそんなことを言われた。

「よくやった。だがまあ…少し遅かった感もあるが…」

それは俺の練習嫌いのせいです。

特に朝稽古は面倒くさくてしょうがなかった。

「へえ…なんだか知らないけど、司ちゃんよかったね！」

トモ姉に俺は頭を撫でられる。

「い、いいよ。恥ずかしいから！」

俺はトモ姉を引き剥がした。

するとトモ姉はかなり残念そうな顔をした。

「折角私が褒めてあげてるのに…」

「いやまあ…それはありがたいんだけどさ…」

さすがにこういうのは恥ずかしいというか…そういう年頃なんですよ！察してくれ！

「あれ？寧々さんがいませんね」

「あ、ホントだ」

昨日のことやSFのことで訊こうと思ったことがあったのに…

「たまにはこういうこともあるんじゃない？」

トモ姉は特に気にはしていない。

まあ気まぐれのアイツのこと、気にすることの方がおかしいのかもしれない。

「そうだな…」

でもまあ、あいつの家に顔でも出してやるか。

俺はそんなことを思いながら味噌汁をすすった。

俺は昼飯を食べ終わった後、寧々の家に向かった。

レンにもちゃんと許可を取ったので、レンには道場で待ってもらおう

ことにした。

俺は寧々の家のインターホンを鳴らした。

「はい」

すぐさま、インターホンからそんな声が聞こえた。
多分寧々のお母さんだろ。

「突然すいません。与那国司ですけど…」

「司ちゃん?! 寧々に用なの?」

「はい。寧々はご在宅中でしょうか?」

「うーん…それがね、何か朝にどこかに出かけちゃったのよ…」

「え?」

寧々が出かけた? 友達とどこかに出かけたのだろうか?
いや、それとも…

「寧々はそのとき制服を着ていたんですか?」

「そうだねえ…確か制服を着ていたかもしれないわねえ…」

「そうですか…ありがとうございます!」

「あ、司ちゃん! お茶でも飲んでいけばいいのに!」

「いえ、それはまた別の機会にします。さようなら!」

俺は急いで寧々の家の前から離れ、道場に向かう。
寧々が制服を着て行く場所…学校か、それとも…
いや、間違いなく学校だ。

だが、わざわざ土曜日にどうして…
忘れ物？ならもうすぐ帰ってくるだろう。
と、すれば答えは自然とある場所に行き着いてしまう。

「レン！」

「若様、どうでした？」

俺は門前で待機していたレンを呼んだ。

「寧々は今学校にいる」

「それはつまり…」

「ああ。十中八九、寧々はSF参加者だ」

「…そうですか」

レンは複雑そうな表情を見せる。

実際、俺も複雑である。例えば、寧々がもし目の前にいたとして、
戦えるか？

…多分無理だ。だが、寧々は俺達に参加していることを言わなかった。
た。

それは俺達に参加していることを知られたくないという証拠。
何かしらの理由があるんだろうが…俺も寧々もまだ、バッジ獲得を
達成できずに出会ってしまったら…

「若様。学校に行きましょう」

「ああ」

俺は力強く頷いた。

そうして、俺達も寧々に遅れて学校へと入っていった。

土曜昼間の学校は恐ろしいくらいに静かであった。まるで、平日の

夜の学校みたいに。

「なあ。学校自体の様子がおかしくないか？」

「多分殺気や闘志によって校内に殺伐とした空気が漂っているのかもしれない」

学校に塀から侵入した俺達は、裏庭でそんなことを会話していた。ていうか裏庭と言ったら：

「真理恵のトラップは?!」

「私達には反応しないようにしているのかもしれない。現に罠の気配はあるのに、発動する気配が感じられません」

真理恵のヤツ：俺達のためにトラップを解除したのかな？

「それとも…」

レンが腕を組みながら考える。

「外されたのか…」

「外されたって…罠？」

「はい」

レンによれば、敵によって密かに罠を外された可能性があるということ。

「じゃあレン、先に進もうぜ…ん？」

そのとき、俺達…いや、俺の周りに急に霧が立ち込めた。

「…敵、か」

俺は目を閉じて気配を探知する。

多分これは敵の結界というヤツで、俺とレンが狙われた。そして、標的は俺だろう。

そしてレンは必死に俺を探しているのかもしれない。

「…近くにいたことくらい分かっている」

俺が敵に語りかけるも、返事がない。

「…右斜め45度！」

俺は切磋に目を開いて木刀で飛んできたクナイを防いだ。

「背後斜め30度！」

次に俺は一回転して続いてのクナイも叩き落した。

「左右同時、ともに45度！」

俺はバック転でそれをやり過ごす。

遠距離から俺を狙ってくるとは、随分と卑怯なヤツだ。

「おい！俺に遠距離攻撃は無駄だぜ」

そして敵を挑発してみる。

しかし反応が無い。つまり、近づく気はないということか。

「ならばこっちから…?!」

そのとき、クナイの気配が全方位から感じた。

全方位攻撃だと? どうやって防げばいいんだ?

「ちっ…」

俺は周囲に目を凝らす。どうすれば…どうすれば…

ヒュッ

そのとき、俺の前を一本の閃光が通った。

「わっ!」

そしてその閃光が俺の周囲に降り注ぐ。

「な、何だ?!」

その閃光は次々とクナイを撃ち落とし、俺の周りにとうとうクナイの気配が無くなった。

「これって前にも…」

俺は地面に刺さっている矢を見る。

確か、真理恵と男子生徒達に追い詰められたときもこの矢で助けられた。

「誰が俺の味方を…？」

「若様！！」

そのとき、霧が晴れ、レンの姿が見えた。
敵は去っていったようだ。

「大丈夫でしたか？！」

「ああ」

俺は周囲に散らばるクナイと矢を見ながらそう言った。

「無事でよかったです…では、校内に行きましょう」

「ああ」

それにしても俺を襲ったやつ…忍者みたいな奴…まさか…
いや、そうだ。アイツはレンと戦った奴だ。

「どうしましたか？」

「いや…」

俺は考えるのをやめる。

このことに関しては、今日の夜にレンに言えば良いか。

― 繁華街 ―

巖島真理恵は深夜の繁華街を歩いていた。

深夜なので、普通は店は閉まっているはずなのだが、ここはまだ賑やか。

彼女はそんなところを一人、派手な格好で歩いていた。

髪の毛をきちんとセットし、服装は露出の多い格好。化粧もきちんとし、スカートの丈はものすごく短い。

「ねえ彼女。一人？俺達と遊ばない？」

そんなとき、いかにも遊び人みたいな5人の男達が彼女を囲んだ。みんな下卑た笑いを浮かべ、考えていることなど丸分かりだ。彼女はそんな彼らにニコリと笑った。

「どういう風を楽しませてくれるの？」

彼女は媚びたような顔をして、彼らに告げた。

「そうだね…キミを快楽の彼方へと導いてあげられるよ」

「それは楽しみだわ」

真理恵は満面の笑みで応対をする。

「じゃあ、じゃあ、俺達と遊んだ方がいいって!!」

男達の一人が鼻息を荒くして近づいてくる。

真理恵はそんな彼らに嫌な顔一つせずに応対した。

「うーん…でもちよつと人数が多すぎるかな…」

「えー!じゃあさ、何人がいいの？」

男達の厭らしい顔は直らない。

完全にケダモノ化している。

「一人ずつ相手をしてあげるわ。順・番・よ」

「ウツヒョー!可愛い顔して結構エッチだねー!」

男達は喜ぶ。

「ジャンケンで順番を決めてくれる？一人が済んだら順番に呼ぶから」

真理恵は笑顔のまま、男達を見た。

まるで、今の時間を楽しんでいるかのようだ。

「分かったぜ！よし！ジャンケンポン！！」

男達は躍起になってじゃんけんを開始した。

みんな一番を所望らしい。

「よっしゃ！まずは俺だな！」

「ちっ！まあいいぜ」

「じゃあ行こうぜ！ドコ行きたい？」

「あなたと二人っきりになれる場所…」

「わかった。とっておきの場所に連れてってやる」

男は真理恵の肩を抱いてラブホテルへと足を進めた。

「フフ。男の人って本当にエッチな人ね…」

「へへへ…」

男と真理恵はそう言ってホテルへと入って行ったのであった…

第12話 仕掛けられたクナイ! 救済の閃光! (後書き)

次回は「破られた神速?! 地獄への狂想曲!」

司の大ピンチが到来。

相手は…

第13話 破られた神速! 地獄への狂想曲! (前書き)

まさか神速がもう効かないのか…?

それにしても、最近は特に眠いです。

第13話 破られた神速！地獄への狂想曲！

日曜日の朝、俺とレンは急いで学校に行く準備をすることにした。あの後、結局寧々は見つからずじまい。

つまり、寧々の消息はつかめず。

しかし、昨日の夜にはすでに帰宅していた。

なので、寧々にどこに行っていたのかを聞いただして見たのだが、はつきりしない答えしか言わなかった。

だから俺達は今回、朝早くに学校に行くことにした。

今日は1週間ルールの最終日である。つまり、今日が正念場となる人がたくさんいるかもしれない。

と、いうことは、今や学校は参加者が大量にいるかもしれない。それだけ勝算も上がる。

「若様、準備が整いましたか？」

「ああ」

レンに準備確認をされ、俺は頷く。

今日は俺の中でも大一番となりそうだ。

「じゃ、行こうぜ」

俺とレンは道場に一礼した後、道場を出、家からも出た。

早朝の学校にも関わらず、学校には妙に人気が多かった。
そこら中に例の男子生徒達が徘徊しており、隠れて行動しにくい。
さて、どうするべきか…

「どうする?」

「まずは塀から侵入しましょう」

俺達は昨日と同じく、塀から侵入をした。

「校内に入るか?」

「そうですね…ここよりは安全でしょう」

外にいとどこからでも攻撃を仕掛けられてしまう。

俺達は自分達の教室に行くことにした。

ただ、監視の目をすり抜けるのは至難の業だったが。

「それで、どうする？ 寧々を探すか、バッジを獲るか…」

「もう時間はあまりありません。バッジを獲りにいくのが先決ですね」

「そうだな」

俺達は意見が合ったので、作戦を立てることにする。

「今日は1週間ルールの最終日。一度も勝てていない参加者は今日は絶対来る。まさか俺だけ…だったらどうすればいいんだろうな」

「それはまず無いでしょう。それに、うろろうしている男子生徒もいます」

最悪は奴らを倒すしかない。あ、バッジをつけている奴を探してな。でもこれは骨が折れそうだ。

「じゃあ今日は例の如く、別行動だ」

「分かりました。私はギリギリの位置で若様を護衛します」

「あ、出来ればさ、俺の気配察知範囲内にいてくれるか？」

そうしないと、この間のような失敗をしてしまうかもしれない。レンが襲われたとき、俺は察知できないから。

「分かりました。では気をつけて」

「ああ」

俺は先に廊下に出た。

そして、敵探しをスタートさせた。

「…意外とみんな慎重だな…」

校舎内をしばらくうろついていたが、俺に対しての殺気などが全く感じられない。

わざと姿を見せられているにもかかわらず、襲ってこない。

やはり罠だと思われているのか？作戦は失敗か？

しかし、まだ分からない。この学校はマンモス校だ。

つまり、校舎の大きさはものすごく広い。ドームよりも断然広いだろう。

「…ん？」

そんなとき、俺の視界の先に人が見えた。

「あれは…」

しかも倒れている。そして、女生徒みたいだ。

俺は罠だとは全く思わずに、駆け出した。

「おい！…？！」

俺はその女生徒を見て驚いた。

「寧々…？！」

そう、倒れていた女性とは寧々であった。

「おい！しっかりしろ！寧々！」

「う…」

彼女は目をうつすらと開けた。

「よかった…」

「つかさ…?」

彼女は俺の名前を呼んだ。

「司!」

その後すぐに目を見開いて身を起こした。

「お前…やっぱり参加者だったのか…」

寧々の胸元にあるたった一つのバッジ。八番と刻まれているそのバッジ。

それが、彼女はSF参加者であることを証明していた。

「くっ…」

そのとき寧々が突然苦しんで倒れてしまった。

「寧々! 寧々!」

寧々はその後、グッタリと倒れたままだった。

よく見ると体中のあちこちに痣のような跡があった。

残っちゃったかどうかするつもりなんだよ…!

「畜生…誰がこんなことを…」

SFだからやられるのは仕方がない、と思えないほど俺は冷静さを欠いていた。

ただ、今は寧々をこんな風にした奴が許せなかった。

「くっ!!」

気がつくと俺は駆け出していた。
レンの気配とかそんなものは全く考えずに走った。

司の気配が急に動き出したのを確認したレンは、自分も急いで彼を追うことにした。

戦闘になってしまったのかもしれない、と彼女はそう考えた。
しかし、そんな彼女の目に飛び込んできたのは一人の少女が倒れて

いる姿。

「寧々…さん…?!」

そう、彼女も知っている寧々を発見したのだ。

司を追っているのであれば、遭遇するに決まっているが。

「寧々さん!!」

彼女は寧々を抱き上げる。

どうやら気絶しているみたいで安心する。

そして彼女も寧々の胸のバッジを見る。

そのときのレンの表情はやはりという感じの顔であった。

「?!」

そのとき、彼女は重大なミスに気がついた。

こんなことをしている間に司の気配を見失ってしまったのだ。
しかし寧々をこのままにはしておけない。

「…（くっ…若様、ご無事で…!）」

レンは寧々を置いて行こうとした。

彼女にとっての第一は常に司であるが故の行動だ。

「クックック…」

「?!」

そんなとき、彼女の後ろから笑い声が聞こえた。

もちろんレンは気配に気がつかなかった。
つまり、かなりの強さ。

「いやいやここまで俺の策に引っ掛かってくれるとは、愉快愉快」

「貴様は…」

後ろの男は口元に怪しい笑みを浮かべながら、冷たい目でレンを見下ろした。

そして傍らにある大鎌がとても特徴的であった。

「与那国道場の西表蓮香。与那国道場師範代の与那国司よりも強いらしいな」

「な…!!」

相手が自分達のことを調べ上げていることに驚愕するレン。

「早速キミのバッジを全ていただこう。と、言いたいところだけど」

彼は一旦そこで言葉を切った。

「もっと面白いことがあるんだ。君のことはノックアウトで済ませ
てあげるよ」

「…貴様、私を甘く見るな」

レンは負けじと相手を睨みつけ、威嚇した。
しかし彼は冷たい表情を崩さなかった。
そして自然と互いに構えの姿勢に入った。

「さて、そろそろ骨のある相手であることを願うよ!!」

「はあっ!!」

二人は戦闘をスタートした。

俺は校内を駆け回り、寧々をボコボコにした奴を捜したのだが、見つからなかった。

それどころか、人にすら遭遇をしていない。

これはおかしい。

さすがの俺も気がつき始めた。

少し冷静になって考えてみる。

「…レンの気配が感じられない!!」

今更俺はレンのことを思い出した。

まさか…また戦闘をしているのかもしれない。

それとも…いや、レンはそこらへんの奴に負けるわけがない。

俺は今まで来た道を引き返すことにした。

急いでレンを捜さないと。それに寧々…

「ちくしょう!!」

俺は叫び声を上げて校舎を疾走した。

幸い、俺の周りに気配が感じられない。

つまり、敵が襲ってくることはほばないだろう。

こうして俺は寧々が倒れていた近くの場所まで走っていった。

「はあ…はあ…」

しかし、寧々が倒れていた場所には誰もいなかった。

寧々はどこかに連れていかれたのか?…レンあたりに。

「全力疾走ご苦労様」

「あ、どうも…!!」

そんなとき、急に後ろから来た声に俺はつい返事してしまったが、すぐに振り向いて相手を見た。

「やあ。与那国司君だね」

「お前は…誰だ？」

俺は睨みながら変な格好（9月なのに、コートを羽織っている）の男子生徒を見る。

なぜなら相手は2と彫られているバッジを胸につけているからだ。つまり、彼はSF参加者だ。そんな男が俺に話しかける理由はただ一つ。

「喧嘩を売っているのか？」

「好きに解釈すればいいけど…」

「若…様…」

「?!」

そんなとき、男の後ろからレンの息絶え絶えの声が聞こえてきた。胸のバッジは1個に減っていた…

「レン!!」

「逃げて…くださ…い…」

「なんだと…?」

男は俺を見てニヤリと笑った後、冷たい表情になった。

「勝手に会話に入ってくるな。死に損ない」

男はそう言って大鎌の柄の部分で倒れているレンの腹を思いっきり突いた。

「あああううっ!!」

「レン!!」

「主君の司君に向かって逃げろ？随分と情けないことを提案するんだなっ!!」

そう言って男はまたレンの腹を突いた。

「うぐうあう!!」

「やめろよ!!」

俺は思いっきり男を叫んだ。
こいつは…絶対に許せない。

「ああ…言い忘れてたよ。奄美寧々…骨のない奴だったよ」

「?!」

俺は次の瞬間、木刀を抜いて男に斬りかかった。

「そこなくっちゃ」

男はニヤリと笑みを浮かべた後、大鎌を構えて俺の攻撃を防いだ。

「若…様…」

レンの声は前よりさらに弱弱しくなった。
ただ、司の心配だけで意識を保っていた。

「クッククク：そんな柔い攻撃が通用するとも？」

「まだだっ！！」

俺の攻撃は着実に防がれていた。

レンを倒した男だ。認めたくないが、かなり強い。

「クッククク：さて、そろそろ諦めたらどうだい？」

「くっ：」

全ての攻撃を着実に読まれ、防がれていく。
しかも男はまだ一回も攻撃をしていない。

「こうなったら：」

俺が勝てる攻撃はあれしかない。

俺は男からある程度の距離を取った。

今回は足を怪我していない。だからいける。俺は神速の構えの態勢に入った。

「これで：！！」

「ふん：」

男は面白そうに鼻を鳴らして俺を見る。

完全に舐められている。だが、それを後悔させてやる。

「ダ…メ…」

レンが弱弱しく叫ぶが、俺には聞こえない。
すでに神速に集中している。

「…行くぞ！」

与那国流第一奥義…！！

俺は態勢を低くする。距離は充分。いける！！

「神速！」

俺は男との距離を一瞬で詰めて横薙ぎを払った。

ガギン！！

すごい音が後ろから聞こえる。

防がれているが、手応えはある。最低でも手首にはかなりのダメージが…

「神速の弱点その1」

「?!」

男の声は普通だった。いつもどおりの声だった。

「それは…攻撃後が隙だらけ」

「なっ!!」

彼は振り返った俺に回し蹴りを繰り出した。

「ぐうつ!!」

神速後の隙のおかげでモロに顔にダメージを受けてしまった。
というか神速が全く効いていない…?!

「ダメだな。そんなものが与那国流？」

彼は俺を嘲り笑っていた。

「クズか…与那国道場も所詮はゴミか…」

「何だと…!!」

俺の頭が沸騰した。

俺だけじゃなく、道場全体をバカにするなんて…!!

「道場まで悪く言うんじゃない!!」

「何寝ぼけたことを言っている!!」

「?!」

男の俺を見る目が険しくなった。

何で俺が怒鳴られなきゃいけない?!

「貴様は与那国の看板を背負って参加してるんだろう? 貴様が不甲

斐なければ道場の名に傷がつくのは当たり前だ。貴様がゴミであることは、イコール道場がゴミである。だから道場がゴミと言われても文句は言えまい」

「くうっ…」

こいつ、嫌な奴なのに、正論を突いてきやがる…

「はっ！貴様も所詮は言われるがままに戦いに赴いた人形か！」

「くっ…」

俺はコイツを睨みつけることしかできない。
なんて無力なんだ。

「さて、そろそろ終わりにしよう。つまらんからな」

「?!」

男は一瞬で俺との距離を詰めてきた。
そして…

「神速の弱点その2」

「?!」

「近づかれると神速そのものが打てない」

男は鎌を俺の首筋を狙ってきた。

「ぐっ…!!」

木刀で何とか防ぐ。だが、あまりの威力に腕が痛い。

「そしてその3！」

今度は足元を狙ってきた。

「片方の足が負傷するだけで威力は半減」

「何…?!」

鎌は俺の防御をすり抜けて俺の左足にヒット。

「んぐあっ…!!」

「クックック…。力の差は歴然だよ。でも可哀想だね…」

「？」

男は急に俺に哀れみの目を向けた。

「俺が何も手を見せないとさすがに可哀想だよ」

男は口元をゆがめる。

やっぱりこいつは嫌な奴だ。

「地獄への狂想曲^{カプリッツィオ}を奏でてやる」

「?!」

男は大鎌を自分の前で1回転させた。

「逝け」

男は俺に大鎌を振りかぶる。

これは受けるしかない…

「う…受けては…ダ…」

レンの声は俺の耳に入らず、そのまま初撃を受けた。

しかし、グニヤリと鎌の柄が曲がり、俺の右手首にヒット。

「あぐっ!!」

痛みで目を閉じてしまった俺は信じられない光景を目の当たりにする。

「刃が…曲がった…?!」

そして曲がった刃が俺の木刀を裁断した。

「な…!!」

「これで終わりだ。安らかに眠れ」

「くっ…」

目の前には鎌の刃。俺は丸腰。
万事休す…?

まんまるい月だけが俺達をしつかりと見ていたのだった。

<次回へ>

第13話 破られた神速！地獄への狂想曲！（後書き）

司以外の戦いは省かれる運命にあり…
ああ悲しき哉、レンよ。

次回「打倒佐渡隼人！奇跡のタッグ結成！」
誰と誰のタッグでしょうね…

第14話 打倒佐渡隼人！奇跡のタッグ結成！（前書き）

司の運命はいかに？！

第14話 打倒佐渡隼人！奇跡のタッグ結成！

神速を破られた俺は、男とまだ諦めずに対峙していた。
そして男が語り始めた。

「地獄への狂想曲カプリッツィオを奏でてやる」

「?!」

男は大鎌を自分の前で1回転させた。

「逝け」

男は俺に大鎌を振りかぶる。
これは受けるしかない…

「う…受けては…ダ…」

レンの声は俺の耳に入らず、そのまま初撃を受けた。
しかし、グニヤリと鎌の柄が曲がり、俺の右手首にヒット。

「あぐっ!!」

痛みで目を閉じてしまった俺は信じられない光景を目の当たりにする。

「刃が…曲がった…?!」

そして曲がった刃が俺の木刀を裁断した。

「な…!!」

「これで終わりだ。安らかに眠れ」

「くっ…」

目の前には鎌の刃。俺は丸腰。

殺しはしないだろうが、俺はここで負けたら敗退だろう。

1週間ルールによって。

くっ…

俺は目を閉じた。

：

：

：

ん？おかしいな？痛みが無いぞ？

俺はゆっくりと目を開けてみる。

「こ、ここは…!!」

この薄暗い部屋…最早おなじみの部屋だ。

「こんにちわ」

「あ、はい…」

例の如く、占い師ドレミが俺の背後から話しかけた。
なので、俺は彼女の方を見ることにした。

「前は有難うございます…」

確か彼女の言葉が戦いのヒントになった。

「ふふ。礼は結構よ。それが仕事だもの。それで、今度は何用かしら？」

そうだ…！

俺は今、大鎌の男と戦っていて…

「あの…ドレミさんはこれはもうダメだ…と思ったときはありますか？」

「あるわよ」

ドレミさんは即答した。

「人間だもの。そう思うことはあるに決まってるでしょ？」

どうやら彼女もそういうことがあるらしい。

つまり…

「あなたでも予言できないことはある、と」

「そうね…でも、貴方に関するのなら答えられるかもしれないわね」

「へ？」

俺は首をかしげる。

彼女の言ったことはどういうことなのだろうか。

「悩みを言って御覧なさい」

「あ、えーと…」

俺は今の自分の状況をありのままに話した。

もうSFのことを隠しても仕方がない。それに、彼女は気づいてい
るだろう。

「そういうことね。あなた、また弱気になってるわね」

「あ…」

「あれほど自分を信じろ、と言ったのにね」

「すいません」

でも、何とかなるのか？

「あなたは何を失ったの？手？足？違うでしょ」

「あ」

「あなた自身はまだ何も失われていないのよ」

彼女の言葉に説得力があるのは何でなのだろう？
俺が彼女の言葉を信じるのは何でなのだろう？

「自分を信じて。自分に語りかけるのよ」

「…はい！」

俺は再び目に闘志を宿した。

「いい結果を期待しているわ」

俺は堂々と扉を開けて元の世界に帰った。
目の前には大きな鎌。

「まだ…やられるかつ!!」

「?!」

俺は鎌の刃の部分を掌で挟んで止めた。
いわゆる白刃取りという奴だ。

「き、貴様…!!」

男が鎌に力を入れる。

「絶対…放すか…!!」

「くっ…」

俺は渾身の力で鎌を止める。
力を抜いたらそれまでだ。

「くそっ!!」

男は鎌に力を入れるのを諦め、俺に回し蹴りをしてきた。

「ぐおっ！」

両手の使えない俺は、わき腹にモロにヒットした。

「ちっ…少しは骨のある奴だな…。いいだろう、今は生かしておいてやろう。だが、1週間ルールの期限はあと少しだ」

「?!」

そういえばそれを忘れていた。

「まあクズはクズらしくそこの倒れている二人…」

男はレンと寧々を指した。

「あの二人のどっちかからバッジを獲ればいいがな。幸いともに動けないしな。ハハハハハ!!!」

「くっ…!!」

寧々もレンもバッジは一つ。そんなことをしたらどちらかを俺が脱落させたことになってしまう!

俺は男を睨む。俺の取るべき手段はただ一つだ。

「お前のバッジを…獲りにいく…!!」

「ほう…分かった。屋上の監視塔にいるからいつでも来ればいい。ただ…時間はあまり無いがな。ハハハハハ!!!」

男はそう言って去っていった。
今の俺には追いかけてもどうすることもできない…
武器も折られてしまったし…

「今は…こいつらを休ませよう…」

俺は寧々とレンを一人ずつ、近くの教室に運んだ。
机をくつつけて、その上に二人を載せる。

「若…様…」

「レン」

そのとき、レンが起きた。

「おい、まだ体は…」

「いいえ、一応平気です」

レンは俺の頬に触れる。

なんだかその部分の痛みが少し和らいだ気がした。

「つつ…」

「レン?!」

レンは自分の頬を押さえた。

まだ傷は癒えていないのだろう。

「若様…本気であの男を…?」

レンが珍しく不安そうな顔をした。
気持ちは分かる。俺も不安だ。

「ああ。お前が何を言っても、俺はアイツを倒す」

俺は握りこぶしを作る。

「アイツは俺に無い、何か強い意志を持っていた。でもだからって、アイツのした行動が許せるわけじゃない。アイツは俺の大事な奴らを傷つけた。だから俺はあいつを許さない。アイツを倒す！そして、SFを終わらせる！」

「若様…！」

レンが俺を見て驚愕する。

「これって、俺の確かな意志だよな？ 気剣体の気だよな？」

「はい！ ですが…」

「分かってる」

レンは俯く。

「いくら強い意志を持ったとしても、俺はアイツより弱いことに変わりはない。それに…武器も無いしな…」

俺は自分の折れた木刀を見る。

一番お気に入り奴で、剣道型の練習でもよく使っていた。

「武器なら…私があります」

レンは自分の武器を俺に渡した。

「今の私にはこれしか出来ません。あなたの身を守ること…出来ません！」

レンは悔しそうな顔をする。

こいつのこういう顔を見るのは久しぶりだ。

「だから…だから…！！必ず勝って…勝ってください！」

レンが泣きそうな顔で俺を見る。

本当に心配性な奴だ…

「はあ…」

「「?!」」

そんなとき、廊下から大きなため息が聞こえた。

「誰だ!!」

俺は木刀を構えた。

「なに悲壮感漂いまくってるのよ。あんた達」

「真理恵!!」

「き、気安く呼ぶなって…コホン！」

教室に来たのは鎖使いの真理恵だった。
確か今は休戦中で…

「司」

呼び捨てかよ。

いつの間にか随分な仲になったものだな、俺達。

「アンタ、あいつを倒しに行くんでしょ？」

「お前、アイツのこと知っているのか?!」

「まあね。昨日は燃料補給に忙しくて言えなかったのよ。悪く思わないでね」

はい？燃料補給？

「あの男…佐渡隼人。3年生で私達より上級生。そして佐渡財閥の若きリーダー」

「ええ?!あの男が?!」

何かすごい人があると言うのは知っていたが、人数が多すぎて把握できない。

「そ。例の男子生徒を金で扇動してるのも彼よ」

「そうか…あいつか…」

真理恵も少し嫌な顔をしていた。
彼女も気に食わないのだろう。

「頭にくるのよ。私も…!!」

「そうだな…」

俺はその佐渡のやり方は嫌いだ。
やっぱりイライラする。

「それで、鎖使い」

「何よ腰巾着」

「お、おいおい…」

相変わらず二人の仲はすこぶる悪い。

「若様、今すぐ休戦協定を破棄しましょう」

「レン！落ち着け!!」

レンの目が本気だ。本気と書いてマジと読む状態に突入だ。

「ま、いっつもくつついてるんだから否定しようが無いでしょう?」

何か真理恵の言葉には少し棘があるなあ…

「お前もやめろよ…な?」

「…ふん。それで…アンタは佐渡と戦うんでしょ？」

「ああ。避けては通れない道だ」

俺の顔が険しくなる。非常に険しい道のりだからだ。

「そ。私が手伝ってあげてもいいわよ」

「え？」

「な?! そう言って若様を後で後ろから…」

「しないわよ!! そんな卑怯なこと!!」

「最初はしたような…」

「あの時はしょうがないでしょ!!」

「あああ! 悪かった悪かった!! レンもマジ目は止めような? な?」

俺の失言のせいで二人の仲がますます…トホホ。

「ふん。もういいわ! 勝手にすればっ!」

真理恵は怒って教室を出て行こうとする。

「待って! いや、待ってください!!」

俺は彼女の腕を掴んだ。

「な、何よ…」

「頼む！」

俺は土下座をした。

「え?!」

「若様!!」

「力を貸してくれ!俺に力を…貸してください!!」

俺は頭を深く下げた。かなり限界だ。

いわゆる地面にキス状態だ。

「ちょっと!何でそこまで…」

真理恵の顔が戸惑いを隠せなくなっている。

「俺にはお前が今、必要なんだ…」

「……!」

真理恵の顔が真っ赤になる。

人に必要とされることってやっぱり恥ずかしいのだろう。

「しょうがないわ!そこまで言うなら…」

「最初に手伝ってあげてもいいと言っていたくせに…」

レンがボソツと呟いた。
お前ってこういうキャラだったか？

「何か言った？」

「な、何も言っていないよな？！」

「？」

俺が必死になって言うことに、レンは首を傾げている。
本当にコイツは…

「それで、佐渡の居場所は知っているんでしょ？」

「ああ。屋上の監視塔だ」

「そ。でもアンタは少し休みなさい」

真理恵が俺の体を気遣う。
まあ今は仲間だから珍しくはないか。

「若様、私も少しは動けるようになりました。だからここで寧々さんを守ります」

「分かった」

俺と真理恵が屋上に行き、レンはここで待機、という作戦に決まった。

俺は小一時間ほど、休み、廊下に出た。

「いよいよだな」

「ええ」

俺の手が震えてきた。

あの圧倒的強さを思い出す。

あれほど強いのは宮島先輩だけではなかったのだ。
やっぱり、ここには化け物が多い。

「大丈夫…？」

真理恵が俺の顔を心配そうに覗き込む。

「あ、ああ…でもアイツってメチャクチャ強いからさ…」

「それを考えれば、私のほうがアンタより倒せるかもね」

「そうだな…」

恐れのないであろう真理恵なら臆すこともないだろう。
それに、性格的にかなりの強気だし。羨ましい限りだ。

「じゃあ作戦通りにいくわよ」

「ああ」

俺が先に仕掛けて、佐渡を硬直させ、その硬直した佐渡を真理恵が
鎖で狙い撃ちにする作戦だ。

俺が臆せずに突っ込まなければこの作戦は成功しない。

「失敗は許されないわ」

「ああ」

俺達は深呼吸をする。

そして俺は屋上の扉に手を掛けた。

「じゃ、行ってくる!!」

俺は勢いよく扉を開け、監視塔まで突っ走った。

そこに佐渡がいるはずだ。

「佐渡!!」

「来たか…クックク…」

佐渡は監視塔の上で俺を見下ろしていた。

「さて、存分に楽しませてもらう!!」

佐渡は超スピードで俺のところまでダイブをした。

「?!」

何て奴だ。恐怖を欠片も感じていない。

俺はその思い初撃を何とか受けることに成功する。

レンの木刀は俺の木刀より短いので、力が入りやすい。

「ぐうっ!!」

しかし、この硬直がチャンスだ!!

「今だっ!!」

「何い?!」

俺の叫びと同時に上から真理恵が跳んでやって来た。

「覚悟しなさい! 佐渡隼人!!」

彼女は十本全ての鎖を佐渡に放った。

「くっ!!」

佐渡の顔が歪む。

俺達の好機が到来した。

<次回へ>

第14話 打倒佐渡隼人！奇跡のタッグ結成！（後書き）

次回「佐渡強し！暴走への円舞曲！」

佐渡隼人との戦いは長くなりますね。

第15話 佐渡強し! 暴走への円舞曲! (前書き)

完全バトルモード!

熱い展開は好きです。

第15話 佐渡強し！暴走への円舞曲！

俺が佐渡を惹きつけている間に真理恵は動いた。

「今だっ！！」

「何い？！」

俺の叫びと同時に上から真理恵が跳んでやって来た。

「覚悟しなさい！佐渡隼人！！」

彼女は十本全ての鎖を佐渡に放った。

「くっ！！」

佐渡の顔が歪む。

俺達の好機が今、到来した。

「はぁっ！！」

鎖の来る瞬間、俺は急いでバック転で退避した。

ズドン！！

凄まじい音が屋上に鳴り響いた。

あんなのに直撃したら、普通は死ぬと思うのだが。

まあ死なない程度に手加減はしたはずだ、うん。きっとそうだよ。

「どうだ？」

俺は隣に降りてきた真理恵に訊いた。

「…手応えはあったはずよ…」

俺と二人で煙を見つめる彼女。

まさか鎖でこんなに煙が出るなんてな…

「まさか火薬でも括り付けたのか？」

「そんなところね」

…おっかない女というのは健在のようだ。

いや、健在であって欲しくはないんだけど。
そんなとき、煙が歪んだ。

「…まさか…」

「だってアイツ…ほぼ直撃だぞ？」

「…よね。そうよね」

俺達は不安そうに煙を見る。

「ぐあー。や・ら・れ・たー」

「「?!」」

そのとき、煙からそんな言葉が聞こえた。

「とでも言えば良かったかな？」

「何で?!」

「無事だど?!」

佐渡は周りの煙を吹き飛ばして平然とその姿を現した。

「クックック…いい作戦だったよ。正直危なかった」

「な…!!」

アイツにはまだ笑える余裕があるかどうか?!

「この防火、防水、防虫のコートを着てて正解だったよ」

そういえばあいつは今日、高そうなコートを着ていた…
だが…

「鎖はどうした!爆発は防げても、鎖は防げるわけが…」

「クックック…このコートが防いでくれたに決まっているだろう?」

「?!」

あのコートには鉄でも何か仕込んでいるのだろうか…

「さて、これで終わりかな?与那国司君。存外につまらない勝負だったよ」

「終わりではない！」

「ん？」

上方から別の声が聞こえてきた。

「何だ？」

その男は屋上の策のてっぺんにいた。

「貴様は…えとろふこうせい択捉光世！！」

佐渡がその柵の上にいる男にそう叫んだ。

「わが親友、大樹の仇、今討たせてもらう！」

そう言って光世という人は投げナイフで総攻撃を開始した。

「ちっ…面倒な奴だ…」

佐渡はそれを一応全て捌いた。

「初めまして。与那国司君」

「あなたは…」

佐渡がそれに気をとられている間に、光世さんは俺に話しかけた。

「話は後回しにしよう。今はアイツを倒すのが先決だよ」

「…信用が出来ないわ」

真理恵は光世さんを疑っているようだ。

まあ確かにいきなり現れて、仲間面されても困るというものだ。

「そうだよね。戦いで証明…といたいけれど…」

彼はそう言って二対の刀を取り出した。

いわゆる二刀流と言う奴だ。

「僕のバッジを預けよう」

彼は自分のバッジを一つ俺に渡した。

エントリーナンバーは13番らしい。

「あの、この23番は…?」

彼の胸に着けてあるもう一種類のバッジを指差すと、彼は少し俯いた。

「これは…親友の大樹のバッジさ…形見だよ」

「あ…」

そういえば最初にそんなことを言っていたような…

「お話は終わりか?」

「?!」

佐渡は楽しそうに俺達を眺めていた。そうだ、夜が明けたら俺達の負けだ。あいつは何もしなくてもいいんだ。

「ああ。第2ラウンド、いこうぜ！」

俺と真理恵と光世さんは構えた。

続いて佐渡が大きい鎌を構えた。

長さ的には優に2メートルを超える。

「さて、誰からかかってくるんだ？ 同時か？」

「はああ！！！」

「とう！！！」

俺と光世さんが最初に走った。続いて、真理恵が鎖を放つ。3人同時攻撃だ。一人ずつでは勝てないだろうという判断だ。

「面白い。さあ！」

俺と光世さんの攻撃をことごとく防ぐ佐渡。

さらに後から来る鎖も防ぐ佐渡。

こいつは人間か？ かなり強いぞ。

「甘い！！！」

「うぐっ！」

光世さんが鎌の柄で飛ばされる。

「光世さん！」

「よそ見している暇があるのか？」

「しまった！」

俺も柄の部分で突き飛ばされる。

「最後はお嬢さんといきますか！」

「はあっ！」

真理恵は鎖を放つが、簡単にかわされ、さらにコートによって、当たっても全くダメージがないという状態だった。

「そんな…！」

「悪いけど女性にも手加減しないんでね！」

「ううぐう…！」

真理恵は腹を柄で突かれ、飛ばされた。

「真理恵…！」

俺は再び立ち上がり、佐渡の方へ駆けて行った。
俺の後ろからナイフが飛んでくるのが分かる。
俺の援護なのだろう。

「ふん！姑息な」

佐渡は飛んできたナイフを次々に弾いていく。
チャンスだ。俺は神速の構えをする。

「…」

俺はナイフに気を取られている佐渡を見る。

さらに、背後からの鎖の攻撃のおかげで俺には気がついていない。
そして俺は耐性を低くする。

与那国流第一奥義…

「神速！」

「何?!」

瞬時に佐渡は俺の方を見る。
だがしかし…遅い！

カキーン!!

鉄のようなものとぶつかった音がした。
しかし、後ろから回し蹴りが飛んでこない。

「どうだ…!!」

「…このコートを使用不可にするとは…」

「?!」

どうやら俺の攻撃は佐渡のコートを無効化させるだけに留まった。
俺の神速をまともに受けた部分からコート全体にヒビが入っている
みたいだ。

「少し油断したな」

佐渡はコートを脱ぎ捨てた。

ガチャーン

「なんだよこの音…」

コートが屋上の地面に落ちたとき、ものすごい音と揺れを感じた。

「このコートは非常に重くてね…スピードが上手く出ないんだよ」

「ま…まさか…」

「そのまさか！」

佐渡は神速レベルのスピードで俺に近づいて俺を襲う。

「危ない司くん!!」

「え?」

そのとき、右から光世さんが俺を押した。
世界がスローモーションになったみたい ゆっくり回るといふのは
このことか。

俺はゆっくりと左に倒れていく。

そして佐渡の攻撃は左にずれた俺には当たらず、光世さんを襲った。

「うあああああ！」

「光世さん！」

光世さんは佐渡の攻撃をまともにボディに食らい、20メートルくらい吹っ飛び、後ろの壁にぶつかった。
そして彼はガクツと頭を下げた。

「くっ…」

「一発でダウンか…予想外に俺の攻撃が強かったようだな…」

「くそっ…」

光世さんは俺を庇ってやられてしまった。
俺が不甲斐ないばかりに…

「司！気を強く持ちなさい！」

「はっ！」

そんなとき、真理恵から激励が飛んだ。
そうだ。こんなところで俺は負けてたまるか！！

「ほう。まだ諦めていないようだな。さ、楽しませろ！」

佐渡は再び俺の方へ超スピードで向かってくる。

「見えた！」

俺は攻撃を受けたかに見えた。

「いない?!」

「司! 後ろ！」

「何?!」

「暴走への円舞曲^{ワルツ}」

俺が振り向いた途端に鎌の先が俺の胸に直撃した。

「ぐうっ!!」

幸い、刃は鋭くしていないらしく、血は出ない。

だが、殴られたような鈍い痛みがした。

そんな吹っ飛ばされた俺を真理恵は鎖で、プロレスリングのようにして助けた。

「サンキュ:ゴホッ！」

くっ:どうやら肺にかなりのダメージがきたらしい。
呼吸するのがいつもより格段に苦しい。

「大丈夫?!」

真理恵が再び俺を心配する。

「自慢じゃないが、あまり大丈夫じゃない」

「ちょっと…」

真理恵が心底心配そうな表情をする。

「こうなることは分かっていたさ」

俺は目の前の佐渡を睨む。

俺とアイツに圧倒的な力の差があるのは分かっていた。だが、分かっているにもこの差は恐ろしい。

「真理恵…その鎖で時間を稼げるか…？」

「どうして？」

「あいつを倒せるのは神速しかないんだ」

「…」

真理恵が考える。

「だから…」

「しょうがないわね。でも、きっちり決めるのよ」

「ああ」

俺は強い視線を佐渡に向ける。

「頼む、真理恵」

俺は耐性を低くする。それと同時に真理恵が前に駆け出して走る。真理恵が鎖で佐渡を襲う。

しかし彼は楽々とそれを避ける。

ダメだ：あの鎖で動けなくさせないと：

俺はまた硬直状態だ。折角の神速もヒットしなければ意味がない。

「くっ…（こいつ…メチャクチャ強い…!!）」

佐渡の対応に真理恵も表情が苦しくなってきた。

「鎖使いごときに俺がてこずる筈が無い！」

「バカにして…！」

真理恵は言い返すも、劣勢であることに変わりはない。

何とか鎖の数で持ちこたえているものの、段々と1本、2本と鎖が狩られていく。

このままでは作戦そのものが瓦解だ。

「仕方がない…」

俺は神速を諦め、佐渡に向かって駆け出した。

「ほう。2対1か。上等だ」

佐渡は大鎌一つで俺の木刀と真理恵の鎖をいなす。

「くっ…その武器を好きに使えなくさせてやる！」

真理恵が大鎌に鎖を巻きつけた。

「ふん。これでアンタは武器を…キャッ！」

そのとき、佐渡は鎌を思いっきり引っ張った。

もちろん鎌と鎖で繋がっている真理恵も引っ張られる。

「こういうことはもつと頭を使ってやろうなっ!!」

そして思いっきり鎌を高くあげた。

同時に真理恵も浮いてしまう。

「ハッハッハア!!」

真理恵は佐渡を中心に円軌道を描き、佐渡の後ろの地面に思いっきり叩き付けられた。

「いやああ!!」

ズドン!というものすごい音と同時に真理恵の悲鳴が屋上で木霊した。

「真理恵!!」

彼女はそのまま動けなくなってしまった。

「くっ…この野郎!!」

鎌はまだ鎖に繋がっており、身動きが出来ないはず。
俺はこの隙を狙って神速を放つ。

「甘いな」

「な…?!」

佐渡は鎌に巻かれていた鎖を一瞬で破壊し、俺の攻撃に備えた。

「くっ…」

俺は神速を放つも、佐渡に一蹴された。

「畜生…」

何が奥義だ…

全然効きやしねえ…

こいつ、メチャクチャ強くないか？

「司…くん…」

光世さんが息絶え絶えに俺の名前を呼ぶ。

しかし、俺の耳には届かない。

「暴走への円舞曲^{ワルツ}を奏でてやろう」

「くっ…」

神速並みのスピードで佐渡に近づかれた俺は、何も出来ずに佐渡の攻撃を食らった。

「うああああ!!」

俺はかなりの距離を飛ばされ、屋上の柵に背中をぶつけた。

「あぐっ…」

俺は血を吐いた。

こんなこと、父とのスパルタ練習のとき以来だ。
肺に思いつきり当たったらしく、呼吸がしにくい。

「痛い…」

俺はその場に仰向けに倒れる。

まんまるい月はもうすぐ沈みそうだ。
つまり、夜が明ける。

「くう…」

俺は立ち上がろうとしても力が入らない。

佐渡がつまらなそうに倒れている俺を見る。
そして満月も俺を見ていた。

ドクン…

「?!」

な、なんだ…?

俺に流れている血が沸騰するように熱い。
この感覚はどこかで…

ドクン：

間違いない！真理恵との2度目の戦いのときの感覚だ。
自分の中に語りかけ、勝ちたいと願ったときの感覚だ。
でも今は何で…？

俺は自分に語りかけていない。

ドクン：

「うっ…」

俺は胸を押さえる。

心臓が無理矢理俺の体全体に血液を送っているみたいだ：

「さて、起き上がらないならもう俺は去るよ。バッジは貰うけどね」

佐渡が俺に近づいてくる。

俺は未だに立ち上がれない。

「さて、バッジは全てもらうよ。勉強代にしては安いぐらいだよ」

佐渡が俺の胸のバッジに手を伸ばした。

だが、俺はその手を掴んだ。

「何だ？」

「邪魔だ」

そしてそのまま俺は佐渡を思いっきり投げ飛ばした。

倒れたままで。

「何?!」

佐渡は思いつきり尻餅をついた。

「まだバトルは終わっちゃいねーぜ」

俺は立ち上がり、佐渡を見下ろす。

俺の中の何かが弾けた瞬間だった…

<次回へ>

第15話 佐渡強し！暴走への円舞曲！（後書き）

次回「終わった演奏！終わらない希望！」

私たちは佐渡を倒すことが出来るのであろうか…

第16話 終わった演奏！終わらない希望！（前書き）

疲れがピークに達す。

睡眠時間が2時間を切ることに…

あと少しの踏ん張り…力を…力を…

第16話 終わった演奏！終わらない希望！

佐渡によって俺は仰向けに倒れていた。
それを沈みかけた満月が照らす。

ドクン：

「?!」

な、なんだ…？

俺に流れている血が沸騰するように熱い。
この感覚はどこかで：

ドクン：

間違いない！真理恵との2度目の戦いのときの感覚だ。
自分の中に語りかけ、勝ちたいと願ったときの感覚だ。
でも今は何で…？

俺は自分に語りかけていない。

ドクン：

「うっ…」

俺は胸を押さえる。

心臓が無理矢理俺の体全体に血液を送っているみたいだ：

「さて、起き上がらないならもう俺は去るよ。バッジは貰うけどね」

佐渡が俺に近づいてくる。
俺は未だに立ち上がれない。

「さて、バッジは全てもらうよ。勉強代にしては安いぐらいだよ」

佐渡が俺の胸のバッジに手を伸ばした。
だが、俺は伸ばしたその手を掴んだ。

「何だ？」

「邪魔だ」

そしてそのまま俺は佐渡を思いっきり投げ飛ばした。
倒れたままで。

「何?!」

佐渡は思いっきり尻餅をついた。

「まだバトルは終わっちゃいねーぜ」

俺は立ち上がり、佐渡を見下ろす。
何故だか知らないが力が湧いてきている。

「ほほう。その気骨だけは認めてやるとしよう」

佐渡は俺を見てフンと笑った。
まだ余裕があるようだ。

「?! (あの血の匂い…あの時と同じ…)」

ぐったりとしていた真理恵はボロボロの体を起こし、司を見て目を見開いた。

「（何？…このケダモノのような血の臭いは…）」

「お前が余裕をもてるのはさっきまでだぞ？」

「クッククク…たかが一回攻撃をヒットさせただけで…」

佐渡は俺を見て笑う。

完全に俺を舐めている。

だが、今の俺は何故か、あいつに負ける気はしない。

「そうかな？」

俺は態勢を低くする。

「クッククク…またそれとは…芸のない奴だ」

与那国流第一奥義…

「神速！」

「ふん！」

俺は神速を佐渡の足を狙って放った。

「効かぬ！」

佐渡はきつちりと俺の攻撃をガード。
相変わらず反射神経も早く、中々攻撃を当てさせない。

「ふん。攻撃後の隙が…」

「与那国流第二奥義！」

「?!」

俺がそう叫ぶと、一瞬驚きで佐渡が硬直する。

「旋風!!」

俺はその叫びとともに、神速で着地に使った前足の左足を軸に高速回転斬りを放つ。

「何?!」

佐渡は俺の攻撃を読みきれず、旋風をまともに食らった。

「ぐあああ!!」

しかし、着地の衝撃と回転の軸足にした俺の左足にも結構なダメージだ。

ちなみに、旋風は多分完璧ではない。

所詮は父の見よう見まねでやっただけ。

それがたまたま上手くいっただけのこと。

次はないだろう。

「ぐうつ…この俺が…貴様のようなゴミに…」

腹部を思いっきり叩かれた佐渡は口から血を吐いていた。
どうやらそれ相応のダメージを与えられたらしい。

「（あいつ…あんなに強いのか?!）」

真理恵も俺の予想以上の強さを目の当たりにして驚いている。
まあ自分でも驚いているのだが。

「許さん…! 貴様はもう地獄に送ってやる…!」

佐渡は怒りを露にし、俺に猛スピードで突っ込む。

「地獄への狂想曲^{カプリッツィオ}を奏でてやる…!」

「?!」

佐渡は前よりも素早く俺に近づいてくる。
確かこの技は初撃を受けると大変なことに…

「死ね…!」

佐渡は鎌を振り下ろす。

俺はそれをサイドステップで避ける。

「掛かった!」

佐渡は振り下ろした鎌を途中で止め、横になぎ払う。

「しまった!」

俺はその攻撃を「受け」てしまった。

「クックック：受けたな」

柄が歪曲し、俺の右足を攻撃する。

「ぐっ！」

そしてその隙に刃も歪曲して木刀を切断しようとする。

「やらせるかっ！」

与那国流第2奥義：旋風！！

「何?!」

俺は高速回転して佐渡から距離を取った。

「ちっ：緊急脱出にもその技は使えるのか…」

佐渡は苦々しげに呟く。

俺もこれは大発見だ。マグレが当たっただけ。

それにしても相変わらず恐ろしい技だ。地獄への狂想曲は。カブリッツィオ

「暴走への円舞曲ワルツを奏でてやる！」

佐渡は俺に高速突進してきた。

俺はそれを左に避けて回避する。

「つと…」

俺はすぐに後ろを振り向く。前はこれでやられた。

「いない?!」

しかし、後ろには誰もいなかった。

「甘いな!」

声は上から聞こえた。

「しまった!」

俺は急いで上を向く。

「地獄への狂想曲カプリッツィオを奏でてやる」

「しまっ…!」

俺は受けることが出来ず、そのまま相手の鎌が俺の右肩を直撃した。グサツと刺さった音がした。

「あぐっ…!!」

俺の右肩から血が滲む。

いくら刃が鋭くないとはいえ、尖っているものが刺されば痛いものだ。

「くそっ…」

血が肩からボタボタ垂れる。

右肩に上手く力が入らない。しかし、俺の頭はまだ妙に冴えていた。

「ほう…音を上げないとはなかなかだ。しかしその出血では勝ち目もないだろう？」

「はっ。言ってる」

俺は気だけは負けたくなかった。

こんな奴に気で負けてたまるか。

俺の目にはまだ闘志が宿っている。

さっきよりも熱く炎が燃え上がっている。

だが、どうすればいい？

「すう…はあ…」

俺は一旦深呼吸して気持ちを落ち着かせた。

もう少し冷静になろう。

暴走への円舞曲は高速突進からの連続攻撃。

地獄への狂想曲は初撃を受けさせ、歪曲による2段攻撃。

この二つを組み合わせてくると非常に厄介だ。

ならば、どうすればいい？

「さて、次こそ仕留めてやろう」

佐渡は大鎌をクルクル振り回して俺に向かって構えた。

「くっ…」

「暴走への円舞曲と地獄への狂想曲のハーモニーを奏でてやろう」
ワルツ カプリッツィオ

どうやら初めから二つを組み合わせてくる気だ。

俺は身構える。最初に来るのは暴走への円舞曲だろう…

「はぁ!!」

佐渡は俺に向かって高速突進をした。

俺はそれを左へ軽々と避ける。

止まっていけない。常に走り続ける。

俺は相手の気配を感じながらひたすらランとステップを繰り返した。

「ちっ! ちょこまかと!」

佐渡も俺の回避行動にイライラしていた。

だが、俺が勝つにはまず攻撃を避け続けるしかない。

「小賢しい奴だ!」

佐渡はスピードを段々と上げてくる。

俺は先ほどの神速と旋風の連続攻撃のこともあり、左足に限界が来
ていた。

「くっ…保ってくれよ…」

「うっとうしい!」

俺は何を言われても、左足が悲鳴を上げても攻撃を避け続ける。
まだだ。まだ機ではない。

俺は佐渡の足の疲労を待っているのだ。

しかし、奴は意外と鈍くならない。

「くそっ…」

そんなこんなで俺はどうとう佐渡に追いつかれてしまった。

「ふん！ザコが！」

佐渡は俺に地獄への狂想曲を見舞おうとする。

それと俺が佐渡の足を見たのは同時だった。

佐渡の足は…少し震えていた。

「今だ！」

俺は佐渡の軸足に向けて足払いを払った。

「何?!」

佐渡はバランスを崩して倒れ掛かる。

「そこだ！」

俺はそんな佐渡の鳩尾に突きを放った。

「ぐううおおお!!」

クリーンヒットしなかったものの、佐渡はかなりの距離を飛ばされた。俺に。

上手くいけば一発でノックアウトだろうが、その自信は無い。

「はあはあ…」

俺はフラフラであった。

もう正直あんまり動けない。

あいつの足に限界が来てるのと同じく、俺の足にももう限界が来ていたのだ。

「いてえ…」

俺はゆっくりと真理恵と光世さんを起き上がらせた。

「やったの？」

「…これでやられてなければ、勝てる自信は無いな…」

真理恵の質問に弱気に答える俺。

いくら佐渡は倒れているとはいえ、震えた手で胸を押さえているので、意識はまだある。

「早く止めを刺すべきだ」

光世さんが俺にそう話す。

彼の眼鏡はすでに、用途を失っていた。

「そうだ…な…」

俺はゆっくりと立ち上がった。

「大丈夫？」

真理恵は俺の右肩を見る。

ひどい流血だ。これは重傷に近いかもしれない。

「ぐ…お…」

「「?!」」

そんなとき、佐渡が苦しそうに起き上がった。

俺達3人はそれを絶望的なまなざしで見つめる。

「何で…?!」

「貴様ら…絶対に許さん!!!!!!!!!!!!!!」

佐渡はすごい形相と気迫で俺達を睨みつけた。

それだけで体が吹っ飛ばされそうな威力が秘められていた。

「この俺が気絶しかけたんだ…!! これほどの屈辱は無い!!」

「くっ…何よこいつ…ゾンビ?!」

「笑えない冗談だ」

真理恵の切羽詰った声での冗談に笑っていられる場合ではない。

俺も真理恵も光世さんもみんなボロボロである。

「おしゃべりしている場合では無いようですね…」

光世さんは真剣な顔で二対の剣を構える。

俺も真理恵も続いて戦闘態勢に入る。

「貴様ら全員に絶望への鎮魂歌^{レクイエム}を奏でてやる！」

佐渡は俺達3人に高速突進をした。

狙いは：俺か？！

真理恵と光世さんはサッと横に避けるが、俺が逃げられない位置にいた。

「しまっ…」

「死にたまえ！」

鎌の連撃が俺を襲う。

あまりにも早い攻撃に、俺は受けるのがやっとだ。

「く…」

「私達も支援しないと！」

真理恵と光世さんが後ろから佐渡を攻撃する。

「カス共が！」

しかし、佐渡は体を高速回転させ、俺達3人を吹き飛ばした。

「うがあっ！」

俺たちはそれぞれ違う方向に吹っ飛び、俺も背中から監視塔にぶつかった。

それと同時に大量の血が口から吹き出る。

こんなに血を吐いたことなんて生涯で一度もないだろう。

「く…」

そして佐渡が俺に近づく。

「貴様をただ倒すのは生ぬるい！地獄を味あわせてからにしてやる」

佐渡は俺の髪の毛を掴んだ。

「放…せ…！！」

俺はもがくが、佐渡は口元をゆがめるだけだった。

「痛いかな？苦しいかな？」

そう言いながら俺のボディに蹴りを入れ続ける佐渡。

俺は叫びながら耐えるしかない。

「ふん。カスのくせにうるさい奴だ」

俺は鋭い痛みに耐えていた。

だがもう…限界だ。

「情けない奴」

「司に手を出すなああ！！」

そんなとき、怒りの表情の真理恵が佐渡に襲い掛かる。

「黙れゴミ！」

佐渡は真理恵の放つ鎖を全て防ぎ、反撃をする。

「何でこいつ…こんなに…」

佐渡は真理恵の腹に膝蹴りを思いっきり入れた。

「ぐっ…！強いよ…」

真理恵はそのまま遠くに飛ばされてしまった。

「く…」

俺はゆっくりと立ち上がる。

こんなところで…負けてられるか…！

「まだ立ち上がるか」

俺の心はまだ折れてはいなかった。

月が沈みかけ、日が昇りそうになる。

それと同時に俺の体にも前ほど力が入らなくなる。

「掛かったな！佐渡隼人！」

そのとき、光世さんが佐渡に向かってナイフを何本か投げた。
そして自分も突撃する。

「何に掛かったんだ？」

だが、佐渡はそのナイフを次々と落としていく。
そして光世さんも突き飛ばされてしまう。

「くっ…」

しかし、突然佐渡が動かなくなる。
それと同時に飛ばされた光世さんが俺にニヤリと笑った。

「しまった！」

佐渡の大きな鎌はその大きさをゆえ、屋上の柵に引っ掛かってしまった。

光世さんはそれを狙っていたらしい。
だが、鎌から手を放せば問題は無い。

「させるかっ！！」

しかし、遠くから真理恵の声が聞こえ、それと同時に異様に長い鎖が佐渡を巻いた。

「何だ?! この長い鎖は！」

その鎖は佐渡をグルグル巻きに出来るくらいに長かったのだ。
一体何故…?

「まさか…残ってる鎖全てを繋げ合わせたというのか?!」

そうか!

真理恵は残された鎖を繋ぎ合わせて鎖を異常に長くしたのか!
おかげで佐渡は武器も使えず、体も動けなくなっている。

「ぐおおお…この程度の鎖…!!」

佐渡は必死になって鎖を壊そうとする。
しかし、中々壊れない。

「何してるの司!!」

「はっ!!」

何で俺は呑気に見ているんだ。
今が最大のチャンスじゃないか。

「き、貴様ら…!!」

俺はフラフラと木刀を構える。
神速を放てるのはこれが最後だろう。

「ま、まさか…?!」

佐渡が俺を見て目を見開く。
どうやら恐怖を感じたらしい。

「与那国流第一奥義…」

「や、やめろ…やめろ…」

佐渡は俺を見ながらそんな風に呟く。

「神速!!」

俺は持てる力全てを佐渡に叩き込んだ。

「がああ!!」

佐渡は口から思いっきり血を吐き、倒れこむ。
それと同時に俺も足が限界に来て尻餅をつく。
もう今日は動きたくない。

「…気絶しているみたいだ」

こっちにやって来た光世さんが俺に言う。

「そうみたいね」

続いて真理恵もやって来る。

「俺達の…勝利だ…!!」

それと同時に太陽は東から昇って俺達を照らし出した。
俺達は…勝ったんだ。

第16話 終わった演奏！終わらない希望！（後書き）

今回は「突然の敗退！戦いは続く…」

これで第1部は終了です。

あともう一踏ん張りなのです。

第17話 突然の敗退！戦いは続く…（前書き）

第1部みたいなの終了です。

とりあえず次回の更新はまだ待ってください。

第17話 突然の敗退！戦いは続く…

尻餅をつく俺の傍らには気絶して倒れている男の体があった。先ほどこまで俺達と戦い、苦戦させた男が倒れている。

俺たちはこの佐渡という男を激戦の末に倒すことに成功した。

「俺たち…勝ったんだな…」

「ええ」

真理恵が俺の傍らでそう返事をした。

「とりあえず、皆さんでバッジを貰いましょう」

光世さんは一人、倒れている佐渡に近づき、バッジを一枚手に取った。

「ほら、貴方達も」

「ああ」

俺は真理恵に起こされ、佐渡の胸からバッジを一枚とる。

そして最後の3枚目を真理恵が取った。

バッジには2番と彫られてあった。

「何とか1週間ルールもクリアかな？」

もう夜は明け、朝日が見えていた。とてつもなく長い夜だった。

それにしても…

「俺、一睡もしてないや…」

俺は欠伸をした。

「無防備ね。今狙われたらどうするの？」

「大丈夫です。周りに敵の気配は感じられません」

光世さんが真理恵の質問に答えた。

「さて、僕はそろそろ行かないとね…」

「どこへ？」

真理恵が訝しげに光世さんを見つめる。

まだ怪しんでいるのかよ。

「病院。親友の大樹に今日のことを報告しに」

「ああ…」

そういえば、佐渡が親友の仇って言ってたな、光世さんは。

「そ。じゃあ私達も行くわよ」

「ああ。それじゃ」

俺は光世さんにそう挨拶した。

すると彼も手を上げて微笑んだ。

「ふ。次会うときは敵同士でないことを祈るよ」

彼は一人屋上から去っていった。

「ほら、行くわよ」

真理恵は俺に肩を貸して歩き始めた。

「いいって。お前も疲れてるだろ？」

「もう取れたわ。そういう体質なの」

「どんな体質だよ…」

彼女の言うとおり、真理恵はあまり疲労を感じていないようだった。本当にどれだけ特殊なんだ？

まあおれも人のことは言えないか…肩の切り口ももう塞がってるし。

「…」

俺たちは無言になって歩き出す。

そこで俺はふと思いつく。俺たちの休戦協定について。

確か佐渡を倒すまでという期限付きだった気がする。

だが…言わない方が良いか？

彼女とはこれから共闘関係を保っていききたい。レンの反応が怖いけど。

そんなときに俺は彼女の方をふと見るが、特に気にした様子も無い。

「レンの奴は平気かな…?」

「どうでしょうね」

真理恵の声は冷たい。

彼女にレンの話題を振ったのは失敗だった。

「…なあ」

「ん?」

俺はレンのいる教室が近づくにつれて、嫌な予感がした。

「嫌な気配がする」

「?」

しかし、真理恵は特に気にならないらしい。
だがこれは…

「…!!!!」

そんなとき、レンが教室の中から吹っ飛ばされて廊下に出る瞬間を
確認した。

とてつもなくすごい音がした。多分教室のドアも吹っ飛んだ。

「レン!!」

俺は真理恵の肩から離れ、レンの元に走り出した。

真理恵もさすがに顔が強張り、焦っている。

「若…様…」

レンはゆっくりと立ち上がった。
どうやら大怪我はしていないらしい。

「よくぞご無事で…」

「そんなことはいい！何があった？！」

「教室に敵が…！」

俺は教室の中をハッと見て見た。

「誰だ！」

そこに黒い影が見えた気がする。
しかし、影はこっちのことを気にもせず、教室窓から外に出ていった。

「待て…！」

俺とレンと真理恵は一緒に窓の外を見る。
しかしそこには誰もいなかった。

「くそっ…！！！」

そんなとき、倒れている寧々を見た。

「バッジが…無い?!」

「寧々さん!!」

レンがハッとなって寧々を見た。

「まさかさっきの奴に盗られて…いえ、そうでしょうね」

真理恵が淡々と呟いた。

「誰が彼女を守る、ですって？」

真理恵がレンに非難の視線を送る。

レンは何も言い返さず、ただ俯いて「すみません」と言っただけだった。

「ま、まあ落ち着こうぜ」

俺は二人…いや、自分を含めて三人に言った。

いや、一番落ち着いていないのは俺だ。

早く寧々の最後のバッジを盗った奴を捜し出したい。

さっさとこんな場所を飛び出して行きたい。

俺は内に激情を秘めていることを知った。

「こうなったのも全て私の責任。今からそいつを捜し出して…」

「もっと落ち着いてくれ!!」

俺はレンに怒鳴った。

何やってるんだ俺は。

一番落ち着いていないのは自分じゃないか。

手は怒りで震え、足も今すぐ飛び出したいのを必死に抑えている。

「アンタが一番危ないわよ」

真理恵は俺に近づいて額に手を当てた。

「何のつもりだ？」

「別に。頭に血が上りすぎ」

「…！」

俺は深呼吸をする。

何故なんだ？何でこんなに自分の気が抑えられないんだ？

何でこんなに体中が灼けるように熱いんだ？！

「もうすぐ生徒達が来るわ。急いで学校から出ましょう？」

真理恵の提案に渋々俺は頷いた。

レンも渋々俺に従い、道場に帰ることにしたらしい。

陽は昇ったが、俺の心は沈んでしまった。

道場に俺とレン、真理恵、そして気絶中の寧々が帰ってきた。
周りの目を掻い潜って帰るのは大変であったが。

「とりあえず、寧々は客室に寝かす」

「分かりました」

レンは彼女を負ぶって客室に向かった。
自分より大きい人を背負う光景…シニールだ。

「で、私は家に帰るけど…アンタは今日学校はどうするの？」

「さすがに俺は無理だな…寧々を一人にできないし」

「そう」

彼女はそう言って立ち上がった。

「じゃあね。次会うときは敵同士かしらね」

「や、やっぱり…?」

「そういう約束でしょ」

どうやら俺たちの休戦協定は今日を以って解除されたらしい。
やっぱり約束を違えることは出来ないか…

「でもお前とはもう戦いたくないな…」

「じゃあ会わないように気をつけることね」

「う…」

彼女はゆっくりと俺の部屋を出て行く。

「あ」

俺は立ち上がって後を追おうとする。

「見送りはいらないわ。未練がましくなる」

「そ、そうか…」

俺はその場に再び腰をおろす。

真理恵はそんな俺を一瞥した後、さっさと家を出て行った。
何というか…俺の方が女々しいな。

「若様」

「うおっ!!」

そんなとき、レンが突然部屋に入ってきた。
だからノックぐらいしてくれよ。

「寧々さんを運びました。それで…」

「えーとさ。それは後でいい? 俺は眠くてしょうがない」

「分かりました。私は学校に行くので、若様は存分に休んでください」

「え? お前は大丈夫なのか?」

レンは随分と平気そうだ。

「鍛えてますから」

何をだよ! というツツコミはしないでおこうと思った。

「ではおやすみなさいませ」

「ああ」

俺は布団に潜り込んだ。

：風呂入るか。

俺はノソノソと布団から出て風呂場に向かった。

風呂場から出て、今度こそ寝ようと思ったが、先に寧々の様子を見に行くことにした。

やっぱり心配だな。幼馴染なだけあって。

俺は客間のふすまを開ける。

寧々はまだ眠っていた。

「…心配しすぎだな、俺は」

俺は客間を出ようとする。

「ん…」

「?!」

そんなとき、寧々の口から声が漏れ、俺は急いで振り返る。

「起きた…のか…?」

「ん…」

寧々は少しだけ目を開けた。

「寧々…」

「つかさ…?」

寧々は少し眠そうな目で俺を見る。

「私…ここは…?」

「ここは俺の家の客間。お前は気絶…というか寝てたからここまで運んだんだ」

「そう…ああ!」

寧々は急に布団を剥いで立ち上がった。

「な、なんだよ…」

「私…学校で…」

「とりあえず、訊きたいことがあるから訊いて良いか？」

「あ、うん」

寧々は疲れのためか、いつもの元気がない。
だがおかげでスムーズに話が出来そうだ。

「お前ってどうしてSFなんかに出てたんだ？ 特権が欲しかったのか？ それとも…」

「それは…」

寧々が顔を伏せる。

訊いちゃいけないことだったのか？ まあいい。

「まあ答えにくい質問なら答えなくてもいい。で、お前は今現状把握できてるか？」

「あ！私のバッジは…」

「お前のバッジ…確か8番だったよな？ 最後に誰かに…！！」

俺は再び拳を握り締めた。

あのとき沸いた怒りがまたこみ上げてきた。

無抵抗の奴のバッジを盗るなんて…！！
ルールに沿っているとはいえ、ひどい話だ。

「私…敗退したんだね…」

「…ああ」

「そう…」

寧々は一瞬残念そうな顔をしたが、すぐに俺に笑顔を向ける。

「でも司はまだ、生き残ってるんだよね？」

「一応…な」

あと少しで俺も敗退になりそうだった。

「頑張ってね。私…少しでも司の役に立ちたかったから…」

「それは…」

俺たちの触れちゃいけない過去の話。

幼い頃の事故の影響で、俺の記憶はあやふやなものの、寧々はしっかりと覚えていた過去。

過去に興味の無い俺にとっては、無意味な話。

「寧々。俺、勝つよ。別に特権が欲しいとか、一番強いって証明したいとかじゃなくて、ただ、勝ちたい。お前のように傷つく奴が多く出るようなこの戦いは早く終わらせるべきだ。だから、勝つ」

俺は寧々の目を見て話した。

右手の握り強くなっている。

「…そう。んゝゝゝゝ！…まだ体中が痛いからもうちょっと寝るね」

「ああ」

寧々が布団の中にもぐりこんだのを確認して、俺は客間を出た。
右手はまだ、握られたままだった。

寧々がしばらく寝る間に、俺も睡眠を取った。
いつもより疲れているせいか、早く寝られた。
そして俺はレンの声に起こされるのであった。

「若様」

「んー…」

俺は大きく伸びをして布団から出た。

「ただいま帰りました」

「おお。お帰りレン。給食の揚げパンは？」

「ウチの学校は給食は無いと思うのですが…」

「いや…何でもない」

レンって冗談が通じなさすぎだろ…

俺は少しだけため息を吐き、レンに向き直る。

「学校、どうだった？」

「いつも通りでしたよ」

「いつも通り…って？」

「特に何も変わったことはなかったです」

「屋上に行ったか？」

「はい」

「どうだった？」

「何もおかしなところはありませんでした」

…おかしいな。

屋上は俺たちが激戦を繰り広げたところだ。
なのにおかしなところはない…？

「若様の言いたいことは分かります。しかし…」

「分かった。ありがとう。それで、特に変わったことは…」

「あ、はい。佐渡隼人の敗退はかなりの噂になっていました。しかし本人が…」

「学校に来ていないんだな？」

「はい」

まあやられたばかりだ。

さすがに一日二日で来るわけがないな。

「結構目立っていたんだな。その佐渡は」

「そうのようですね。上級生の間では結構知られていたようです。
顔も良いらしいので」

レンの声は少し刺々しかった。

佐渡に対して好印象を持っていないんだな、レンは。あ、俺もですけど。

しかし、トモ姉の話すことに佐渡は一回も出てこなかったぞ。
ああいう人間にはあまり興味を抱かないのかな？

「分かった。それと、一応おさらいしておこう」

すると、レンが俺を見て目を見開く。

何かに驚いているようだ。

「どうした？」

「いえ、随分と熱心なので…」

「お前と寧々を痛めつけたことに腹を立てているんだよ」

このおかげと言っては難だが、SFに完全に身が入った。
今までとは気合いそのものが違う。

「じゃあ書くぜ」

- 2 佐渡隼人（大鎌） 敗退
- 3 宮島先輩（薙刀）
- 6 巖島真理恵（鎖）
- 8 奄美寧々（木刀） 敗退
- 13 沢村光世（ナイフ、双剣）
- 16 謎のくの一（武器不明）
- 17 司（木刀）
- 20 レン（木刀）
- 23 国後大樹（？） 敗退したらしい
- 25 齒舞武（武器不明）

「結構情報が集まったな」

「そうですね」

俺は10人のことを思い出してみる。

「さて、どうしますか？」

「そうだな…とりあえず今日は…特訓だな」

俺は眠気も取れたので、レンと一緒に道場に向かった。
そう、俺たちの戦いはこれからだ。
…打ち切りじゃないぞ。

―某所―

薄暗い部屋で3人の男達が会話している。

「SFの中心にいた男、佐渡隼人が早くも敗退、か」

抑揚の無い声で眼鏡をかけた男がそう答えた。

特徴として十字架を下げていることを挙げよう。（以降十字）

「奴は相手を侮る傾向にある。そこが奴の敗因だ」

身長が高く、モデル体型の男がそんなことを言う。（以降モデ）

「侮れないねえ…与那国の血って」

最後にニヤニヤしながら、男が格好つけながら言う。（以降チャラ）

「さて、これからのSFはまた、過激になっていくだろう」

モデはそんなことを冷静に口にする。

「佐渡隼人という絶対的な支配者がやられた今、学校は乱世のような状態になっていくのであろうな…」

十字も嫌な笑いをしながら言う。

彼らにとってのSFは娯楽以下でしかないのかもしれない。

「さあて。僕は仕事してくるさ」

「どこに行く？」

「決まっているさ。地上に」

チャラの意味深な笑いが、このSFのこの先を物語っていた。
しかし彼らは知らなかった…自分達が駒にされていることを…

＜佐渡隼人編終＞

第17話 突然の敗退！戦いは続く…（後書き）

次回の第2部はSFがさらにカオスになります。

佐渡の次の新たな支配者：

使役するのは一般生徒ではなく：

裏切りの連鎖！まさかの「あいつ」が裏切り？！
待ちに待った最強とのガチンコ勝負！

とまあこんな感じにしていくつもりです。

ストック切れなので、更新はもうちょっとお待ちを…

第二部へ至る道（前書き）

キャラクター紹介が主です。

第二部へ至る道

キャラクターの量が非常に多い今作品。
なので、軽くおさらいみたいなもの。

ちなみに能力は $S > A > B > C > D > E$ です。

SF参加者

1 不明

2 佐渡隼人^{さし はやと}

初登場は第5・5話。

佐渡財閥の若きリーダーで、3年生である。

ルールの裏返しや人海戦術を駆使し、SFを有利に進めていた。

序盤の黒幕的存在。

自分以外の敵をゴミやカス、虫けら扱いにし、自分の実力に絶対の自信を持つ。

だが、強さは本物であり、大樹、司、レンなどに圧倒的な力を見せ付けた。

頭脳も明晰で、戦いで相手の弱点を的確に見分けられたり出来る。武器は巨大な鎌であり、攻撃力はトップクラス。多少隙のある攻撃が出るのが弱点だが、それを感じさせない腕が彼にはある。

圧倒的な財力で、男子生徒を雇い、1週間ルールの最初の週の最終日に、大量バッジ獲得作戦を実行するも、裏目に出、司達に敗れてしまう。

攻撃力 A 耐久力 A 敏捷 A 頭脳 A 戦闘技術 B 経験 B 反射

神経B

3 宮島麗華 みやじま れいか

初登場、名前だけなら第1話。出てきたのは第6話。
ペロポネソス学園の風紀委員長で、3年生。

身長は170センチで、長い髪を後ろで束ねている。
かなりの薙刀の使い手で、SF優勝候補。

佐渡隼人を倒すことに重点を置き、司とレンを見逃すなど、正義感
は強い。

レンを一撃でノックアウト状態にするなど、実力は計り知れない。
攻撃力S 耐久力? 敏捷? 頭脳? 戦闘技術S 経験? 反射
神経?

4 不明

5 不明

6 巖島真理恵 いづくしままりえ

初登場は第3話。名前は第5話で発覚。
司の隣のクラスの女子生徒。

普段は目立たず、大人しい生徒であるが、戦いになると豹変する。
鎖を武器にしており、一度に複数の鎖を操ることが可能。
結構強気で、好戦的な性格をしている。

身長は161センチくらいで、地味なヘアバンドをしている。ただ、

S Fのときは派手なヘアバンドをしている。

卑怯な人と情けない人は嫌いで、真正面からの勝負を好む。

司とは実力伯仲で、いい勝負を繰り広げる。

意外と優しい性格で、司のことを一目置いている。だが、レンとの相性はすこぶる悪い。

男と一緒にホテルに入ったりするなど、彼女からは考えられない行動もする。詳細は不明。

1週間ルール、最初の週の最終日に、司とタッグを組み、さらに光世も仲間に加わり、3人で佐渡隼人を倒す。

その後、司たちとの休戦協定を解除し、再び彼女は一人で戦いに赴くことになる。

攻撃力C 耐久力C 敏捷C 頭脳B 戦闘技術A 経験C 反射神経B

7 不明

8 奄美寧々あまみ（ねね）

初登場は第1話。

主人公の幼馴染で、与那国道場に通っている。

ただし、練習をサボることが多く、あまり強くはない。

身長は162センチほど。

司の役に立ちたいがために、S Fに参加したものの、実力不足のために上手くいかず、バッジが全然獲得できなかった。

そのためか、佐渡に狙われ、佐渡に痛めつけられ敗北。

その後、気絶中に何者かにバッジを奪われ、S F脱落者となってしまった。

彼女の脱落が司の気を結果的に強くしてしまったのは皮肉である。

攻撃力D 耐久力E 敏捷C 頭脳C 戦闘技術D 経験D 反射
神経D

9 不明

10 不明

11 不明

12 不明

13 沢村光世えとらふこうせい

初登場は第8話。

ペロポネソス学園3年生で、眼鏡と長髪が特徴の男子生徒。
親友である大樹を佐渡に討たれ、打倒佐渡に燃える。

武器はナイフや双剣で、一定していない。つまり、多彩な武器を使
えるということでもある。

冷静で、あまり感情を露にしないのだが、親友が絡むと熱が入る。
洞察力や、頭の回転も速く、彼の行動が起点となり、佐渡を倒すこ
とに成功した。

その後、大樹に敵討ちの報告をしに、病院へと向かった。

攻撃力C 耐久力C 敏捷A 頭脳A 戦闘技術B 経験C 反射
神経A

14 不明

15 不明

16 謎のくの一

初登場は第12話。存在だけなら第11話。

名前や顔、学年もクラスも不明の謎の女子生徒。

司やレンに奇襲をかけた。

武器はあまり分らないが、煙玉は持っている模様。

佐渡とは何も関係がないと思うが：

攻撃力C 耐久力？ 敏捷？ 頭脳A 戦闘技術A 経験？ 反射
神経？

17 与那国司よなぐにつかさ

初登場は第1話。

与那国道場師範代。本人も結構な腕前。

ただ、あまり練習が好きではない、どちらかと言うと天才肌の人間。
ただ、剣道は相当好きで、家が道場であることには満足している。

レンには一度も剣で勝てたことがない。

落ち着いているかと思えば、意外と激情家で、仲間を傷つける奴は
許さない。

身長は175センチ。

狼の血が流れている与那国の家系だが、本人はそれを知らない。

時々凄まじい強さを発揮するのだが、その理由は未だ明かされてい

ない。

SFを最初はゲーム、退屈しのぎみたいに考えていたが、真理恵との戦闘で自分の考えの甘さを悟る。

その後、レンとの特訓により「神速」を会得。自分の必殺にすることに成功。

そして何故か第二奥義の「旋風」を一時的にだが、成功させた。

真理恵、光世と共に佐渡を倒すことに成功し、1週間ルールをクリアして生き残りが決定。

彼の戦いはまだまだ続いていく…

攻撃力C 耐久力A 敏捷A 頭脳C 戦闘技術C 経験C 反射神経A

18 不明

19 不明

20 いりおもてれんか
西表蓮香

初登場は第1話。

通称レン。与那国道場に通っている、というか住み込み。

なので、司とは幼馴染なのだが、何故か主従関係や母子関係みたいである。

剣の腕は相当なもので、道場内若手ナンバー1、全体でナンバー4の実力者。

天然ボケみたいなのところもあり、司を困らせることも。

外見はショートカットの髪、身長は154センチとかなり小柄。しかし、胸は意外と大きく、さらにで隠している。

「司」マニアであり、司のことはほぼどんなことでも分かっている。

そして異常に忠義であり、それは時々違和感を生む。

すでに第一奥義の「神速」を習得しており、道場の師範とともに戦える。（ただし、数秒のみ）

司に気剣体の統一と神速を教え、師弟関係になりつつもある。

佐渡との戦いのときに、神速を一発で破られ、圧倒的な力を見せ付けられる。

本気佐渡相手では手も足も出ず、寧々を庇いながらの戦いであつたので、敗北。

佐渡敗退後も、残ったたった一つのバッジで、司と一緒に戦っていることになるだろう。

攻撃力C 耐久力B 敏捷S 頭脳C 戦闘技術A 経験B 反射神経A

21 不明

22 不明

23 国後大樹^{くなしり だいき}

初登場は第8話。

ペロポネソス学園3年生で、光世の親友。

短髪で、フレッシュな感じで、熱血漢。

武器は双剣で、結構な腕前だが、佐渡に歯が立たず、敗退。

攻撃力C 耐久力B 敏捷B 頭脳D 戦闘技術C 経験C 反射神経B

24 不明

25 はばまいたける
齒舞武

初登場は第3話。

司のクラスメートで、気弱な性格をしている。

実はSF参加者で、参加理由は不明。

身長は170センチほどで、眼鏡を装着し、服装もきちんとしているので、真面目な生徒だと思われる。

攻撃力E 耐久力E 敏捷D 頭脳A 戦闘技術E 経験E 反射
神経D

その他、番号不明のSF参加者

はちじょたいすけ
八丈大輔

第4話の最後にのみ登場。

SF最初の脱落者。

SFをゲーム感覚で参加していたのだが、謎の人物によって真っ先にやられた。

それは佐渡なのか、それとも…

まつしま ななえ
松島七恵

登場は第5・5話のみ。

新聞部所属のカメラマンで、3年生。

SFをリアルタイムで見るために参加したものの、バッジ獲得の餌食にされてしまった。

喉を潰され、意識を失った彼女は、病院に運ばれたものの、意識は回復していない。

寧々を襲った奴

登場は第17話。気絶中の寧々の最後のバッジを盗った奴。手負いとはいえ、レンを破るほどの実力者。

一般生徒（生徒会）

たけしま ちぐさ
竹島千草

初登場は一応プロローグ。

国立ペロポネソス学園生徒会長。

端麗な容姿と明るい性格で、全校生徒の人気を欲しい俤にしている。全校生徒の名前をきちんと覚えているところがとても恐ろしくもあり、すばらしい。（ペロポネソス学園はマンモス校です）

身長は150センチで、かなりの小柄である。

SFを純粹に楽しんでいる節がある。

たけしま ちはや
竹島千早

初登場は第2話。

国立ペロポネソス学園生徒会副会長。

竹島千草は双子の姉である。

姉にそっくりの外見をしているが、性格は落ち着いており、全然似ていない。

時々出てくる「副会長の女」が彼女なのかどうかは謎である。

一般生徒

屋久巴やくともえ

初登場は第1話。

主人公、レン、寧々の姉的存在の幼馴染。

料理の腕前がかなりのもので、与那国家によく作りに来ては一緒に食べている。

弓道をやっており、中々の腕前らしい。

身長は160センチほど。

司のことを相当可愛がっており、お姉さんぶる。

現在、司にとっての心の癒しである。

一条次郎いちじょうじろう

初登場は第1話。

通称ジョージと呼ばれる司の悪友。

完全なる脇役である。

種貸愁たねがしゆう

初登場は第5話。

ペロポネソス学園3年生で、剣道部主将。（もう少しで引退）
実力のある司を剣道部にしつこく誘っている。
全国大会ベスト3の実力者。

その他

与那国道場師範

初登場は第1話。

言うまでも無く、本名ではない。

司の父親で、与那国流奥義を全て習得し、剣道界でも名高いのだが、
近年は道場経営が困難になっている。

道場のアピールのために司をSFに参加させるが…

占い師ドレミ

初登場は第5話。

司の前によく現れる謎の占い師。

司が悩みを抱え、彼女に会いたいと願ったときに、司は彼女の部屋
に行くことが出来る。

ミステリアスなフードを被り、ローブを着ているので、見るからに
怪しいのだが、司はそう感じなくなった。

司のことをよく知っていそうな発言をしたり、司に助言をするなど、
言動が司寄りだったりする。

司とは一体どういう関係なのであろうか…それとも、司のよく知っ

ている人なのであろうか：
詳細は未だ明かされず。

十字、モデ、チャラ

物語の最後にちよくちよく登場する謎の男達。
会長、副会長と言った発言をすることから、生徒会関係者なのかもしれないが、詳細は不明。

与那国流奥義紹介

第一奥義「神速」

高速で相手に突っ込みながらなぎ払う攻撃。
ある程度距離がないと放てない。

第二奥義「旋風」

自分を片足を軸に回転し、放つ回転斬り。
用途がたくさんあり、使いやすい。

第三奥義「千刃」

近距離専用で、見えないほどのスピードで放つ連続攻撃。

最終奥義「光閃」

与那国流奥義で最強の奥義。詳細は割愛。

第二部へ至る道（後書き）

SFが連載を再開します。

ただ、忙しいので、更新スピードはそんなに早くありません。

第18話 司の日常、戦士の休息（前書き）

やっとこさっつとで更新

第18話 司の日常、戦士の休息

疲れも取れ、眠気も取れ、傷口も塞がり、俺は道場稽古を再開することにした。

ちなみに学校にも復帰するつもりだ。

長期間休むのはさすがにまずいからな。

さて、俺は今何しているかというと、レンと一緒に朝稽古である。

「あれえ？」

俺は首を捻る。

「佐渡との戦いときは確かに旋風が出来たのにな…」

「そうなのですか？」

俺は今、与那国流第二奥義、旋風の稽古をしている。

ちなみに旋風というのは、片足を軸に高速回転する攻撃。

特徴としては、全方位に対応している他、隙が少ないこと。

神速の後に放つことによって、神速の弱点もカバーできるのだ。

「ではやってみます」

レンは木刀を構えた。

彼女も周りに気が集まっている気がする。

「はあ!!」

彼女は高速に回転した。

ちなみに、さっきの俺よりも速い。

パチパチパチ

「ん？」

俺とレンが道場の入り口に顔を向けるとそこに、父が立っていた。どうやらレンの旋風を見て感心しているようだ。

「レン、ほぼ旋風を会得できているようだな。旋風は全包围攻撃からの防御技であり、攻撃技でもある。風を起こして相手との距離を空けることも出来るし、神速の後に放つことによって神速の隙を無くすことが出来る」

やはりそうなのか。

俺は佐渡と戦ったとき、確かに旋風が使えた。

神速の隙を無くすことが出来たし、緊急離脱にも使えた。

でも何で今は出来ないんだ？

「で、司。お前も旋風の特訓をしているのか？」

「ま、まあ…」

今出来ないのに、前は出来たとか言ったら恥ずかしい。

何か自分はまだやれる、やれば出来る子なんだ…みたいなイタイ奴になりかねない。

「そうか。見せてみる」

「あ、はい！」

俺は佐渡と戦ったときのことを思い出す。
軸足の左足に力を入れ…思いっきり回る!!
俺は全力で回転した。

「…」

しかし、父の目は冷めていた。

「ど、どうですか…?」

いや、ダメに決まってるだろ。
と思いながらも訊いてしまう自分がいた。

「お前はただ回転しているだけだ。攻撃ですらない」

父はそう言って自分の竹刀を取り出し、構えた。

「これが本当の旋風だ!!」

「何?!」

目の前に竜巻が起きた。
そんな感じ。

「何て風圧だ…!!」

回転と共に周りの空気が父へと誘い込まれる。
まさに竜巻。俺とレンはそれに巻き込まれないようにするのが精一杯だった。

「さすが…」

旋風が終わり、俺とレンは尻餅をついた。

ダメだ。核が違う。旋風はただの近距離攻撃じゃない。

近距離へと相手を誘い込む攻撃なのだ。

「まあこの域までに達しなくても良い。だが少なくとも、風が起きる程度までになっている」

父の言葉が道場に響く。

あのときの俺の旋風は確かに風も出ていた。
だから緊急離脱が出来た。

「何だ司。不服のようだな」

「いえ…」

やっぱり前に出来たことが出来ないのが悔しい。
悔しい？ …随分と俺も変わったものだ。

「レンにも言えることだが、一步ずつだ。初めから全てが出来る人間なんていない。だから、常に努力しろ」

「はい！」

「はい」

レンの返事に比べて、俺の返事はいまいち気合が入っていなかった。

俺の木刀は佐渡によって折られてしまった。

だから俺は今、別の木刀を持っている。

弘法筆を選ばず、とは程遠い俺にとっては大きなハンデとなる。
今まで慣れていた木刀とはやはり少し違う。

何せ、俺の木刀を作っているのは人だ。それぞれ違う出来である。
同じ木刀など、この世に一つも存在しないのだ。

だが、それを言い訳に出来るほど、SFは甘くはない。

「いや、司も風邪が治って良かったな！」

昼休み、ジョージが俺の背中をバンバン叩く。

ジョージには風邪で休んだ、と言ってある。

まあジョージだけではない。表向きはそうしているだけ。

「まあな。寧々は少し苦戦しているみたいだが」

寧々は全身の痣がある。

痛々しいほどに。

だからまだもうちょっとだけ休んでいる。

「よし！それじゃ早く食堂に行こうぜ！」

「そうだな」

俺とジョージとレンは3人で食堂に行くことになった。

「混んでるな」

そして案の定食堂は混んでいた。

ここだけはいつまでたっても変わらないものだな。

そして俺はさり気なく真理恵を探してみる…が、いない。

まあいつもここに来ているわけじゃないだろう。何確認しているんだ俺は。

「席はどうする？」

「私は若様と一緒に行くので、一条様はお一人でどうぞ」

「レンちゃんヒドッ！！」

ジョージが涙目になるが、レンは首を傾げるだけ。
レンに悪気は無いのがなお、タチが悪い。

「ま、そういうことでジョージは一人な」

「チクショウ！絶対彼女を見つけてお前に自慢しまくってやるくくく！！」

ジョージは涙を流しながら走り去っていった。

しかも俺に彼女の自慢をすることで気が晴れるのかよ。

…ん？

何か視線を感じるな…

俺は周囲に気を配り始めるが…

「若様はどこに座ります？」

俺はレンの言葉によってそれを気にすることをやめた。

ここを見張られても平気であろうということだ。

「空いたらそこに座ろうぜ」

そのとき、席が二つ、目の前で空いた。

まさかこれはチャンスなのでは？！

俺は席に座ろうとする。が、横からすさまじい速度で来て、俺の前の席を誰かが奪った。

「な…」

「よう。与那国司」

「種貸先輩!!」

超スピードで俺の席を掠め盗ったのは剣道部の種貸主将であった。
この人なら超スピードで来られても違和感が無いのがすごい。

「この席が欲しければ剣道部に入るんだな」

「それだけのために俺の席を…」

「だって試合近いのにみんなヤバイだもん！ 主力が怪我をしちやって!! 団体戦は5人だろ?! 俺は必ず勝つとして…」

必ず勝つんかい。

「残り4人で2勝が絶望的なんだ！ 次期主将の近藤は大丈夫だが、その他の3人が…だから頼むぜ！」

つまり、確実に勝てる3人が剣道部に欲しいということか。

でもな…俺の道場は実際の斬り合いに近い剣道を教えてるからな…。
ちよつとだけ毛並みが違うんだよな…。まあ剣道部にもいたから普通
に通に剣道出来るけど。

「でも俺も道場の方が…」

「一回だけでいい！」

種貸先輩が俺に深く頭を下げた。

「ちよつ…」

おいおい…これはまさか参加しないと駄目な空気か？
…まあ一度なら良いかな？

「いつですか？」

「おう！明後日だ！」

「早っ！」

「だから今、人生で一番頭を下げているんだ！」

「…」

俺は無言でレンを見た。

レンは仕方なしに頷く。彼女もこの熱意には負けたのかもしれない。

「分かりました。これっきりでですよ？」

「助かった！！サンクス！」

種貸先輩は心底安心したような顔をした。

「それで、明後日のいつですか？ 場所はどこですか？」

「明後日の放課後にここの体育館だ！」

「へえ。ここなんですか。分かりました」

俺は意外だな、と思いつつもそれを了承した。

まあ了承しない限り、この問答を繰り返すことになるかもしれない。

それにしてもウチの学校でやるなんてね…

「じゃあそれだけだ。約束破ったらどうなるか…」

「分かってますよ!」

種貸先輩は笑いながらそんなことを言いやがった。
さすがに俺は鬼畜じゃないから、約束は守る。

「ははは。じゃあ明後日」

種貸主将はそう言って去っていった。

「若様…」

気がついたら、レンが俺の方を心配そうな目で見ている。

「大丈夫だって。久しぶりの剣道の大会だからな。少しワクワクもある」

「いえ、そうでなくて、時間が…」

「は?」

キーンコーンカーンコーン♪

昼休み終了。俺は昼飯を食べ損ねた。
…最悪だ。

放課後：

昼食を食べ損ねた俺は、レンとジョージと普通に帰ることにした。
さすがに昼を抜いてSFは戦えない。

「なあなあ。今日はお前、暇か？」

「いや、俺は道場の稽古が…」

ジョージに遊びに誘われた。

確かに、最近はめっきり遊んでいない。

少し、息抜きをしたいところだが…SFがあるしなあ…

「たまにはいいだろ？ 最近のお前、付き合い悪いぞ！」

「うーん…」

俺はチラリとレンを見る。

一体どういう反応をするのか…

「若様のお好きにどうぞ」

「え?!」

今信じられない言葉を聞いたんですけど?!

レンが許してくれた…?

「レン…?」

「若様…私を若様の保護者だと勘違いしてませんか？」

「え、そうじゃないの？」

レンは俺を見て複雑そうな顔をした。

「そんな風に私を見ていたんですか…私は若様の護衛であって保護者ではありませんよ」

「そ、そうだな…」

だが、行動の節々が保護者みたいだぞ。
最低でも俺はそういう風に感じていたが。

「なので、若様が遊びに行くのならば、私も着いて行きます」

「いいいい?!」

ジョージが奇妙な声を上げた。

レンが来るとまずい事でもあるのだろうか…いや、そうだな。あるに決まってるな。

「な、なあ司…」

「お前、アレしに行くのか？」

「ひ、久しぶりに…」

どうやら久しぶりにアレをするみたいだ。

「レン、お前は俺の新しい木刀でも探してくれ」

「若様…」

「頼むぜ」

「分かりました」

基本的にレンに何かを頼めば、それをやってくれる。
まあダメな時もあるけど。

「じゃあなレンちゃん」

「気をつけて」

俺たちはレンに別れの挨拶をし、繁華街へと歩き出す。

「それで、やっぱりナンパか？」

「当たり前だろ！　つかお前もナンパ乗り気？」

「いや、俺はお前が断られるのを陰で笑う」

「ひどっ！　お前チヨ↓陰湿！！」

「お前はギャル男か！」

俺とジョージはそんなバカな会話をしながら、繁華街へと到着した。

「じゃあ俺はゲーセン行ってる。ナンパに成功したら呼べよ。期待してないけどな」

「チクシヨウ：絶対成功するぜ！」

俺は適当にジョージをあしらった。

まあコイツのことだ。成功なんてしないだろう。

：これって成功フラグ？

4時間後…

「よっしゃあ！ ナンパ成功したぜ！」

電話の向こうでジョージの元気な声が聞こえた。

「バカな…」

ジョージがナンパを成功させただと…？

ありえない…夢か？ …いや、夢じゃない！

俺はわざわざ頬を引っ張って確認する。

「まあ相手は一人なんだけどさ…お前も…え？」

何か電話の向こうで話し声が聞こえた。
相手の女の子なのであろうか。

「あ、悪い！ 俺一人がいいらしい。はっはっは、残念だったな司。
俺は今日、大人の階段上るぜ！！」

「…はいはい」

俺は電話を切った。

ジョージがナンパを成功させるとはね…
少し複雑だ。アイツに先を越されたと考ええると、すごく複雑だ。

プルルルル♪

「げっ！」

しかしその後、また電話が入った。相手は父親。

「も、もしもし…」

「バツカモン！！さっさと帰ってきやがれ！！」

「れ、連絡しなくてすいませんでした！！」

最近遊びに行くことがメッキリ減ったために、こういうことをする
のを忘れてしまった。

今は…早く帰るべし！！

俺はゲーセンを出て、家へと歩き出す。

―某所―

「クッククク…佐渡隼人…私のためによく頑張ってくれた」

薄暗い部屋で、怪しげなクスリを調合している人物がいた。

「アイツのおかげで私は水面下でコトを運べた…」

その人物はクックククと笑いながら作業を続ける。
SFはまだ序盤だということを忘れてはいけない。

第18話 司の日常、戦士の休息（後書き）

活動報告で予告プレビューを行ってます…

次回は「木刀対拳！司の捜し物！」

第19話 木刀対拳! 司の捜し者! (前書き)

リニューアル版はいまいち使いにくいんですが…

第19話 木刀対拳！司の捜し者！

俺に勝負を挑んできた男がいた。

どうやら拳法部の男らしい。

今は放課後、そして場所は学校。

そしてその男の胸にはSFのバッジ。

俺の胸にも17と彫られた3つのバッジ。

つまり、これはSFとしての勝負だ。

「お前の噂は聞いている与那国司」

「どういう風に？」

「佐渡隼人を倒した男、という風に」

どうしてそのことを知っているんだろうか？

意外と噂されていたのであろうか。

それとも…

「さて、おしゃべりはここまでだな」

男は戦闘態勢に入った。

それより時間は朝まで遡る。

朝起きて、俺は朝稽古をしに行った。

前日にレンが用意してくれた木刀を持ち、感触を確かめる。

…やはり前より違和感はあるな。

「それで大丈夫ですか？ 若様」

「うん…」

「ほ、本来ならば若様が一緒に来てくれなければいけないんですよ?!」

レンが珍しくうろたえている。

「そ、それなのに若様はナンパなんて…」

「はい？」

ナンパしているのを何で知ってる？

というか俺はナンパしていない。

「もう少し師範代としての自覚をですね…」

レンが俺に説教じみたことを言い始める。

「…やっぱり保護者じゃん」

「何か言いましたか？」

「いや、何も」

やっぱり遊びは程々にしようと密かに決めた俺がいた。

そんなこんなで学校に行く時間になった。

寧々はまだ休養。痣はほぼ消えたので、学校に行くのはもう少しだ。トモ姉もいつものように俺たちの朝食を作り、俺とレンと一緒に学校に行く。

「そういえば朝練は無いの？」

俺はトモ姉に訊く。

「うん。今日は無いって」

「そっか」

そういえば登校している今になって気づく。
一人足りないことに。

「そういえばジョージ来ないな…」

ナンパ成功の後にも電話は来なかったし。

何かあったのだろうか…

あ、そうか。ナンパに最終的に失敗したんだな、うん。

だから恥ずかしくて、俺に連絡もしないのか。

俺は自己完結した。

「ま、いいや。あいつのことは心配ないだろう」

俺たちはそう言って学校に行った。

ちなみに俺の荷物の一つに新しい木刀もあった。

…ところで、視線を感じるけど、シカトするべきか？

どうやら最近の俺は人気者らしい。

そして、放課後の今に至る。

この新しい木刀での戦いは初めてだ。
だが：

「お前、武器は持っていないのか？」

「拳法部だからな」

「そうか」

父の教えの一つ、武器の持たぬ者に剣を向けるな、がある。

彼は武器を持っていない。

つまり、俺は木刀を向けられない。

俺は木刀を床に置いた。

「何のつもりだ？」

当然ながら俺に質問を浴びせてくる男。

「父の教えでな、武器の持たぬ無防備な者に剣を向けてはならない
って…」

「ほう」

すると男は俺を挑戦的な眼差しで見る。

「それは立派なことだ。だが、お前は勘違いをしている」

「?!」

男はしゃべり終わったと同時に俺に殴り掛かってきた。

間一髪避けたのだが、俺の後ろの壁は15センチほどへこんでいた。

「俺は武器を持っていないんじゃない。俺自身が武器なのだ」

男は自分の拳を見ながらそう言った。あれほど強力なパンチを繰り返して、壁をあれだけへこませた彼の拳には、ダメージがほとんど無いようだった。あの拳は異常だ。まともに当たったら一発で失神する可能性もある。

俺はその男と少し距離を取り、さらに、落ちていた自分の得物を拾った。

「確かにその拳は強力だな。分かった、俺もこれで戦う」

「へっ」

男は妙に嬉しそうだった。彼はとても武人のような性格をしているらしい。

「佐渡を倒したその力：見せてもらおうぞ!!」

男は俺に向かって走り込み、拳を振るう。その攻撃を木刀で弾くのもいいのだが、あの強力な拳で木刀が壊れない保証はない。

したがって、俺はサイドステップでそれをかわす。とにかく、近距離に入られたら負ける。

俺があの男に優っているものといえば、武器のリーチに他ならない。

つまり、ある程度の距離を保つのが俺の必勝条件だ。幸い、剣道において間合いは相当重要な要素なので、俺にとってそれは苦ではない。しかし…

「逃げるだけか？」

男による両拳の連続打は止まることを知らないらしく、俺は間合い取りにえらく苦勞していた。

予想以上に相手の攻撃スピードが速い。リーチがないのがせめてもの救い。このままでは、そのうち俺が追い詰められるのが目に見える。とにかく相手の攻撃を一時的に止めさせなくては。

「少しは応戦しないかっ!!」

男の拳が頬を掠める。

それだけなのに、頬が切れた感じがした。…何てバカみたいな威力なんだ、その拳は。

俺のように反射神経に特化した人間じゃないと中々対応出来ないぞ。あ、自慢じゃないけど。

「分かった。期待に応えてやる」

そろそろ俺も反撃をしたい。やられっぱなしは流石に悔しい。

俺は距離を取って態勢を低くする。

「ようやく本領発揮ってところか」

男も構えをとる。どうやら俺の攻撃を真っ向から受け止めるらしい。俺は腕と足に力を込める。この技は必殺。今の俺はこの一撃で相手を仕留めなくてはいけない。

与那国流奥義…神速…!!

「?!」

男に目を見開く暇を与えずに、俺は相手との距離を一瞬で詰め、横薙を払った。

「ぐうっ…!!」

男は守りが間に合わず宙に舞った。今の神速は俺の中でも最高の出来だったかもしれない。

「がっ!!」

男が地面に叩き付けられ、うめき声をあげながら血を吐く。どうやらこの木刀の方が神速をしやすい、という面白い結果が生まれたらしい。

「はあ…」

俺は軽く息を吐いた。さすがに回避しつつけると足にくる。もう少し基礎トレーニングを積んだ方がいいかもしれない。

「早速バッジを貰うぞ」

俺は男に近づき、バッジを手にとった。

番号は18番。何気にエース投手の番号…それはともかく、随分と参加者の様子が分かってきたようだ。

俺は速やかにその場を去り、レンとの合流地点へと向かった。

…それからまもなく、倒れているこの男に一つの影が近づいた。彼

がその後になつたのかは…後で俺は知ることになるのだつた。

合流地点には、すでにレンがいた。
少し、制服が汚れているので、戦闘をしたらしい。

「レン。そっちはどうだった？」

俺は少し明るめに話し掛けた。

「戦果はあります」

そう言って彼女は俺に2枚のバッジを見せてくる。

一つは25であった。

確か25は…

「レンは菌舞と遭遇したのか?!」

「はい。ですが、少しおかしいので、帰ってからお話いたしましょう」

「分かった」

俺はこれ以上の追求をここでせず、帰ることにした。俺もレンもバッジを獲れたことだし、一週間ルールもクリア。先週とは大違いだ。

家に帰り、夕食を摂り、お風呂にも入った俺とレンは、俺の部屋で向かい合っていた。

しつこいが、甘い雰囲気など微塵も無い。

「先程の話の続きを言います」

レンは語りはじめた。

「25番の歯舞という者ですが、前と様子が違いました」

「どういうことだ？」

俺はレンの話に聴き入った。

「私が戦った彼は、妙に好戦的な男でした」

「は？」

俺の知っている歯舞は、気弱で、真面目で、争いには不向きな男だ。
なのに何故？

「何故かは知りませんが、とにかく好戦的でした。あ、それと、武器なのですが、えあがん？と言っていました」

「よくその武器相手に戦えたな」

俺としては、エアガン相手に怯まぬレンも凄いが、自分の武器を公表する歯舞もある意味凄いと思う。いや、罠かもしれないけど、今は信じてみよう。

「で、見間違いないじゃ無かったのか？」

「確かに齒舞という男の顔をしていました」

レンが少しムツとしながら言った。
ちよつとかわいいところもあるんだな。

「分かった。それと、もう一つのバッジなんだけど…」

「はい」

俺に見せてきたもう一枚のバッジ。そこに彫られていた数字は8。

「8番か…って8?!」

確か8は寧々の番号だったはず。

「このバッジはどうしたんだ？」

俺は少しだけ声が震えていた。
もしかしたら…という気持ちがある。

「齒舞という男が落としました」

「…そうか」

確定したわけじゃ無いが、齒舞が手負いの寧々に引導を渡したかもしれない。

つまり、俺が追っている相手の可能性があるということだ。そう考
えると、俺は自然と拳を強く握りしめていた。手負いというか、気
絶している人間を狙うという卑怯なことが俺は許せない。いくらバ
トルロワイアルでも、幼馴染みが被害者だから、感情が抑えにくい。

俺の心はやっぱり、結構熱くなりやすいらしい。いつから？

「若様」

「あ、悪い」

考え事をしていた俺をレンが現実世界へと連れ戻す。

「気持ちちは分かりますが、今は抑えてください」

「あ、ああ…分かってる」

まだ歯舞だとか確定したわけではない。俺は深呼吸をして気持ちを落ち着かせる。今は現状把握…参加者整理が先だ。

「では書きます」

- 2 佐渡隼人（大鎌） 敗退
- 3 宮島先輩（薙刀）
- 6 巖島真理恵（鎖）
- 8 奄美寧々（木刀） 敗退
- 13 沢村光世（ナイフ、双剣）
- 16 謎のくの一（武器不明）
- 17 司（木刀）
- 18 拳法部の男（拳）
- 20 レン（木刀）
- 23 国後大樹（？） 敗退したらしい
- 25 歯舞武（エアガン）

「すみません、若様。拳法部の男って…」

「あ、ああ…」

そういえば説明するのを忘れていた。

「いやさ、今日はその男に遭遇してさ、まあ勝ったんだけど…」

「まあ若様が無事なら何よりです」

レンはあまり深くはきかなかった。俺はその後、ちょこつとそいつの特徴だけを教え、眠ることにした。明日は剣道の試合がある。睡眠はきちんと摂っておかねば。

あれ？

おかしいな…

俺は寝たはずなんだけど…

気がつくと、占い師ドレミの部屋に俺はいた。

俺は瞬時に後ろを向く。

「ようこそ…」

眠そうな声でドレミが声をだした。

「眠いんですか？」

「今何時だと思ってるのよ…」

妙に声が若い。実は結構俺と歳が離れていないのかもしれない。いつもは芝居じみた口調だし。

「えーと…すみません」

「ま、いいわよ…それで、どんな悩み？」

口調がいつもと違う。素が出ているのか？

「えーと…」

この人にはもうSFのことを言っても問題無いだろう。つうかもう知っているだろうし。

「SFのことなんですけど…」

「それで？」

彼女はやはりもう驚かないらしい。

「俺の幼馴染みに引導を渡した奴がいて…そいつは誰か、って悩んでいます」

「そうね…」

彼女は水晶玉に手をかざす。だが…

「眠くて無理。以上。おやすみ」

「は?！」

ちよっ! 口調がいつもとかなり違うよ! しかも寝るの?!

「早く出ていきなさいよ。女性の寝る部屋にいつまでいるの?」

「へ?」

つうかここで寝るのか?

「ふあゝあ…残念だけど布団は一つしかないの。それとも一緒に寝る?」

「し、失礼しました!!」

俺は急いで背後のドアを開けて部屋から出た。

気がつくくと布団の中。時刻は午前二時半。こりや確かに遅い。いや、ある意味早すぎる。

―某所―

「政府は何か言ってたか？」

十字がその薄暗い部屋にいる者達に話し掛ける。

「いや、好きにしろ、と」

チャラは髪を掻き上げながら言う。言うまでもなく、格好つけた。

「そうか：S Fは第二段階に入った。これから我らは監視と：」

「排除だね」

モデの言葉を遮ったのは、少々幼めの女の子だった。

「では早速、仕事といこうじゃないか」

その幼めの女の子と瓜二つの顔をしている女が皆の顔を見渡しながらそう言った。

「了解」

「承知」

「OK」

「分かってるって」

彼ら5人は、一人ずつこの部屋を出ていった。

第19話 木刀対拳! 司の捜し者! (後書き)

次回は第20話、「レンとの出会い…そして剣道!」です。

半分は過去編でお送りいたします。

第20話 レンとの出会い…そして試合！（前書き）

更新再開！！

パソコンいじるのが面倒くさくて本当すいませんでした。

第20話 レンとの出会い…そして試合!

夢を見た。

それは、昔の記憶。

俺とレンが出会ったときの話。

俺はまだ幼い…小学校低学年のとき、一人の女の子が俺の家にやって来た。

「…」

「誰？」

俺はその少女に何故か、多少の懐かしさを感じたものの、まずは疑問に思った。

この子は誰？ と。

「…」

しかし、少女は黙っていた。

しかも、俺の方を見向きもしない。まるで俺がこの場にいるのに興味が無いみたいだ。

「おうおう来たか」

そんなとき、父がその場にやって来た。

俺の父親は同級生の父より老けている、というか年配だ。俺を産んだときの父の年齢は40代の後半だから。

「司、今日からこの家で一緒に暮らす西表蓮華ちゃんだ」

「一緒に：暮らす？」

いくら小学校低学年の俺でもその言葉の意味は理解していた。

母親が事故で亡くなり、その入れ替わりのようにやって来た彼女。俺は少し混乱していた。

「そうだ。仲良く出来るか？」

もちろんこのときの俺は無垢だったので、たいしたことを考えもせずに頷いた。

「ぼく、つかさ。よろしく」

「：」

彼女は俺の出した手をジッと見つめたまま固まった。

「どうしたの？」

何を思ったのか、彼女は俺から視線をプイと逸らし、その場から立ち去った。

「：」

俺の右手は空中に制止したままだった。

隣の父親は少しだけため息を吐いていた。

それからというもの、俺は彼女とロクに話が出来なかった。俺や寧々、トモ姉が彼女に話し掛けても無視されるという日々が続いた。そしてさらに彼女は問題児であった。

家のものは良く壊すし、人の話は聞かない、学校では浮いていた。そう、彼女は最低限のことしか喋らないのだ。そして彼女も俺と同じく剣道をやっていたが、その剣は無情だった。そう、だからとある事件を引き起こしてしまう。

「痛っ!!」

寧々が強い衝撃に飛ばされる。

「寧々!!」

俺は寧々に走り寄る。

「大丈夫か?!」

「ヒック…ヒック…」

彼女は泣いていた。それはそうだろう。彼女はまだ小学校中学年なのだ。仕方が無い。むしろ声を押し殺しているところを褒めるべきだ。

「謝れよ!」

俺は寧々を突き飛ばした相手を睨みつけた。

しかし、彼女はそれに気にすることなく剣道の練習をしていた。そしてその態度が幼い俺の心に怒りを宿してしまった。

「お前…!!」

「静まらんか!!」

俺が彼女に掴み掛かる直前に、父の怒声が同情内を舞った。それと同時にその場が静まり返った。

「司、お前は寧々を連れて部屋に戻れ。泣き止むまで側にいてやれ」

「でも…!!」

俺は寧々に危害を加えた犯人を睨みつける。

「司!!」

「くっ…」

剣道中の父の言うことは絶対だ。昔から身を以って思い知らされている。

俺は唇を噛みながら、寧々を連れて道場を出た。俺の気分はもちろん晴れなかったが。

その後、レンは父から思いっきり怒られたのだが、表情一つ変えなかった。だが、父はそんなレンに何一つ文句を言わずに説教を止めた。正直言って不条理だった。レンに甘い父親は嫌いだった。

まあそれからいろいろあって今のレンがいるわけなのだが…まあ肝心な部分の記憶がごっそり抜け落ちているので、詳細は不明。聞いた話では、俺がレンのピンチを救い、それによってレンが俺に心服した…というものだが、どこまで正しいのやら。

おっと…ちよつと夢について考えすぎたようだ。今日は剣道大会なので、きちんと朝稽古をしないと。

俺は布団を出て、顔を洗いに洗面所へ向かった。

ガラガラ

「ふあゝあ…」

「若様？」

「へ？」

そこには素っ裸のレンがいた。まあここは脱衣所としての役割もある
るので、おかしくはない。おかしくは。だが…

「す、すまん!!」

俺は急いで目を背けて洗面所から抜け出た。

「あ、若様！」

俺は何も恥ずかしいと思っていないレンの言葉を背中で聴いた。

とまあレンは俺に対して警戒心が無さ過ぎる。いくら家族同然だとしても、少しは考えてもらいたい。ただでさえ彼女はスタイルが良いのだ。俺が何も思わないわけが無い。

「若様、そろそろ」

放課後、俺はレンに話し掛けられた。

「あ、ああ」

レンめ。何とも思っていないのかよ。
まあそれより目的の場所：体育館に行かなくては。
俺はレンと一緒にそこに向かった。

「は？ 親善試合？」

俺は体育館での種貸主将の発言に聞き返してしまった。

「そうだぞ。俺は大会だなんて一言も言っていない」

「何い?!」

俺は勘違いしていたのかよ!

気合いもきちんとして入れ、緊張もしたんだぞ?!

「でも手は抜くなよ」

「当然です。相手に失礼です」

「そうか」

フツと主将は笑った。何かを含んでいる笑みだ。

「俺はこれとあと一回の親善試合で引退しようと思っている」

「え?! 冬の大会は?!」

「俺もいろいろ忙しいからな。それに3年だ」

国立ペロポネソス学園にはもちろん国立ペロポネソス大学へ進学する人がある。ただ、国立なので、エスカレーター式ではない。つまり、受験勉強をきちんとしなければどこの大学にもいけないということだ。実に耳の痛い話だ。

「でも主将ならスポーツ推薦で…」

「保険だ保険。勉強するに越したことはないし、損は無いだろう？」

確かに…この人は凄く真面目な人らしい。

「よう種貸！」

そんなとき、相手側の方から一人の男がこちらにやって来た。相手側の主将だろうか？

「おう永島！」

どうやら二人は知り合いらしい。

「例の約束を覚えているか？」

「ああ。俺達が勝ったらお前からマスチルのライブチケットを俺がもらう。そしてお前が勝ったら…」

種貸主将が何かをスラスラと言う。

「お前のDVDプレーヤーを貰う」

「何か俺の方が賭けてるものが高い気がするが…」

「何を言う!! このマスチルのライブチケットはもうソルドアウトだぞ?!」

「…」

俺は言い合う二人を見て嘆息した。

どうやらこの人がここまで真面目なのは自分のためらしい。何が真面目だ。

この人は真面目では、ない。

剣道の試合が始まることになり、俺達は整列した。ちなみに俺は大将。

出来るだけ部外者の俺に回したくないというのが理由らしい。

「みんな〜！頑張って〜！！！」

生徒会長の竹島千草の声が聞こえる。

彼女も見に来ているのか。まあ生徒会長だし。

ちなみに、観戦者はあと、知っているのはジョージ、レン、トモ姉、まあ後は…ん？ 真理恵もいるみたいだ。これからの戦いの参考にでもするつもりなのだろうか？

「先鋒！ 前へ！」

ちなみにうちの先鋒は種貸主将だ。

そして相手の顔は顔面蒼白。そりゃそうだ。種貸主将は高校生とは思えぬ実力だ。

「初め！！！」

そして、試合が始まった。

「ヤアッ！！！」

種貸主将が声を出す。剣道はこのような掛け声を出すのだ。声が出ていないと一本にならない。

「突きたい！！！！！」

「一本！！！」

「え？」

気がついたら種貸主将は相手から一本を取っていた。

俺は目を疑った。相手は全く動けなかった。そう、それほど鋭い突きだ。俺も捌ける自信は無い。

「すごい突きだね」

ただ、会長の脳天気な声は少し場違いな気がした。

俺の番がやって来た。

ちなみに先鋒の種貸先輩は、あの後にもう一回突きを決め、たった二本で勝利。剣道の試合は基本的に三本勝負：つまり二本先取で勝利なのだ。つまりあの先輩は、二本中二本を相手に決めたのだ。いやはや、とてつもない強さを秘めている人だ。純粹にその強さは憧れる。

そして次鋒の副主将も一応勝利し、二連勝をして王手をかけた。しかし、種貸先輩の懸念したとおり、主力を欠いていたので、中堅と副将は負けてしまった。そして俺の出番というわけなのだ。

「司っちっ！頑張ってっ！」

「司ちゃんファイトっ！」

「お前なら出来るぜっ！」

「精一杯の実力を出してください、若様！！」

生徒会長、トモ姉、ジョージ、レンの応援が聞こえる。

少しだけ恥ずかしい。

そして相手を見る。相手は向こうの学校の副主将だ。おそらく結構な実力者だ。

「前へ」

俺と相手は互いに礼をし合い、右足から三歩歩いて仕切線で蹲踞ぞんぎょする。

ちなみに、蹲踞というのは：まあ調べた方が早いと思う。

「始め！！」

審判の掛け声と同時に俺達は立ち上がる。

相手との距離は少し離れており、普通は初期位置から打つことは出来ない。普通は。

だが、俺にとってこの間合いは充分打突の範囲である。

「面ええん!!」

だから俺は迷わず立ち上がった途端に一本を放った。

「な…!!」

相手の顔が驚愕するのが見える。

そりゃそうだろう。普通はこんなこと出来る人はいない。いや、カウンターが怖くてやらない人が多い。それに、遠い間合いなので、外す可能性も高い。

スパーン!!

「一本!!」

だが、そんな間合いは俺にとって関係が無いのだ。

すでに神速を習得している身としては、この程度の間合いは近すぎるくらいだ。

「司っちすっごーい!!」

「え? 司ってあんなに強かったのか?」

生徒会長の驚きが混じった歓声と、ジョージの驚愕する声が聞こえ

る。しかし、レンや種貸先輩はさも当然のように頷いていた。

「参ったなあ…」

相手の溜め息を吐きながらの小声が聞こえた。

だが、その声に焦りなど感じなかった。むしろ、楽しんでいるような声だ。なかなか豪胆な男子生徒だ。

「始め！」

それからまた試合は仕切り直された。

さっきの戦法はもう使えない。俺は相手の出方を待つ。

「面ええん!!」

「?!」

その反撃の機会はすぐにやって来た。

相手が動いたのだ。俺はそれをいなそうとするが…

スパーン!!

「一本!!」

「?!」

間に合わなかった…?

というか今の攻撃は誰かに似ていた。誰だ? レン? いや、違う。あの打ち方、スピードは俺だ。今、相手は俺の打ち方をコピーしたのだ。

「ほほう…与那国、これは苦戦必至だな」

種貸主将が楽しむように笑う。

「若様…」

レンの顔に焦りの表情が見える。
分かる。強敵だ。

「始め!!」

再び俺達は仕切り直し、試合を再開する。

現在是一对一。次を取った方が勝者となる。

実戦向けの剣道はやっぱり本格的剣道より不利なのだろう。だが、劣っているとは思わない。

俺は、まっすぐに相手を見つめる。

すぐに着く勝負じゃない。それだけは理解した。

「お疲れさま」

生徒会長が俺にタオルと飲み物を持ってきてくれた。

「あ、どうもすみません」

「あ…」

それを見てレンが俺を見つめる。

「申し訳ありません！　気が利かなくて…」

レンが俺に深く頭を下げた。

「いや、別に大丈夫だから！」

「ずるいぞ司！！」

ジョージが涙目で抗議をする…でも、お前は何もしてないからその発言は意味不明。

「いいな」

トモ姉も俺を羨ましそうに見る。トモ姉も生徒会長ファンなのかな？

「さ、約束のものを渡せよ」

「ちっ！」

相手チームの主将がチケットを種貸先輩に渡していた。
全く…あの人は…

「与那国くん」

「あ…」

そのとき、俺と先程まで勝利を奪い合っていた相手が俺の元へとやって来た。

「強いね君。僕が同年代に負けたのは初めてだよ」

「え？」

それってめちゃくちゃ強いんじゃないですか？

「ありがとう」

「あ、はい…」

えーと…あなたの名前を知らないんですが…

「ああ！　そういえばまだ名乗ってなかったね」

しかし、それを察したのか、相手はそんなことを言ってきた。

まあ苗字は剣道の垂に書いてあるので分かるのだが：

「僕は瀬戸孝平。^{せとこうへい} 2年生だ」

「同じ年ですか…」

さっきの種貸先輩の会話で分かったと思うが、俺はこの瀬戸君に勝った。

時間がオーバーしたが、引き分けだと二勝二敗一分になってしまうので、時間無制限のサドンデスに突入した。共に細心の注意を払って戦い、中々勝敗が決さなかった。

そう、俺と彼の腕は互角であったのだ。俺は苦戦しながらも、最後は相手の体力が先に切れて勝った。どうやらSFのための基礎トレーニングが思わぬところで役に立ったようだ。

「でも君は剣道部じゃないんでしょ？」

「ええまあ…道場が忙しくて…」

半分は嘘だ。忙しいのはSFだ。道場も確かに忙しいが、部活と両立はギリギリ出来る…けど、疲れる。元々練習嫌いの俺がそんな選択はしない。でも剣道はしたい。

…矛盾してるなあ。

「そうか…でもまあ、またどこかで会える気がするよ」

「え？」

何を根拠に？

「おーい瀬戸！ そろそろ帰るぞ！」

「あ！ 分かりました主将！ じゃあ与那国君。また会えるのを楽しみにしてるよ」

「ああ。また試合しよう」

俺と彼は固い握手を交じわし、別れを告げた。…結構疲れたな。
俺はみんなの元へ戻り、帰る支度を始めた。今日はSFせずに帰りたいところだな。

「与那国」

「主将…」

しかし、帰る前に俺を呼びとめた種貸主将。
一体どうしたのだろうか？

「俺に剣道で勝てるか？」

「は？」

いきなりこの人は何を言うのだろうか？
全国大会常連者のこの人に剣道で勝て？

「質問の意味が分からないのか？」

「い、いや分かりますけど！ 多分無理だと思います」

「…俺が相手だと本気を出せないか？」

「いえ、本気でも無理です」

「そうか…」

種貸先輩はなぜか深く考え込み、しばらくたってから顔を上げた。

「お前、俺の時もそうだが、常に全力で戦うことを心掛けろよ？」

「は、はあ…」

突然の発言につい気の抜けた返事しか返せなかった。

「お前はまだ強くなる。お前なら…」

「え？」

「いや…とりあえず…お疲れ様」

「はい!!」

こうして俺はやっと帰れることになった。

それにしても、あの人は妙に俺を気に掛けるんだな…
単純にそんなことを思った。

―校内某所―

おかしいですネ…
ボクはケンドーというジャンプのブドーを見に行こうとしたのです
が…

「くっ…」

目の前の相手が力尽きて倒れる。ちなみに胸にはバッジがついてい

る。

つまり、相手はSF参加者。ボクもそうデス。

「はぁ…思わぬ相手に手間取ってしまいました…」

ボクは相手を見下ろす。

この人がいなければボクは体育館に行って試合を見れたの二…でも…

「おかしいデスネ…」

ボクは倒れる彼を見る。

彼の拳は素晴らしい破壊力を誇る強力なウェポンでシタ。しかし、彼は少しおかしい気がするのデス。

：上手く説明が出来ませんが、何かがおかしいと感じたのデス。前までうろうろしていた大量のボーイ達とも何か違ウ。けれど、似ていル…

「とりあえず…彼の最後のバッジを頂きましょう」

ボクは彼のバッジを貰い、ポケットにしまい込む。

それと共に彼の口から虫のような生き物が這い出てきまシタ。

「何デスカ?!」

ボクはその虫を素早くレイピアで突き刺した。

でもすぐに後悔した。生かしておけば、この虫を放った人物が誰だか分かるかもしれないのダカラ…

ボクは気を取り直し、前を見つめた。

本当の戦いは今、始まったのかもしれない…

第20話 レンとの出会い…そして試合！（後書き）

今回は新たなSF参加者が発覚します！

そしてうどん争奪戦も…

次回は「うどん争奪戦と突然の訪問者」です！

出来るだけ更新頑張りますので、よろしくお願いします。

第21話 うどん争奪戦と突然の訪問者（前書き）

まさかの連日更新!!

第21話 うどん争奪戦と突然の訪問者

剣道の試合を久しぶりに行なった。いや、この場合は同世代と、という意味だ。レンとは試合というより練習なので、尚更実感する。練習内容はもちろんSF対策だ。神速と旋風の練習を始め、基礎トレーニング、気剣体の統一練習、掛かり稽古：まあとにかくやれるだけのことは全てやることにしている。いくら佐渡を倒したとはいえ、俺の実力はまだまだ未熟だと思う。せめて一人で佐渡と戦える程度のレベルに持っていかなくては。というか、あの戦いで俺は実力以上の力をたまたま発揮していたので、そう簡単なことではない。話は変わるが、寧々が学校に復帰した。表向きは豚インフルエンザということになっている。SFでの負傷も出席停止扱いなので、ほとんど誰も疑わないだろう。それよりも彼女の体の痣が消えてよかったと本当に思う。彼女も嬉しいみたいだし、一応ホッとした。

「若様、前より気合が入っていませんよ！」

「あ、悪い」

考え事に耽っていると、レンからの注意を受けてしまった。今は稽古中なのに、何たる失態だ。

「司ちゃん、レンちゃん。もうすぐ朝ごはんだよ」

トモ姉が道場に来てそんなことを言った。いつもの日常に帰ってきたみたいだ。居心地の良さを感じる。

「わかった。それと：おはよう、トモ姉」

「うん！おはよっ！！」

トモ姉は元気だ。やっぱり元気というのはいいことだ。

「じゃあレン、支度するぞ」

「はい」

「って俺についてくるなあああ！！」

どうやらレンのこの癖はどうにも直らないものらしい。

昼休み。俺たちは一緒に食堂に行く。

「さ！司っ！行こっ！！」

「あんま引っ張るな…」

寧々が俺の腕を引っ張る。

元気になって本当に良かった。

「若様、食堂は混みます。急ぎましょう」

「そうだぞ司！混み合うとどうせ俺がハブにされるんだからな！急いでくれよ！」

レンとジョージも俺を急かす。

それにしても久しぶりだな。4人で食事も。

そんなこんなで俺たちは食堂に到着。そして…

「やっぱ混んでるな…」

「司のせいね」

「俺かよ」

どうやら別れなければいけないか…？

「司…！」

ジョージが泣きそうな顔で俺を見る。

しょうがない奴だな…

「俺はジョージと食べるから、一応別れようぜ」

「司ああああ…！！！」

ジョージが泣きながら俺に抱きついてくる。

「ああもう暑苦しい！！俺にはそんな趣味は無い！！」

俺は無理矢理ジョージを引き剥がした。生憎俺はそんな展開など望

んでない。

周りの生徒達も俺たちのことを奇妙な目で見つめていた。その中に最近感じる視線も含まれていることに俺は気がつかなかった。

「じゃ、またな」

俺はジョージを連れ、席を確保する。そして荷物を置く。

ちなみにこの荷物は席とり用の荷物であり、それ以外の用途は無い。

「じゃあ…行くぜ」

「お前またうどんかよ」

「悪いか？ うどんは和食の誇りだ」

「そうかいそうかい。お前も相変わらずだね。ま、俺は適当にカレー頼むわ」

俺とジョージは別々の列に並んで、待った。それにしても並ぶのってしんどいものだな…

「若様」

「おうレン」

後ろにレンが並んだ。どうやらレンもうどんを食べるらしい。

いや、さすがはレン。分かっていらっしやる。ちなみに今日のうどんはかき揚げうどんである。

日本人たるもの、お米は重要な食料だ。だが、忘れてはならない。

うどんも重要だ。」

米を食べるべきか、うどんを食べるべきか、それが問題だ。そんなどうでもいいことを考えているうちに、俺の番がやって来た。

「はい、何だい？」

「うどん大盛で」

「その後ろのお嬢ちゃんは？」

「私も同じく普通盛で」

ちなみにうどんとそばは同じ列だ。その隣はラーメンで、その隣は焼きそば、パスタ…と続く。

とにかくマンモス校なだけあって食堂は広い。だが、すぐに混んでしまう。そう、つまり、ウチの食堂は味がいいということだ。とにかく人気があるということだけが分かっていただければ幸いだ。

あれ？ 俺は誰に話してんだ？

「はい、かきあげうどん大盛。そしてこっちは普通盛ね」

俺は大盛の方を受け取り、レンは普通盛の方を受け取った。

「じゃ、俺はこっちだから」

「では」

俺はレンと別れ、ジョージと一緒に確保した席に着くことにする。だが…

「あ」

「…」

俺の席の向かいに座っていたのは、真理恵だった。
何で食堂でよく会うのだろう。

「…あなた、私に気でもあるの？」

「誤解だ。俺はお前がこの席に座っているなんて知らなかった」

「まあいいけど…またうどんを頼んでるのね」

「好きだからな」

俺は箸を割ってうどんを食べようとする。

「待って！」

「は？」

真理恵は「また」俺がうどんを食べようとするのを止める。
何だそれ。嫌がらせか？

「そのうどん、危険よ」

「はい？」

意味不明。彼女が何を言っているのか理解しかねる。

「というわけでそのうどんは私がもらうわ」

「はああああ?!」

真理恵ってそんなにうどんが好きなのか?

うどんが好きなのはいいことだが、勝手に人のものを奪うのはどうかと思うぞ。

「OK?」

「そんなわけねえだろ!」

「よっ! 司!」

そんなとき、ジョージが俺たちの元にやって来た。タイミングがいいのか悪いのか…

「ジョージ、お前もこいつに何とか言ってくれ」

「こいつ…?」

ジョージは真理恵のことを見つめる。

「なあ司。そのうどん、俺のカレーライスと交換しないか?」

「は?」

ジョージは何を言っているんだ?

俺のうどんと自分のカレーを交換したいだど?

「頼む司！ この通りだ！」

ジョージが手を合わせる。

「お前ってそんなにうどん好きだったっけ？」

俺はジョージに疑問を言う。いきなりそんなことを言うなんて、意味が分からない。

「というか最近うどんって流行っているのか？」

「お前ら、何考えてんだ？」

「お前、カレーは嫌いだったっけ？」

「そうじゃないけどさ。お前らはどうして俺にうどんを食わせないのか、と思ったただだよ」

「おかしいか？」

「…まあ別にいいや」

俺は空腹に負けてジョージと昼飯を交換した。

真理恵は俺たちの会話など聞いていない風に自分の食事に夢中だ。つうかさっきまでの話はもう終わりなのか。

「ごちそうさま」

真理恵はさっさとそんなことを言って席を立ち上がった。もう俺たちのことに興味が無いみたいだ。

「あ、ああ…」

俺はそんなことを言いながら真理恵を見る。

そういえば話したのは久しぶりな気がするな。

俺も急いでカレーライスを食べて、レンたちと合流することにする。

放課後になった。

普通なら俺はSFに参加するのだが、俺は今、急いではいない。
なので、帰ることにするが…

「今日行こうよ！」

「うーん…本当？」

「そうよ！ 当たるって有名なんだから！」

教室でクラスメートの女子達は何やら話していた。

当たるって何のことだ？

俺の頭には宝くじしか浮かんでこなかった。

「でも遠いでしょ？ 占い研究部」

占い研究部？

「まあね。東塔の頂上だしね」

東塔というのは校舎から少し離れた地にある離れの塔のことである。
特別授業でしか行くことがないので、少し東塔って何か考えてしま
った。

それにしてもそんなところになんかものがあるとは。俺の頭の中に
一人の女性が浮かんだ。占い師ドレミだ。彼女について俺はまだ何
にも知らない。でも俺のことはかなり知られているみたいだ。少し
だけ嫌な感じがする。

「なあ寧々。占い研究部って知ってるか？」

「へ？」

俺は一応その占い研究部っていう奴を手近な知り合いに聞いてみるとする。

「占い研究部だよ」

「司：知らなかったの？」

「は？」

「占い研究部のことよ。結構有名よ。ね、レン」

「はい。私も存じています。何やらよく当たると評判だそうです」

レンも知っていたのか？

「つうかそんなことを初めて知った、みたいな顔してる司に驚いたんだけど。ね、レン」

「い、いえ…そ、そんなことは…」

誤魔化しきれてないぞ、レン。

「司も一度行ってみれば」

寧々が勝ち誇ったような笑みを俺に向ける。
悪かったな、どうせ俺はそういうことには疎いよ。

「そうだな」

俺は寧々に悪態は突かずに、素直に返事をした。
だがとりあえず今日は：

「帰るか」

俺の言葉にレンと寧々が頷いた。

「はあゝ」

帰宅後、俺は夕食を終え、お風呂に入っていた。

今日はちよつと疲れたな：レンの可愛がりが。

強くなるとはいえ、これが続けていると、そのうち体を壊しそうだ。

「はあゝ」

ガラガラ

それにしてもレンはあれだ。何というか未だに俺を異性だと思っていないらしい。

「あ、若様。お背中をお流ししましょうか？」

「ああ…」

そうなんだよね、未だに俺が裸でも平然なんだから…
ん？

ゴシゴシ

「若様、たくましくなれましたね」

「つてお前が何でここにいいいい？！」

俺の背中を洗っている一糸纏わぬ姿のレンがそこにいた。

「お背中お流しいたしましょうか？　という質問に若様が肯定したからですが」

「うえ?!」

そんな質問されたっけか？

俺はレンの身体を見ながら考え…

「って早くお風呂から出てってくれ〜〜!! それかまたはタオルを巻いてくれ〜〜!!」

「?」

「いいから!!」

俺は目を瞑りながらレンを外に出した。

やべえ…思いつき見ちゃったよ。レンの身体を…

やばい…なんか胸がドキドキしてきた…動悸か？　まさかのぼせそうなのか？

「はあ…はあ…」

おかしいな…なんか身体が熱いぞ…

ガラガラ

「お待たせしました若様」

そんなとき、バスタオルを巻いたレンが風呂に入ってきた。

「あ、ああ…」

どうしちゃったんだ、俺？

「…立派になりましたね」

「下半身見ながら言わないでくれ〜〜〜〜！！」

俺の下半身は元気だった。

「はあ…」

動悸は治まってきたようだ。

原因はやっぱりレンの裸か？

…やだなあ…まさか俺ってレンで興奮したんじゃないだろうな？

俺はレンを異性として見ているけど、欲情の対象には絶対にしたことがないのに…

「あの、若様、大丈夫ですか？」

「あ、ああ…心配しないでくれ…」

「司」

そのとき、俺の部屋に父親が入ってきた。

「はい？」

「何かお前に客だ。外国人みたいだぞ」

「外国人？」

そんな知り合いつて俺にいたか？

「道場が見たいって言っていたから道場で待たせてるぞ」

「つうかこんな遅い時間の訪問客を家に入れたのかよ!!」

「司ああああ!!」

「ひいっ!!」

突然父親が俺に叫ぶものだから俺はびっくりして震え上がってしまった。

俺って何か悪いこと言ったか？

「これはチャンスだ!道場が見たいって言ってたということは…剣道に興味がある!それはつまり、我が道場に入ってくれるかもしれない!!」

「…」

そういう魂胆なんですな。

まあ別に悪いとは言っていないけど。

「じゃあ一応俺とレンで行ってきます」

「おう。無礼な態度を取ってカモを逃がすんじゃないぞ」

「…」

何て悪役のセリフなんだ、今の発言は。
俺とレンは道場まで行き、道場に入る。

「どうも…」

「こんにちワ。与那国司サンですネ？」

そこには少し訛った日本語をしゃべる外国人がいた。

「え？ 俺の名前をどうして…」

「学校が同じですよ」

「え?!」

そういえばこの人、どこかで見たような気が…

「まあ覚えていないのも無理はありません。ボクらは会話らしい会話は一度も交わしていませんカラ」

「じゃあどうして…」

「ボクはケンドーに興味があるんデス」

「へえ…」

日本の武術に興味がある外国人か…

「ボクの名前はアーヴィン・シュナイダー。ドイツの騎士の家に生まれました。君と同じ高校2年生で、SF参加者デス」

「な…」

「?!」

俺とレンの顔がその言葉に強張った。
この男、何をしにここまで来たのだろうか…

第21話 うどん争奪戦と突然の訪問者（後書き）

次回、スピードとスピードのぶつかり合い！

「西洋の神速?! 恐るべし最速の剣！」
と、いうわけできょうならく。

第22話 西洋の神速?! 恐るべし最速の剣!! (前書き)

何と2話目更新です!!

勢いだけでどこまでいけるのか…

第22話 西洋の神速?! 恐るべし最速の剣!!

「ボクの名前はアーヴィン・シュナイダー。ドイツの騎士の家に生まれましタ。君と同じ高校2年生で、SF参加者デス」

「な…」

「?!」

俺とレンの顔がその言葉に強張った。

SFは学校でしか戦えないと言うルールだ。

だからここで勝負を挑むことはないだろう…

だが、真意が読めない。

「貴方達がSF参加者だと言うことは知っています」

俺とレンがさらに警戒をする。

何しに来たんだ?

「というか参加者はみんな知っていると思います」

「は？」

「剣道部でもないのに木刀を学校に持って来ている時点で怪しいデス」

「う…」

そういえば俺たちは何でそんなことに気がつかなかったんだ?

結構アホじゃないですか？

「そ、それであなただけは何をしに？」

少し動揺しながらレンは質問をした。

「貴方達と手を組みたいのデス」

「俺たちと…？」

何故俺たちと組みたいのか、という疑問はすぐに浮かんだ。
しかし、レンが先にその質問をした。

「何故ですか？」

「貴方達はまだ正常だからです」

「正常？」

何だそれは。異常者がSFに参加していると言うのか？というかが異常で何が正常なんだ？

俺の疑問に丁寧な言葉で話すアーヴィン・シュナイダー。

「ハイ。誰だか知りませんが、SFを裏で支配しかけてる人間がいマス」

「え？佐渡じゃなくて？」

佐渡の他にそんな人間がいるのか？
確かに、俺はまだSF参加者を半分も知らない。だからまだSFの

全貌を俺は把握できないので、その疑問は少しおかしいかもしれない。

「そうデスネ…多分そのときから水面下でコトを運んでいタのかもしれないマセン…」

「そうか…」

「若様、彼の話を利用するのですか?!」

「え…いや…」

レンに怒られてしまった。まあ確かに証拠もない話ではある。でもなあ…

「いえ、当然の疑問でショウ。とりあえず、ボクのエントリーナンバーは15番です。それと、今まで獲ったバッジも見せマス」

アーヴィン・シュナイダーは懷からバッジを何枚か取り出した。

合計で7枚。彼のバッジは3枚残っているので、どうやら獲ったバッジは計4枚。俺より多い…

そして並べた4枚のバッジ。右から8、18、23、24であった。その中で気になったのは8番のバッジ。なぜならそれは…寧々のバッジだからだ。

寧々にSFのことをあまり訊きたくないので、未だに俺は寧々のことで苦戦をしている。

「!」

レンが4枚のバッジを見て息を呑んだ。理由は明白だろう。

「な、なあ…この4枚のバッジをそれぞれ着けていた相手のことを教えてくれるか？」

「？ イイですよ」

彼は少し首を捻りつつも、俺の言ったことを了承してくれた。

「18は最近、拳法部の男から獲りマシた」

どうやら俺と同じ相手と戦ったらしい。

「8と24と23はうろろうしていた男子生徒から奪いました…多分彼らは正規の参加者ではナイでしょう…」

「そ、そうか…」

彼の発言にも証拠は無い。だが…どうすればいい…？

「疑う気持ちも分かりマス…とりあえず、ボクのバッジ2枚と、そのバッジを全て差し上げマス」

「ええ?!」

「ボクは勝つためにSFに参加したんではありません…ただ…強くなりたい…」

彼は強くなる、というその気持ちの部分だけは妙に饒舌であり、本心が垣間見えた。

結局彼も俺と同じで、勝つために参加しているわけではない。だが、

勝たなくては強くなれない：そういうことなのだろう。

「分かった。お前の誠意を証明する一つの方法がある」

「え？」

「?!」

レンが俺を驚愕した表情で見る。

「大丈夫。俺と剣の勝負をしよう。剣は：嘘をつけないからな」

「ナルホド：それかサムライソウルという奴ですネ！」

「いや、ちょっと違うけど…」

俺は適当に一つ木刀を選んだ。そして彼は自らの荷物からレイピアを取り出した。

「レイピアか…」

レイピアは西洋の細剣であり、突き専用の剣である。

主に相手の鎧を貫通させ、相手を殺すのがレイピアの攻撃方法である。

つまり、突きだけなら他の何よりも優れている剣であることは確かである。

「レン、審判を頼む」

「はい」

レンは俺と彼の真ん中に立った。

「ルールは相手の急所を先に当てた方が勝ちだ。あ、もちろん寸止め」

「分かりました」

俺たちは共に一礼して向かい合って構えた。蹲踞は剣道ではないのでしないことにする。

「準備いいですか？」

「ああ」

「Yes！」

俺はまっすぐ相手を見つめる。そして彼も俺をまっすぐ見つめる。俺の目に一転の曇りもない瞳が映った。もう信じられるが、折角なので剣を交じわしたい。

「初め！」

「イヤァ!!！」

「Ohh!!！」

俺と彼はスタート直後から激しい打ち合いを演じた。

俺は縦薙ぎ、横薙ぎ、袈裟、突きなどを不規則に連続攻撃をした。対するアーヴィン・シュナイダーはひたすら突き攻撃のみ。

だが、これが中々に厄介だ。

突き一本のみだと防ぎやすそうに見えるが、実際はそうではない。突きのスピードが半端なく速いのもそうだが、それよりも重大なことがあった。

レイピアは細い：つまり、突き中に揺れるのだ、剣筋が。

ぶれた剣筋による速い突きは防ぎ難い。目と足に全てを集中させなくてはダメなのだ。

おかげで俺は攻撃が疎かになってしまい、中々勝つことが出来ない。

「くっ…」

少し息が上がってきた。

ぶれた剣筋を捉えるのに必要な動体視力と回避に必要な敏捷性がそれなりにあって助かった。

だが、このままでは俺の負けが目に見える。だが、性質の悪いことに、この剣筋のブレはわずかなもので、当事者たち以外は気づきにくい。つまり、レンには俺がどうして攻撃に転じられないのかと想っているかもしれない。少し考えれば分かることかもしれないが、生憎レンはお世辞にも頭は良くない。

「どうすれば…」

突き攻撃というのは、全ての攻撃の中で一番リーチの長い攻撃。

つまり、離れれば相手が有利になる可能性が高い。

だが、近づいたからといってこっちが有利になるとは思えない。ここはアレしかない。

「ヤリマスネ…」

「お前もな…」

相手の息も上がってきた。今がチャンスかもしれない。
俺は隙を突いて距離を大きく引き離れた。

「?!」

突然のことに相手は突きの追い討ちをしてこなかった。
助かった…

「悪い。一発で決めさせてもらう」

「?」

俺は態勢を低くして構えをとった。

「なるほど…拔刀術ですか。日本の全ての剣術の中で最も速いと言われている拔刀術ですか…」

どうやら日本の剣道についてそれなりに勉強をしているらしい。

「イイでショウ。受けて立ちまショウ！ 西洋剣でもっとも速い攻撃を繰り出す剣、レイピアで!!」

「日本の神速対西洋の神速か…面白いな…」

俺はこの戦いのおもしろさを実感した。
こんなに楽しい勝負になるとは思わなかった。
だが、そんな時間もこれで終わりだろう。速いのは俺か…彼か…

「勝負!!」

俺の狙いはただ一つ、突きを繰り出させる前に相手の首筋に木刀を寸止めさせる。

だがそう上手くいくか？ いや、そのためには…

「「先手必勝!!」」

俺と同時に相手も前に出た。考えていることは同じらしい。

後はスピードの勝負!

俺の首めがけてやって来る一筋の光。何十にもぶれて向かってくる光。

俺はそれをそれを横目で見て越えた。しかし…

「曲がった?!」

その光は俺の心臓めがけて向きを急速に変えてきた。もう振り返ってられない。狙うは相手の首筋のみ!

「「ハッ!!」」

俺と彼が同時に叫んで動きを止めた。

「…」

「…」

俺の木刀は相手の首筋を斬る一歩手前の状態。

相手のレイピアは俺の心臓を貫く一歩手前の状態。

判定は審判のレンに委ねられることになる。

「審判!!」

「ジャッジプリーズ!!」

「はっ!!」

レンはキョトンとしていたが、すぐに眼を覚ました。
彼女は、この戦いに夢中になってしまったらしい。

「えーと…正直、私の目では同時にしか見えませんでした…」

レンが項垂れる。自分がきちんと判定できなくて悔しいのだろう。
だが、レンほどの者が分からなかったとは、本当に互角だったのかもしれない。

「わずかに司の方が速かったな」

「え？」

そんなとき、道場の入り口から聞き覚えのある声が聞こえた。

「今の勝負、誠に素晴らしいものであった」

「父上!!」

どうやら観戦していたのは与那国道場師範である俺の父親であった。

「本当に僅かな差であった。実際の戦いであれば引き分けた。だが、勝負は司の勝ちだ」

「残念デス…でも、いいタタカイが出来ました」

「そうだな。西洋の神速も大したものだよ。普通の突きでこのスピードとはね…」

俺は彼と握手をした。

剣で語り合うというのはこういうことを言うのだろう。

彼の剣筋はぶれていたが、真っ直ぐな思いは俺に伝わった。

「お前の言葉を信じる。改めて自己紹介するよ。俺は与那国司。与那国道場師範代で、エントリーナンバーは17番だ」

「ボクはドイツからの留学生、アーヴィン・シュナイダー。アーヴィンとキガルに呼んでくれればいいよ」

「ああ。分かったアーヴィン。それで、SFのことを詳しく話してくれ」

俺とレンとアーヴィンは俺の部屋に行ってこれからのことを話し合うことにした。

「さて、話しましょう」

アーヴィンの言葉に俺とレンは頷いた。
これからどんな言葉が彼の口から出るのだろうか。

―某所―

校内で何やら戦っている音がする。

しかし、男装の麗人はただ実験室に籠って机の上のものを見ながら意味深な笑みを浮かべているだけだった。

「フッフ…始まった…」

「入ってよろしいでしょうか？ 南鳥さん」

みなもと

「ああ」

そんなとき、実験室に一人の女性が入ってきた。身長は高い方で、薙刀を持っているのが印象的だ。

「どうしたんだい？」

「はい。いつもの「アレ」を下さい」

「アレね…」

南鳥と呼ばれた麗人は懷から薬瓶を取り出した。

「これを飲めば大丈夫さ」

「ありがとうございます」

女性は無機質な声で薬瓶を受け取って飲み始めた。

「フッフ…風紀委員長がもうボクの虜か…」

「南鳥さんは何を見ていたのですか？」

女性が麗人の机の上にあるものを見る。
どうやら何かの写真のようだ。

「これは…」

「ボクの愛しい彼さ。与那国司。ああ…早く純粋なその瞳をボクの色に染めたいよお…ボクの虜にしたいよお…ああ…」

麗人の瞳は狂気の色を帯びていた。
あふれ出るのは歪んでいる愛情のみ。

「彼は気がついていないだろうね。仲間に裏切り者がいることに…。
フフフ…そしてボクの目の前で絶望に歪んだ顔をするんだよお!!
ああ! 楽しみでしょうがない!!」

狂気は止まない。
戦いの鐘も止むことは無い。
そうして戦いは続いていく…

第22話 西洋の神速?! 恐るべし最速の剣!! (後書き)

次回から激闘の開始です。

展開が早くなる気がします。

今回は「本格的活動開始! 立ちほだかるのは…」

悲しき再会。敵同士になった二人…

第23話 本格的な活動開始！立ちは大かったのは…（前書き）

展開が速くなります。

第23話 本格的な活動開始！立ちほだったのは…

眠い。

欠伸が出そうだ。

全ては昨日のせいだ。

夜中にマジバトルをした後にSFの作戦会議…眠くもなるもんだ。いくら明日から学校が休みでも、羽目を外しすぎたかもしれない。

ああ…黒板の文字が霞んで…

そんなとき、俺の額めがけて白いものが飛んできた。

チョークか？

俺はそれを平然とキャッチして握りつぶした。

「な…?!」

教師が驚いた顔をしているが、俺は無視。

アーヴィンの突きの方がよっぽど速く鋭かった。

俺は眠りの態勢に入ってしまった。

「な、なあ…あいつ、今何やった？」

「飛んできたチョークを片手でキャッチして、二本の指で粉々にしなかったか？」

何やら教室内が騒がしいが、それは無視しようと思っただけ。俺は思った。気にしすぎても仕方がない。

「若様」

「…」

後ろからツンツン背中を突つかれた。
そういえば後ろの席って誰だっけ？

…レンか？

「若様」

「…」

しつこいな。一体何の用なんだ？

俺はゆっくりと体を起こして後ろを振り返った。

「何？」

「若様。上」

「上？」

俺の頭上にバケツがあつた。

教師が俺の頭上にバケツをかざしている。

「…何しているんですか？」

「お前を起こそうとしている」

「ま、まずは落ち着きませんか？　そういうことをしても何の解決にもなりませんよ？」

やることが大体読めたので、俺は教師を宥めることにした。

「今はそんなものより、お前に水をかける方が重要だ」

「な、なんて教師だ…!!」

「貴様こそなんて生徒だああああ!!」

「う、うわゝゝゝ!!」

俺は頭上から大量の水を浴びせられてしまった。

一つだけ言おう。今は10月だ。

つまり、寒い。

「冷たっ!! メッチャ冷たっ!!」

俺は濡らされた教科書やノートなどを全く気にせずに、自分の体を抱いた。

まずは体温を上げなければならない…

「今日はこれで終了!」

「ひ、ひでえ…」

授業中に寝てしまったとはいえ、この仕打ちは無いんじゃないでしょうか…。

俺はゆっくりとため息を吐いた。

“裏でSFを操っている奴がいる”

アーヴィンのこの言葉は俺の心に深く入り込んだ。

佐渡を命がけで倒したにもかかわらず、それはまだ戦いの幕開けに過ぎなかったらしい。

アーヴィンによれば、その“裏でSFを操っている奴”はSF参加者を率いているらしい。

佐渡が率いていたのは一般生徒なので、佐渡より強力な奴となる。

しかもすでに3人ほどそいつの下で働いているらしい。本人の意志があるかどうかは分からないが。

「それを裏付ける証拠は？」

レンがアーヴィンに尋ねた。

「ボクが18番の男に勝った後、彼の口から虫が這い出てきたのデ

ス」

「虫?!」

気持ち悪いな…そんなものを体内に入れて何してるんだ？

「おそらく、その虫で参加者を操作、監視などをしているのでシヨウ」

「そんな奴が…」

SFは一筋縄でいかないような連中が揃っていると聞いていたが…これは完全にプロだ。

戦争を知っているプロだ。

「貴方達二人は何かおかしいところが見つかりませんか、安心して尋ねられたのデス」

「やっぱりそいつらはおかしいのか？」

「ハイ。自分の意志が希薄に見えマス」

「そんなこと分かるのか？」

「ハイ」

「…」

このアーヴィンも只者じゃないな…。

「分かった。とりあえず今はその情報を信じて、行動しよう。いいか？」

俺はレンに訊くと、レンは大きく頷いた。

どうやら作戦の方針は決まったようだ。

俺たちはまずその黒幕の突き止めに優先することにしたのだった。そうして今に至るわけである。

「早速、情報集めを開始しよう」

俺はレンと共に教室に残り、情報収集を開始する。

しかし、その前に俺は確認したいことがある。

「歯舞、ちょっといいか？」

俺はクラスメートの歯舞武を呼んだ。

「え？どうしたんだい？」

歯舞は俺に呼ばれてやってきた。
結構平然としているのだが：

「お前に確認したいことがあるんだよ」

「え？まさか：」

心当たりがあるのか、場所を変えようと提案してくる歯舞。

「SFのことだったら人気のないところのほうがいいんじゃない？」

「いや：お前に確認するだけだ」

俺の真剣な目を見て、歯舞も真剣になった。

「お前、俺美寧々からバッジを獲ったか？」

「俺美ってウチのクラスの？」

「ああ」

歯舞は少し考える素振りをする。

「うーん…記憶にないなあ…それに、僕はもう脱落したからSFとは無関係だし」

「へ？」

俺は自分の耳を疑った。

脱落した？ 齒舞が？

「僕はもうバッジを全て獲られてしまったんだ……それに、僕じゃ戦いもろくにこなせないしね」

だが、エアガンで齒舞はレンと戦ったはずだ。
どういう矛盾だ？

レンが虚偽の発言を？ それとも齒舞が？
というか言うまでもなく後者だよな…

「お前はレンと戦ったはずだ。その後にはやられたということか？」

「僕が西表さんと…？」

何故か齒舞は考える素振りを見せた。

「ああ…そういうことね…彼女がそう言うならそうなんじゃないかな？」

「何だそれ」

齒舞は妙に含みのある言い方をする。
何が言いたいのかさっぱり分からない。

「とにかく僕は帰るよ。戦いに巻き込まれたくないからね」

「本当にお前は脱落したのか…？」

「うん。僕はもう戦わない」

齒舞はそう言って教室から出て行った。

アイツの言っていることが俺には理解できない。

「レン…」

「怪しいですね。ですが…私には彼の意図が分かりかねます」

「そうだな」

俺はとりあえずレンと学校を見て回ることにした。

俺とレンは、アーヴィンと合流し、また作戦会議をすることにした。とりあえず、今は慎重に物事を運ぶべきだと、俺は判断した。

「目下の敵はSFを裏で仕切っている奴でいいんだよね？」

「そうですね。ボクの見立てでは相手は集団デス。ただ、仕切っているのは一人だと思いマス」

「理由は？」

俺は訳を求めた。

「相手を操れる能力ならば、敵はもう結構な参加者を仲間にしていてショウ。それに、リーダーが複数だとトーセイをとりにくいデスからネ」

「なるほど」

つまり、敵に遭遇する確率は結構高いな。
慎重に動いて正解だな。

「で、今日から残って調査か？」

「そうですね…出来るだけ早めに動いた方がいいと思います」

俺はレンの賛同で腹を決めた。

「じゃあ俺とアーヴィンで行動する」

戦力はレン＞俺＝アーヴィンだと思うので、妥当なグループ分けだ
と思う。

だが、レンとしては自分が俺と行動しないことに不満らしい。
本当に過保護な奴だ：

「そうと決まればさっそく行くぞ」

俺は立ち上がり、教室の外に出ることにする。もちろんアーヴィン
とともに。

「…分かりました。お気をつけて」

レンは廊下のところで俺と別れた。

「…ぐ…!!」

そしてレンは誰もいない廊下で左胸を押さえる。

苦しみながらも彼女は先に進んでいったのだった：

アーヴィンと二人、俺は廊下を歩いていた。
今考えてみれば、俺達二人になったのは今回が初めてな気がする。
まあだから何なんだと言われればそれまでなのだが……
周りに敵の気配がないことを確認してから俺はアーヴィンに質問をした。

「なあ、お前ってどうして日本にやってきたんだ？」

アーヴィンはちらりとこっちを見た後、上を見る。

そして、呟くように言い始めた。

「ボクは強さを得るために日本にきた……。Europe全土を渡り歩いてタンレンし、経験を積むためにこのジャパンにやってきたんです……なので、このSFはボクにとってワタリニフネだったのデス」

渡りに船……日本語の勉強も頑張ったんだな。

俺はアーヴィンを少し羨んだ。何というか、俺より前に進み、俺が目指すものに俺より近い感じがしたからだ。

「騎士は気高く、強くなければならない……ボクの家は昔よりも没落してしまった……ダカラ！　ボクが必ず復興させるのデス……！　そしてまた世界に名をとどろかすような家にする……そう、Grandp

aに約束したから…」

アーヴィンの眼は真剣そのものだ。SF参加の覚悟がすごい。真理恵の言った通りだ…真剣参加がこんなに多いなんて…

俺もこれが終わったら海外修行でもしようかな…

最近は修行も嫌いじゃないし、やるなら早い方がいいだろう。そう思ってしまった…っと、まずはSFだ。

目の前のことに集中しないと、足元を掬われる。

「そうか…」

俺は相槌を打ち、SFに集中する。

「…見られてイル…そんな気が…」

「？」

アーヴィンは突然そんな言葉を呟いた。

「見られてる？」

「…いや…気のせいかもシレマセン」

「…」

気のせいじゃなかったら…やばいな。

「一応様子見しよう」

「分かりましタ」

俺とアーヴィンは一旦立ち止まり、周囲に警戒網を張る。

残念だが、俺は気配を察知できない。

でも頑張って察知してみる。

…なにも感じるができない。

「…何か感じるか？」

「…気配というよりは嫌な感じデス」

「嫌な感じ？」

「なんだかむな騒ぎが…!!」

「!!」

アーヴィンが言葉を言い終えると同時に、俺達二人は眼を見開く。
同時に感じたのだ、気配を。

「…アーヴィン、敵か？」

「友好的な感じはしませんネ…」

「前から一人、後ろから一人の計二人だな」

俺とアーヴィンは背中合わせになり、背後からの奇襲を受けないようにする。

すでに外は暗いので、姿は確認できないが、足音と気配は確実にこちらに向かっていった。

挟み撃ちなので逃げることは考えない方がいい。つまり、交戦は避

けられない…!!

「へっ、アイツの言うとおりだったな」

そのとき、俺の後ろ…つまり、アーヴィンにとっては前から声が聞こえた。

ずいぶん野太い声なので、男だろう。

ちなみに聞き覚えはない。

「…」

しかし、俺の前にいる奴は声を出さずにゆっくりと近づいてくる。
…嫌な感じだ。いや、なんだか胸騒ぎがする。アーヴィンと同じ気持ちで俺は味わっているみたいだ。

俺は眼を凝らしてみるも、未だに姿は捉えきれず。

「本当ならこんな形で会いたくなかった…」

「?!」

聞き覚えのある声に俺は驚愕する。

どうして…?

どうして、いるんだ…?

「だがこれも俺たちの運命…」

なぜあなたが俺の前に立ちふさがるんですか?

なぜあなたが俺の前で剣を構えているんですか?

「与那国、試合だ。時間無制限のSFルールでな」

どうして…？
種貸主将…

―某所―

巖島真理恵は実験をしていた。
お世辞にも褒められるようなことではない。
なぜなら人体実験だからだ。

「…この虫は私の能力をフルに使ってやっと抑えられるくらいなの
…？」

目の前には男子生徒が横たわっている。

とある日、彼女に声を掛けてきたので、実験素体として使うことにしたのだ。

おかげで汚らしい虫への対抗策を考えられている。

ただ問題なのは、目の前の男子生徒は彼の友達であることだ。

最初は知らずに彼を自分の実験体にしたのだが、今は多少後悔している。

だが、その甲斐はあった。うどんから彼の体に入った虫のことを調べることができる。

「…お母さまのため、必ず勝たなくちゃ…!!」

彼女は夜の曇天を見上げる。

その眼には強い光が宿っていた…

第23話 本格的な活動開始！立ちは大かったのは…（後書き）

駆け足みたいな展開になるかもしれません。

第24話 激しいタッグマッチ! 剣士たちの戦い! (前書き)

本格的にバトル小説になりました…

男度100%です。

第24話 激しいタッグマッチ！剣士たちの戦い！

俺とアーヴィンは一旦立ち止まり、周囲に警戒網を張る。
残念だが、俺は気配を察知できない。
でも頑張って察知してみる。
…なにも感じる事ができない。

「…何か感じるか？」

「…気配というよりは嫌な感じデス」

「嫌な感じ？」

「なんだかむな騒ぎが…!!」

「!!」

アーヴィンが言葉を言い終えると同時に、俺達二人は眼を見開く。
同時に感じたのだ、気配を。

「…アーヴィン、敵か？」

「友好的な感じはしませんネ…」

「前から一人、後ろから一人の計二人だな」

俺とアーヴィンは背中合わせになり、背後からの奇襲を受けないようにする。

すでに外は暗いので、姿は確認できないが、足音と気配は確実にこ

ちらに向かっていた。

挟み撃ちなので逃げることは考えない方がいい。つまり、交戦は避けられない…!!

「へっ、アイツの言うとおりだったな」

そのとき、俺の後ろ…つまり、アーヴィンにとっては前から声が聞こえた。

ずいぶん野太い声なので、男だろう。

ちなみに聞き覚えはない。

「…」

しかし、俺の前にいる奴は声を出さずにゆっくりと近づいてくる。

…嫌な感じだ。いや、なんだか胸騒ぎがする。アーヴィンと同じ気持ちで俺は味わっているみたいだ。

俺は眼を凝らしてみるも、未だに姿は捉えきれず。

「本当ならこんな形で会いたくなかった…」

「?!」

聞き覚えのある声に俺は驚愕する。

どうして…?

どうして、いるんだ…?

「だがこれも俺たちの運命…」

なぜあなたが俺の前に立ちふさがるんですか?

なぜあなたが俺の前で剣を構えているんですか?

「与那国、試合だ。時間無制限のSFルールでな」

どうして…？

種貸主将…

俺は種貸主将に話しかけた。

「どうして先輩が?!」

「SF参加者だから。理由にそれ以外求められまい」

種貸主将はいつものおちゃらけた態度など全くなく、一人の剣士の顔になっていた。

俺達剣士に言葉は必要ない…そういうことだろうか？
だが…

「俺はあなたと戦う理由が分からない!」

「理由? SF参加者同士が戦うことの何がおかしい? 理由なんているのか? それともなんだ。お前は知り合いが相手だと戦えないとでも言うのか? それこそ理由が不明だな」

「でも…!!」

俺は声を大きくしてしまった。かなり興奮しているらしい。
なのに、種貸主将の声はいつもより格段に冷たい。

「俺達に必要なのは剣だけだ。さあ、やり合おうじゃないか」

「く…」

「覚悟を決めて下サイ、司クン！」

「…そうだな」

アーヴィンに背中を押され、俺は覚悟を決める。
剣を構え、俺は種貸先輩と対峙する。

「それでいい。それでこそ倒し甲斐がある」

種貸先輩もそれに答えるように構える。

「おっと、そういえば名乗って無かったな」

アーヴィンの相手である大男がしゃべり始める。
武器っぽいのは大きな鉄球だ。彼はそれを軽々と持ち上げている。
見るからに分かりやすいパワータイプだ。

「俺様の名は大島剛。おおしまうよし 3年生だ」

言い終わると同時に鉄球をドスンと地面に落とした。
それだけで学校全体が揺れる…そんな気がした。

「それじゃあ…始めるか」

俺達の激戦が今、始った。

俺はまずしつかり種貸先輩から間合いを取る。

武器は同じく木刀なので、武器の優劣、相性関係など関係ない。ただ、俺もよく知っている通り、彼の突きは殺人技術に昇華できるくらいに鋭い。

下手に近づくと一発でゲームオーバーになりかねない。

しかし、こっちにも神速がある。どちらが速いかわからないが、結構な賭けになる。

俺の額を汗が横切る。なぜか辺り一面灼熱の暑さみたいを感じる。

「どうした？ 来ないのか？」

種貸先輩が俺を挑発する。

だが、その手には乗らない。罠なのが見え見えだ。

「仕方ない。俺からいくか」

「?!」

種貸先輩は間合いの外から突きを仕掛けてきた。しかし、間合いの外であるので、俺は難なく横に避けられた。

「甘い!!」

「?!」

しかし、間髪いれず横薙ぎを俺に放ってきた。突きから胴への連続技だ。ここらへんは剣道らしい。

「くっ…!!」

避けるのは不可能であったため、俺は自分の木刀でそれを抑える。それにしても何という威力だろう。腕がしびれるくらいにその攻撃は鋭かった。

「これくらいは防いでもらわないと。面白くない」

種貸先輩は嬉しそうにニヤリと笑った。
今分かった。この人も、バトルジャンキー戦闘狂だ。

「そちらが仕掛けないならこちらからいくまでだ!!」

そしてそのまま混戦に突入した。

俺達は近距離で木刀で打ち合った。多少の擦り傷は共に負っていたが、致命傷は受けず、互角の戦いが続いていた。

「剣道ならば俺の方に分があるが、さすがは与那国道場の実戦形式

剣道だ。ここまでやるとは」

「種貸先輩こそすごいですよ。実戦でもこんなに戦えるなんて」

「見くびるなよ」

俺達は時に話しながらも、眼は真剣そのものであった。

後ろで戦っているであろうアーヴィンたちのことなど気にならないくらいに俺達は集中していた。

ただ、まだお互いに手は見せていない。

「種貸先輩。そろそろ切り札を出したらどうですか？ このままじゃジリ貧ですよ？」

「お前こそ与那国流奥義でも出したらどうだ？ このままやり合っても勝てまい」

俺たちは互いにけん制しながら、相手の出方をうかがった。

よく知っている相手だからこそ、慎重になってしまうのかもしれない。

「…ひとつ訊いてもいいですか？」

「何だ？」

俺はある程度間合いを取った後、気になったことを訊いた。

「先輩は誰かに操られていますよね？ でも…」

「そうだな」

種貸先輩はなぜか簡単に自分の状況を俺に話した。

「だが、お前と戦っているのは俺の意志だ。たとえば操られてなくても俺はお前と戦った」

「…先輩らしいですね」

俺には先輩が操られているようには見えなかった。

もうひとりの大男は目がイっていたので、すぐに分かったが、先輩の場合はそんな感じがなかった。

操られてもしっかりと自分を保っている。なんて強い人だろう、そう思った。

だからみんな彼に憧れる。俺もその一人。

「じゃあ俺も質問するぞ。こういう風に話している間に俺が攻撃したらどうする?！」

そう言って先輩は隙だらけの俺に突きを放つ。
だが。

「それは予測しているので避けます!」

「ちっ!!」

俺は攻撃を完ぺきに見切り、避けることに成功する。

彼は恐ろしいくらいに手を抜かない男だ。

たとえば相手が格下でも全力で戦う。それは常に油断はしないということの裏返しでもある。

だから彼には隙がない。そここのところも含めて厄介な人だ。

「先輩のことはよく知ってますから。何するかは分かります」

「ふっ、しょうがないな。俺のとおきを見せてやるか。だが、この突きをまともに食らうと死ぬかもしれない。急所は外して撃つてやるが、お前も全力で来い！！」

「…分かりました」

俺は受けて立つことにした。神速で。

一方、アーヴィンも大島という大男と激戦を繰り広げていた。大島は本当に高校生なのか？　と思うくらいの大男だった。身長は2メートル近く、アメフト選手みたいな体格をしており、か

なり頑丈そうであった。

ただ、種貸とは違い、目は正気ではないため、心はそこまで強くないとアーヴィンは分析していた。

だが、心の強さだけで勝負が決まるほどSFは甘くないことも理解していた。

「ヘッヘッヘ：粉々にしてやるぜっ！！」

「ク…」

実際、この大島という男の実力は予想以上にあり、あの巨大な鉄球に当たれば確かに粉々になるだろう。

アーヴィンは軽いフットワークでそれをかわし続けた。

そう、相手の攻撃が大ぶりなのがせめてもの救いだ。ただ迂闊に懷に飛び込むことは出来ない。

アーヴィンは慎重に相手の戦い方、癖、武器の射程範囲などを分析し、そのうえで一発で勝負を決めにかかろうとしていた。

この戦いは自分一人の戦いではない。仲間である司に背後を任されている戦いだ。

つまり、自分が敗れたら共倒れだ。それだけは何としても避けたかった。

だから、今のアーヴィンはいつもよりも集中力が高く、動きが神懸かってていた。

「ボクは負けるわけにはいかない…！！　司クンに背後を任されているんだ！！」

「こっちだって同じさっ！！　最後のバッジなのだからな！！」

大島もアーヴィンも胸のバッジは一つだけ。つまり、この戦いの敗

者はSFから消えることを意味する。

まあアーヴィンの場合は覚悟のために司に自分のバッジを預けているだけなのだ。

「アナタの攻撃は確かに強い。当たれば、確実に骨をクダクでしよう……ですが、当たれば、の話です!!」

「何?!」

攻撃を完全に見切ったアーヴィンは、大島の見せたわずかな隙を見逃さなかった。

アーヴィンの突きは神速に匹敵するスピード。大男の大島にかわせる筈もなく。

「これで決めます!!」

「グッ……!!」

アーヴィンはすさまじいスピードで鳩尾に強烈な突きを入れた。

これを受ければ気絶は間違いなし……つまり、自分の勝利が決まる、そう思っていた。

だが……

「……何だ? そのヘナチョコ攻撃は?」

「Oh?!」

アーヴィンは平然としている大島を驚愕して見つめた。

それもそのはず、鳩尾を突いたはずなのだが、アーヴィンの右手は分厚い鉄板を突いたみたいな感触を感じていた。

「俺様の肉体にそんな細剣で傷を付けられると思っていたか？」

「S h i t…」

「隙だらけだっ！！」

アーヴィンの硬直を見逃さなかった大島はアーヴィンがレイピアを持っている腕…右腕を鉄球で狙った。

「あぐっ…！！」

アーヴィンは完全に硬直していたために、右腕にまともに鉄球を受けてしまった。

その際、骨が潰れるような、砕けるような、そんな嫌な音が耳に響いた。

確かに、一発で粉々であった。

「ガッハッハ！！ 利き腕を失った貴様など怖くもないわ！！」

大島はアーヴィンを見ながら大笑いをする。

確かにこの状況では誰もがこう思う。大島の方が圧倒的に有利だと。

「確かにこのままではボクの負けですね…一つ訊きましょう…。あなたのボスは誰のですか？」

「へっ。本来なら言っちゃいけないんだがな。虫の息の貴様に冥土の土産として教えてやろう。ウチのボスは南…あぐっ！！ 悪かった！ 悪かったって！！」

大島は途中で頭を押さえて苦しみ始めた。

どうやら言動を制限されているらしい。

それでもアーヴィンは聞き逃さなかった。黒幕の名前は「南」から始まる誰からしい。

「ま、悪いが教えられないんだな。土産もなしだが、これで止めだ」

「それはどうでショウ？」

アーヴィンは左手でレイピアを構える。

「おいおい…無駄な足掻きはよせよ」

しかし、アーヴィンはニヤリと笑う。

「随分と頭の回らない人なのデスネ」

「あゝ？」

どうやらアーヴィンの発言に気が触れたようで、大島の顔に怒りの色が出始めた。

彼にこの発言は禁忌タブーであったようだ。

「ボクは左利きデスよ」

「何だと?! …へっ、ただのハツタリか」

「ボクの構えを見ても分からないとは…チセイが無いんデスカ？」

「んだとデメェ!!」

大島はアーヴィンの挑発にまんまと乗り、鉄球をぶつけにかかった。だが、そんな単調な攻撃に当たるアーヴィンではない。

「もうあなたの攻撃を見切ったと言ったハズデス!!」

アーヴィンは大島の攻撃すべてを避け、優位に立った。

対する大島は、怒りに任せての単純な攻撃しかないので、当たる筈もない攻撃を繰り返すのみだった。

「いくら俺様の攻撃を避けようが貴様の攻撃は俺様に効かねえんだよ!!」

「何を言うかと思えば：あなたは本気でそう思っているんですか？」

「デメエこそいきがってんじゃねえよ!!」

大島は顔を真っ赤にし、唇を震わせながら渾身の力を込めた鉄球をアーヴィンに投げつけた。

アーヴィンは難なくそれを避け、すごいスピードで大島に近づいた。

「頭だけはキタエられないデスよ?!」

「んな?!」

アーヴィンは渾身の突きを大島の額にお見舞いした。

どうやら物理的にも大島の頭は固かったようで、アーヴィンの手は少しだけ痺れた。

だが、相手を気絶させるには十分な威力だったようで、大島は脳震盪を起こしたのか、そのまま後ろに倒れていった。

「ハア…ボクの勝ち…デス!!」

アーヴィンは大島のバッジを胸からはずし、自分のポケットにしま
い込む。

しかし、彼はそこでふと気がつく。

「嫌な予感が消えナイ…Why？」

アーヴィンの後ろではまだ戦いが繰り広げられている。

アーヴィンは司の身に何かあるのではないかと心配する。
だが…

「?!」

何かを感じてアーヴィンは瞬時に横に跳んだ。

「…新手デスネ」

アーヴィンがさっきまでいた地面は見事なまでに抉れていた。

強敵出現…そう感じた彼の眼に映ったのは、薙刀をもった女子生徒
であった…

第24話 激しいタッグマッチ! 剣士たちの戦い! (後書き)

とうとう彼女が戦闘に参加?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8716h/>

SF

2010年10月15日08時44分発行